発掘調査報告第23集

駒ヶ根東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業(昭和61年度分)

埋蔵文化財緊急発掘調査

高見原遺跡

1987.3

上伊那地方事務所

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第23集

駒ヶ根東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業(昭和61年度分)

埋蔵文化財緊急発掘調査

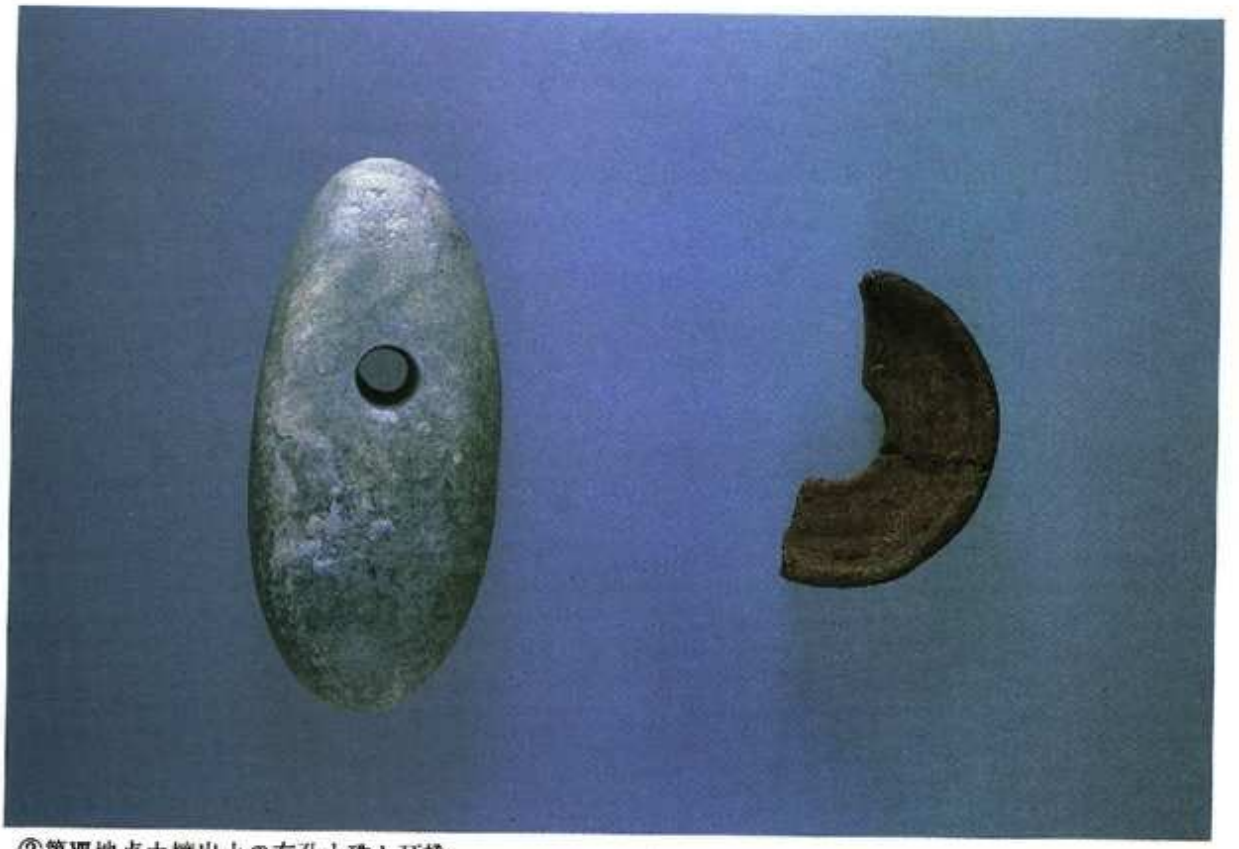
高見原遺跡

1987.3

上伊那地方事務所

駒ヶ根市教育委員会

①第Ⅶ地点縄文時代遺構全景



②第Ⅶ地点土壙出土の有孔大珠と耳栓

③出土陶磁器

序　文

今回ここに、刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根東部土地改良区下間地区の県営ほ場整備事業に伴い、昭和61年度に実施されました高見原遺跡の緊急発掘調査報告書であります。

高見原遺跡は古くから知られた遺跡で、その規模と濃密さは県下でも有数なものであります。今回一部の調査を行った訳ですが、多くの遺構・遺物が発見され、このことを物語っております。

縄文時代の住居址45軒・土壙74基、歴史時代の建物址８棟・土壙５基等々その成果は目を見はらせるものがあり、今後の研究上重要な役割を果たすものと確信いたしております。

長期にわたる発掘調査にあたられた林茂樹団長を始めとする調査団の皆さん、快く発掘作業に参加して下さった地元の方々、事業に対し深いご理解をいただいた東部土地改良区並びに上伊那地方事務所関係者の方々、地主の皆さま方等、多くの皆さまのご協力・ご厚志によって無事初期の目的を果たすことができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が地域史研究の一助にならんことを念願する次第であります。

昭和62年３月2日

駒ヶ根市教育長　　木下　衛

例　言

1　この報告書は、昭和61年度駒ケ根下間地区県営ほ場整備事業に伴うもので、文化庁補助事業と上伊那地方事務所の委託を受けて実施したものである。

2　本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点におき、資料の再検討は後日の機会にゆだねることとした。

3　遺構の製図は気賀沢進があたった。焼土はドットで表し、正位の埋甕はウ・メ、逆位の埋甕はフ・セで表示し、柱穴の深さは床面からの深さをcmで表している。縮尺は各図に示してある。

4　土器の実測は酒井健次、気賀沢が、製図は主として気賀沢があたった。

5　石器の実測、計測、製図は大宮愛子、竹村章子、宮下節子があたった。

6　土器の復元は木下平八郎、小松原義人、和田武夫があたった。

7　本報告書の監修は林茂樹があたり、本文の編集は気賀沢・写真図版は遺物の撮影とともに木下があたった。執筆分担は各項目末に記してある。時間の関係上一部に統一のとれていない点があるがご理解いただきたい。

8　陶磁器の鑑定については長野県埋蔵文化財センター原明芳、市川隆之氏の手をわずらわした。ここに記して謝したい。

9　遺構の測量にあたっては、正確さと時間短縮の面から気球による写真測量を導入し、製図は調査団があたった。

10　遺物及び実測図並びに調査に伴う関係資料は、駒ケ根市立博物館に保管してある。

目　次

巻頭図版
序　文
例　言
目　次
挿図目次
図版目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
第1節　発掘調査に至るまでの経過及び保護措置……1
第2節　発掘調査経過……3
第Ⅱ章　遺跡の環境
第1節　位置及び地形・地質……7
第2節　歴史的環境……11
第Ⅲ章　発掘調査
第1節　発掘調査地点と調査方法……21
第2節　第Ⅰ地点……21
第3節　第Ⅱ地点……42
第4節　第Ⅳ地点……42
第5節　第Ⅵ地点……44
第6節　第Ⅶ地点……63
第7節　東原地点……191
第Ⅳ章　調査の成果と課題
第1節　縄文時代の石器について……192
第2節　縄文時代の集落と土器について……208
第3節　中世及び近世の遺構について……210
第Ⅴ章　総　括
第1節　発掘成査の大要……213
第2節　縄文時代遺跡について……213
第3節　中世及び近世の掘立柱式建物群について……217
駒ヶ根市民の皆さんへ……219

挿 図 目 次

第１図　高見原遺跡位置図……8
第２図　高見原遺跡地形・地籍図……9
第３図　高見原遺跡及び週辺遺跡分布図……13
第４図　高見原遺跡グリット図　（折り込み）……17, 18
第５図　高見原遺跡縄文時代遺構概略図（折り込み）……19, 20
第６図　第Ⅰ地点遺構全測図……22
第７図　第Ⅰ地点第１号住居址実測図……23
第８図　第Ⅰ地点第１号住居址床面出土土器……24
第９図　第Ⅰ地点第１号住居址床面出土土器……25
第10図　第Ⅰ地点第2・3号住居址実測図（折り込み）……27, 28
第11図　第Ⅰ地点第２号住居址床面出土土器……29
第12図　第Ⅰ地点第２号住居址床面出土土器……30
第13図　第Ⅰ地点第３号住居址床面出土土器……33
第14図　第Ⅰ地点第３号住居址床面出土土器……34
第15図　第Ⅰ地点第３号住居址床面出土土器……35
第16図　第Ⅰ地点第４号住居址実測図……36
第17図　第Ⅰ地点第４号住居址床面出土土器……38
第18図　第Ⅰ地点第４号住居址床面出土土器……39
第19図　第Ⅰ地点第1・2・3号土壙実測図……40
第20図　第Ⅰ地点土壙３出土土器……41
第21図　第Ⅳ地点第１号住居址実測図……43
第22図　第Ⅳ地点第１号住居址床面出土土器……43
第23図　第Ⅵ地点グリット設定図……45
第24図　第Ⅵ地点第Ⅲ区グリット設定図……46
第25図　第Ⅵ地点Tr４西壁北壁断面実測図……48
第26図　第Ⅵ地点第１区・２区層位別出土土器……49
第27図　第Ⅵ地点３区層位別出土土器……51
第28図　第Ⅵ地点第２トレンチ第１トレンチ地層断面実測図（折り込み）……53, 54
第29図　第Ⅵ地点第２トレンチ層位別出土土器……57
第30図　第Ⅶ地点縄文時代遺構全体図（折り込み）……59, 60
第31図　第Ⅶ地点歴史時代遺構全体図（折り込み）……61, 62
第32図　第Ⅶ地点第１号住居址実測図……64
第33図　第Ⅶ地点第１号住居址床面出土土器……65

第34図　第VII地点第２号住居址実測図……66
第35図　第VII地点第２号住居址床面出土土器……68
第36図　第VII地点第３号住居址実測図……69
第37図　第VII地点第３号住居址床面出土土器及び土製品……69
第38図　第VII地点第４号住居址実測図……70
第39図　第VII地点第４号住居址床面出土土器……71
第40図　第VII地点第５号住居址実測図……73
第41図　第VII地点第５号住居址床面出土土器……74
第42図　第VII地点第７号住居址実測図……75
第43図　第VII地点第７号住居址床面出土土器……75
第44図　第VII地点第８号住居址実測図……77
第45図　第VII地点第８号住居址床面出土土器……77
第46図　第VII地点第９号住居址実測図……78
第47図　第VII地点第９号住居址覆土出土土器……79
第48図　第VII地点第９号住居址床面出土土器……80
第49図　第VII地点第10号住居址実測図……81
第50図　第VII地点第10号住居址覆土出土土器……83
第51図　第VII地点第10号住居址床面出土土器……84
第52図　第VII地点第11号住居址実測図……85
第53図　第VII地点第11号住居址床面出土土器……85
第54図　第VII地点第12号住居址実測図……86
第55図　第VII地点第12号住居址床面出土土器……87
第56図　第VII地点第13号・14号住居址実測図……89
第57図　第VII地点第13号住居址床面出土土器……90
第58図　第VII地点第14号住居址出土土器……91
第59図　第VII地点第14号住居址床面出土土器……92
第60図　第VII地点第15号・16号住居址実測図（折り込み）……93, 94
第61図　第VII地点第15号住居址覆土出土土器……96
第62図　第VII地点第15号住居址床面出土土器……97
第63図　第VII地点第15号住居址床面出土土器……98
第64図　第VII地点第16号住居址覆土出土土器……100
第65図　第VII地点第16号住居址床面出土土器……101
第66図　第VII地点第17号住居址実測図……102
第67図　第VII地点第17号住居址床面出土土器……102
第68図　第VII地点第18号・19号・22号住居址実測図……104
第69図　第VII地点第18号住居址床面出土土器……105

第70図　第Ⅶ地点第19号住居址覆土出土土器……107
第71図　第Ⅶ地点第19号住居址床面出土土器……108
第72図　第Ⅶ地点第19号住居址床面出土土器……109
第73図　第Ⅶ地点第20号住居址実測図……110
第74図　第Ⅶ地点第20号住居址床面出土土器及び土製品……112
第75図　第Ⅶ地点第20号住居址床面出土土器……113
第76図　第Ⅶ地点第21号・23号住居址実測図……114
第77図　第Ⅶ地点第21号住居址覆土出土土器……116
第78図　第Ⅶ地点第21号住居址床面出土土器……117
第79図　第Ⅶ地点第22号住居址床面出土土器……118
第80図　第Ⅶ地点第23号住居址出土土器……120
第81図　第Ⅶ地点第24号住居址実測図……121
第82図　第Ⅶ地点第24号住居址床面出土土器……122
第83図　第Ⅶ地点第25号住居址実測図……123
第84図　第Ⅶ地点第25号住居址覆土出土土器……125
第85図　第Ⅶ地点第25号住居址床面出土土器……126
第86図　第Ⅶ地点第25号住居址床面出土土器……127
第87図　第Ⅶ地点第25号住居址床面出土土器……128
第88図　第Ⅶ地点第26号・27号住居址実測図……129
第89図　第Ⅶ地点第26号住居址床面出土土器……130
第90図　第Ⅶ地点第27号住居址床面出土土器……131
第91図　第Ⅶ地点第28号・29号住居址実測図……132
第92図　第Ⅶ地点第28号住居址床面出土土器……133
第93図　第Ⅶ地点第28号住居址床面出土土器……134
第94図　第Ⅶ地点第28号住居址床面出土土器……135
第95図　第Ⅶ地点第29号住居址床面出土土器……136
第96図　第Ⅶ地点第30号住居址実測図……137
第97図　第Ⅶ地点第30号住居址床面出土土器……138
第98図　第Ⅶ地点第31号住居址実測図……139
第99図　第Ⅶ地点第31号住居址床面出土土器……140
第100図　第Ⅶ地点第32号住居址実測図……141
第101図　第Ⅶ地点第32号住居址床面出土土器……142
第102図　第Ⅶ地点第32号住居址床面出土土器……143
第103図　第Ⅶ地点第32号住居址床面出土土器……144
第104図　第Ⅶ地点第33号・34号・37号住居址実測図……146
第105図　第Ⅶ地点第33号住居址出土土器及び土製品……147

第106図　第Ⅶ地点第35号住居址実測図……148
第107図　第Ⅶ地点第35号住居址床面出土土器……149
第108図　第Ⅶ地点第35号住居址床面出土土器……150
第109図　第Ⅶ地点第36号住居址実測図……151
第110図　第Ⅶ地点第36号住居址床面出土土器……152
第111図　第Ⅶ地点第37号住居址出土土器……153
第112図　第Ⅶ地点第38号住居址実測図……154
第113図　第Ⅶ地点第39号住居址実測図……155
第114図　第Ⅶ地点第39号住居址床面出土土器……156
第115図　第Ⅶ地点第40号住居址実測図……157
第116図　第Ⅶ地点第41号住居址床面出土土器……157
第117図　第Ⅶ地点土壙実測図……162
第118図　第Ⅶ地点土壙実測図……163
第119図　第Ⅶ地点土壙実測図……164
第120図　第Ⅶ地点土壙出土土器……165
第121図　第Ⅶ地点土壙出土土製品及び石製品……166
第122図　第Ⅶ地点第１号建物址実測図……167, 168
第123図　第Ⅶ地点第２号建物址実測図……170
第124図　第Ⅶ地点第３号建物址実測図……171
第125図　第Ⅶ地点第４号建物址実測図……172
第126図　第Ⅶ地点第５号建物址実測図……174
第127図　第Ⅶ地点第６号建物址実測図……175
第128図　第Ⅶ地点第７号建物址実測図……176
第129図　第Ⅶ地点第８号建物址実測図……177
第130図　第Ⅶ地点溝状遺構実測図……179
第131図　第Ⅶ地点歴史時代土壙実測図……181
第132図　出土陶磁器実測図……182
第133図　第Ⅶ地点鉄製品実測図……185
第134図　東原地点グリット図……190
第135図　東原地点出土土器……191
第136図　打製石斧実測図……193
第137図　打製石斧実測図……194
第138図　打製石斧及び磨製石斧実測図……195
第139図　磨製石斧実測図……196
第140図　大形粗製石匙及び石錘実測図……197
第141図　敲打器（a・b類）実測図 ……199

第142図　敲打器（c類）特殊敲打器・横刃形石器実測図……200
第143図　ハート形石器実測図……202
第144図　小形石器実測図……204
第145図　小形石器実測図……206

図　版　目　次

図版 1　遺跡航空写真
図版 2　遺跡遠景
図版 3　第Ⅰ地点第 1 号・2号住居址
図版 4　第Ⅰ地点第 3 号・4号住居址
図版 5　第 1 地点住居址炉
図版 6　第Ⅵ地点調査状況
図版 7　第Ⅵ地点調査状況
図版 8　第Ⅵ地点地層堆積状況
図版 9　第Ⅵ地点地層堆積状況
図版10　第Ⅵ地点下部地層堆積状況
図版11　第Ⅶ地点第 1 号・3号住居址
図版12　第Ⅶ地点第 2 号住居址
図版13　第Ⅶ地点第 4 号住居址
図版14　第Ⅶ地点第 7 号、8号住居址
図版15　第Ⅶ地点第 9 号・10号・11号住居址
図版16　第Ⅶ地点第 9 号・10号・11号住居址
図版17　第Ⅶ地点第12号住居址
図版18　第Ⅶ地点第13号・14号住居址
図版19　第Ⅶ地点第15号住居址
図版20　第Ⅶ地点第16号住居址
図版21　第Ⅶ地点第18号・19号・22号住居址
図版22　第Ⅶ地点第20号住居址
図版23　第Ⅶ地点第21号住居址
図版24　第Ⅶ地点第21号住居址
図版25　第Ⅶ地点第24号・31号住居址
図版26　第Ⅶ地点第25号住居址
図版27　第Ⅶ地点第28号住居址
図版28　第Ⅶ地点第30号住居址
図版29　第Ⅶ地点第28号・32号・35号住居址

図版30　第VII地点第32号・36号住居址
図版31　第VII地点第38号住居址
図版32　第VII地点土壙
図版33　第VII地点土壙
図版34　第VII地点土壙
図版35　第VII地点遺物出土状況
図版36　第VII地点歴史時代遺構全景
図版37　第VII地点第８号建物址
図版38　歴史時代土壙
図版39　第Ｉ地点出土土器
図版40　第VII地点住居址出土土器
図版41　第VII地点住居址出土土器
図版42　第VII地点住居址出土土器
図版43　第VII地点住居址出土土器
図版44　第VII地点住居址出土土器
図版45　第VII地点住居址出土土器
図版46　第VII地点出土土器及び土偶
図版47　出土土偶
図版48　土製円板と小形石器
図版49　大形石器

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経過及び保護措置

県営ほ場整備事業駒ヶ根市下間地区の昭和61年度施工区域に高見原遺跡が含まれることとなり昭和60年９月18日に県教委・南信土地改良事務所・市教育委員会並びに専門家林茂樹氏出席のもと事前保護協議を行った。

高見原遺跡は、県の重要遺跡の一つであり、今までの調査によっても遺跡密度も濃く、発掘費用・調査期間の問題もあり、区画線の変更等により、盛土保存を図る等調査対象面積を減らすなど工法の検討を要望するとともに、本年度計画している詳細分布調査の結果を待って再協議することとした。

詳細分布調査を昭和60年10月21日から11月23日まで実施した結果を踏まえ、再度の協議を行い、調査費用2160万円（国庫補助事業分594万円、農政部局負担額1566万円）、調査面積3.200m²以上という事業計画を策定した。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、高見原遺跡発掘調査団を組織し、団長には、林茂樹氏をお願いして、昭和61年７月16日より調査に入った。調査実施中、上伊那地方事務所より、高見原遺跡第Ⅵ地点において、当初計画に変更があったため、一部埋立保存を図ることが可能かどうかの依頼があり、県教委とも協議を行い、第Ⅵ地点につていは必要最小限の調査にとどめ、埋立保存を実施することとした。これに伴い調査費用を560万円減額し、1600万円とすることとなり、諸手続を行った。事務手続きは以下の通りである。

昭和61年４月15日　文化財関係国庫補助事業（以下補助事業とする。）内定通知。４月23日申請
５月20日　県費補助事業内示。６月４日申請
６月６日　埋蔵文化財発掘調査の通知
６月25日　上伊那地方事務所長と駒ヶ根市長との委託契約
７月５日　市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との再委託契約
７月12日　国庫補助事業の交付決定通知（６月６日交付決定）
７月16日　発掘調査開始
８月４日　県費補助事業の交付決定通知（７月29日交付決定）
８月14日　上伊那地方事務所長より埋立保存のための工法検討依頼
９月13日　市より埋立保存可能の回答。同日国庫補助事業の計画変更承認申請
９月17日　国庫補助事業分市長と調査会会長との契約
10月３日　上伊那地方事務所長と市長との変更契約　11月７日調査会会長との変更契約
１月19日　県費補助事業の計画変更承認申請

○駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧　問	小平　善信	(駒ヶ根市文化財保存会長)
〃	鈴木　義昭	(駒ヶ根市教育委員長)
会　長	木下　衛	(駒ヶ根市教育長)
理　事	中村　平一	(駒ヶ根市教育次長)
〃	友野　良一	(駒ヶ根市文化財審議会会長)
〃	松村　義也	(　〃　副会長)
〃	竹村　進	(　〃　委員)
〃	中山　敬及	(　〃　〃)
〃	林　越	(　〃　〃)
〃	福沢　正陽	(駒ヶ根市立博物館長)
監　事	宮下　恒男	(駒ヶ根市収入役)
〃	北沢　晋六	(駒ヶ根市郷土研究会長)
幹　事	堀　勝福	(駒ヶ根市教育委員会社会教育係長)
〃	滝沢　修身	(　〃　社会教育係)
〃	気賀沢　進	(駒ヶ根市立博物館)
〃	白沢　由美	(　〃　嘱託)

○高見原遺跡発掘調査団

団　長	林　茂樹	(日本考古学協会会員)	〈発掘担当者〉
調査主任	気賀沢　進	(　〃　)	〈　〃　〉
調査員	北沢　雄喜	(辻沢遺跡研究会会長)	
〃	木下　平八郎	(長野県考古学会会員)	
〃	小町谷　元	(上伊那考古学会会員)	
〃	小松原　義人	(長野県考古学会会員)	
〃	酒井　健次	(　〃　)	
〃	田中　清文	(　〃　)	
〃	吉沢　文夫	(辻沢遺跡研究会会員)	
〃	和田　武夫	(長野県考古学会会員)	(50音順)

駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査事務所　　駒ヶ根市上穂栄町23番1号駒ヶ根市立博物館内

第2節　発掘調査経過

7月16日（水）　器材運搬

7月17日（木）　現地にて発掘調査開始式。器材点検及びテント設営。東原地点草刈2m毎のグリット杭設定の後，8-し，12-し，6-せG掘り下げ。

7月18日（金）　東原地点6-せ・8・12-し，14-こ，16-く掘り下げ。旧地形はかなりの傾斜があったと思われ埋土が厚い。

7月19日（土）　東原地点16・20-し，18-こ，20・24・28・32・36-く，22・26・30・34-か，28・36-えの掘り下げ

7月21日（月）　東原地点40・40-と，40・44-く，42-かを掘り下げするも遺物も少なく遺構の可能性も少ないため，東原地点の調査は一時中断し，第Ⅶ地点の調査を行うこととする。第Ⅶ地点草刈及び2mグリット杭設定の後，8-そ，8-ち，8-て，10-ち掘り下げ。10-ちは地場面に遺物多くあるも他のグリットは水田時の削平によりローム面まで削平されている。

7月23日（水）　第Ⅶ地点（以下特にことわりないものは第Ⅶ地点をさす。）14-ち地場下に旧表土が残り、遺物多く住居址の可能性あり拡張。11-と桑畑土手下試掘住居址床面検出。

7月24日（木）　昨日に引き続きグリット掘り下げ。各グリットより遺物が散発的に出土する

7月25日（金）　前日までに掘り上げたグリットの写真撮影。25-すより柱穴址検出，25-せ，24-すに拡張。24-ちから陶器片出土。

7月26日（土）　各グリットより柱穴址検出されたため水路より北側をⅢ層上面（中世面）まで全面発掘を行うこととする。

7月28日（月）　25・27-さ，22-す，21・22・27-せ，21・22・27-そ，27-ち・つの掘り下げ

7月29日（火）　19～26-し，25・26-そ，25-た・ち，19～25-つ掘り下げ。各グリットより柱穴址検出。

7月30日（水）　18・19・21・22-し，18～24-つ掘り下げ。方形の柱穴址も確認される。

7月31日（木）　水路北側部分の中世面までの拡張終了。水路南側27・29-の，27・29-へ，27-ひ掘下げ。

8月1日（金）　重機によるU字溝の撤去。27-の・ひ・へ，29-の・は・ひ・へ掘り下げ。

8月2日（土）　一時中断していた東原地点の調査を再開する。36～38-す・35・37-せ、36・38-そ掘り下げ。陶器片出土する。
第Ⅶ地点28-な～の，29-ち～と掘り下げ

8月5日（火）　東原地点昨日引き続きグリット拡張，35-そより陶器片出土
第Ⅶ地点，重機により桑の抜根。昨日までのグリットより柱穴址検出されたため，全面発掘に切り換える。27～30-と～へにかけて中世面までの掘り下げ。

各グリットより柱穴址検出。

8月6日（水）　第Ⅶ地点昨日と同様全面拡張。第Ⅵ地点重機による表土はぎ。

8月7日（木）　東原地点，グリットの写真撮影。第Ⅶ地点前日まで拡張した部分の柱穴確認作業。20-そ・た，21-そ・たにかけて円形の落ち込み確認1号住居址（以下○号住とする。）とする。18～26-な，18～26-ほグリット設定。第Ⅵ地点昨日同様表土はぎを重機にて行う。

8月8日（金）　1号住の調査。柱穴址範囲確認に努めるが全面にわたっているものと思われる。26-の，26-は，25-ひより縄文中期の土器が地場及び埋土より多量に出土する。

8月9日（土）　重機により桑畑の表土はぎ行う。21-ふより藤内期の深鉢横だおしの状態で出土。

8月10日（日）　旧桑畑部分にグリット設定し、掘下げ。縄文土器が散発的に出土。盆休みのため、発掘部分に全面シートをかけるとともに、発掘用具すべてをテントに収納する。

8月18日（月）　旧桑畑部分のグリット調査。8-のより住居址らしき落ち込み確認。18-はより石皿が出土する。

8月19日（火）　桑畑の表土はぎ重機にて行う。7・8-ねより住居址検出。

8月20日（水）　引き続き重機による表土はぎ行う。検出されている柱穴址を掘り下げる。三分の一ほどは柱穴址とは考えられない。

8月21日（木）　柱穴址調査。1号住の清掃。

8月22日（金）　柱穴址、溝状遺構の調査。

8月23日（土）　柱穴址、溝状遺構の掘下げ。中世と考えられる第8号建物址の調査、天目茶わん出土。下部には縄文中期の住居址があると思われる。

8月25日（月）　2号住・8号建物址、溝状遺構の調査。2号住は東半分以上は用地外となっている。2号住南に円形すり鉢状の土壙検出。さらに西側より住宅址らしき落ち込み確認。8号建物址は壁が明白でない。

8月26日（火）　2号住清掃埋甕確認される。2号住の西側住居址4・5号住調査。5号住には土壙が3基掘られ、住居址の形態は明らかでない。5号住土壙内より土偶頭部出土する。

8月27日（水）　2号住・3号住清掃。柱穴址の掘下げ。8号建物址調査柱穴は内部には確認されず外側にみられる

8月28日（木）　柱穴址の調査・3～5号土壙掘下げ。第Ⅵ地点のグリット設定。

8月29日（金）　柱穴址の調査・4・5号土壙掘下げ。第Ⅵ地点のグリット設定。

8月30日（土）　第Ⅶ地点柱穴址の清掃。第Ⅵ地点3・5-く，4-け，3・5-さ，4-し，3・5-せ，4-そ，5-ち掘り下げ。

9月1日（月）　第Ⅵ地点柱穴址の写真撮影。第Ⅵ地点グリット掘り下げ。黒色土（Ⅲ層）深

くA・B2層に分類。縄文土器多量に出土。

9月2日（火）　昨日に引続き、第VI地点グリット精査・遺物は多量に出土するも遺構は検出されず。第VII地点柱穴址一部平板による実測

9月4日（木）　第VI地点前日同様グリット精査。第VII地点柱穴址及び住居址の遺構測量をパスコによる気球測量で行う。柱穴址の全体測量平板にて実施。

9月5日（金）　第VI地点グリット掘下げ、深い所は1.8mに及ぶ。柱穴址の全体測量完了。テント移動。4号住の精査

9月6日（土）　第VI地点，水が湧き出し、排水溝を掘ったりでなかなか作業ははかどらない。38-せより土器が多量に出土。4号住精査

9月8日（月）　第VI地点南側トレンチ断面実測。38-せより土偶出土。第4号住精査住居内土壙13より深鉢出土

9月9日（火）　旧テント位置の表土はぎ重機にて行う。4号住埋甕炉土器取り上げ。2号住埋甕取上げ。7号住・7号土壙精査。第VI地点北側トレンチ断面実測。

9月10日（月）　7～11号住調査、10・11号住は9号住に貼床している。第IV地点表土はぎ重機にて行う。

9月11日（木）　8号住・10号・11号住精査及び清掃，中世の柱穴址群の下部にある縄文中期の住居址に取りかかる。第VI地点37-そ～ち，38-そ～ちまでIII-C層まで掘り下げ土器多量に出土する。第IV地点引続き表土はぎ。

9月12日（金）　9・10号住清掃．12号住精査土壙によってプランは明確でない。床面をわずかにくぼめて磨製石斧4点と黒曜石片6点が並べられて出土。住居址は複雑な切合状態で全面にわたっていると考えられる。13～16号住掘下げ。第VI地点グリット清掃。

9月13日（土）　9～11号住清掃、12号～16号住精査、13号住は開田のさいの取り地場となっており、壁はほとんどない。

9月16日（火）　10・11号住貼床を壊して9号住調査。13号住より伏甕出土。14～16号住調査。

9月17日（水）　9号住調査。10号住内土壙掘下げ。14～16号住精査

9月18日（木）　14～16号住精査。南側に17・18号住確認調査

9月19日（金）　12～16号住清掃、18～21号住精査。

9月20日（土）　18～21号住精査

9月21日（日）　18～23号住精査。19号住より一段高い床面検出22号住とする。20号住ピット内より深鉢出土。21号住は炭化物・焼土が堆積しており遺物もまとまって出土しており火災にあったものと思われる。19号住埋甕並んで検出。15・16号住清掃各住居址より埋甕検出。

9月22日（月）　24～27号住調査。26号より方形の石組を検出。第I地点重機にて表土はぎ。

9月23日（火）　24～29号住調査。18・19・21・22号住清掃。

9月24日（水）　29～32号住調査。31号住は30号住へ一部貼床している。

9月25日（木）	気球による遺構測量の後、25号住精査。30号住、33・34号住調査。第IV地点1号住検出調査
9月26日（金）	21号・25号住精査。35～37号住調査。第IV地点1号住清掃
9月27日（土）	21号・33～38号住調査。気球による21号住、25号住の遺構測量。
9月28日（日）	33～41号住及び各土壙掘下げ。29号土壙大形土器が出土。
9月29日（月）	昨日同様各住居址及び土壙調査，第Ⅰ地点1～4号住調査
9月30日（火）	第Ⅰ地点1～4号住調査・清掃・第VII地点各住居址清掃。各住居址の埋甕取り上げるも一部残る。補充調査・測量・埋戻し並び器材撤収残して一応現場作業を終了する。
10月1日（水）	埋甕取り上げ雨のため中止
10月2日（木）	埋甕取り上げ及び第VI地点湧水地点埋戻し
10月3日（金）	第VI地点埋戻し。
10月4日（土）	器材撤収。
10月6日（月）	気球による最終遺構測量。

第II章　遺跡の位置と環境

第1節　位置及び地形・地質

1　位置（第1・2図）

高見原遺跡は、長野県駒ケ根市中沢地区の中割区（4100番地代）及び菅沼区（2400番地代）にわたる原垣外及び横山地籍に所在する。

標高666mを測る舌状台地で、背後には伊那山地を前山としてその東方に赤石山脈の高峯仙丈ケ岳（3013m）を望み、西方は水平距離約16kmを距てて木曽山脈の高峯宝剣岳（2933m）および氷河地形の千畳敷カールを正面に、さらにその南方に連なる空木岳、北方に連なる前岳，将棋頭および経ケ岳等いわゆる中央アルプスの連峰のすべてを一望のもとに眺めその直下の河岸段丘の田切地形や扇状地に展開する駒ケ根市赤穂、宮田村、伊那市の市街や集落および天竜川谷を眼下に見おろすことができる眺望絶佳の景勝の地である。

交通上から見れば、中央自動車道駒ケ根インターおよび国鉄飯田線駒ケ根市駅のある駒ケ根市赤穂元標から、主要地方道駒ケ根一長谷線を東方に向かい、天竜川を渡り同市中沢地区に至る距離6kmの地点に所在する。遺跡の北西300mの位置に所在する中沢公民館前に建つ旧中沢小学校位置表示の元標には「東経137°59′18″ 北緯35°43′20″」が記されている。

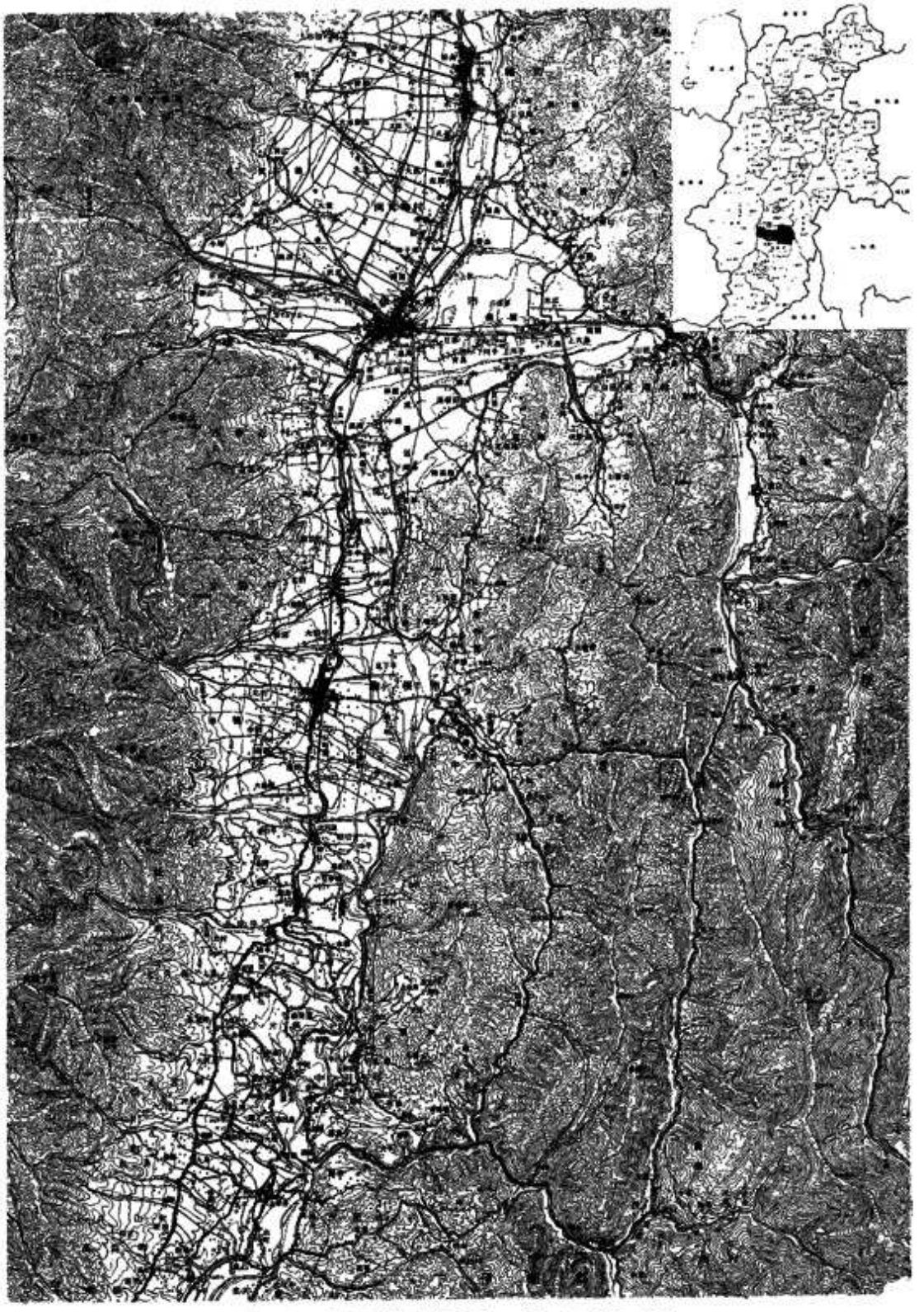
2　地形（第1図・第2図）

高見原遺跡は、諏訪湖に発し静岡県浜松市で太平洋に注ぐ天竜川上流部の伊那盆地に在る駒ケ根市地域の天竜川左岸に形成された河岸段丘上に位置する。

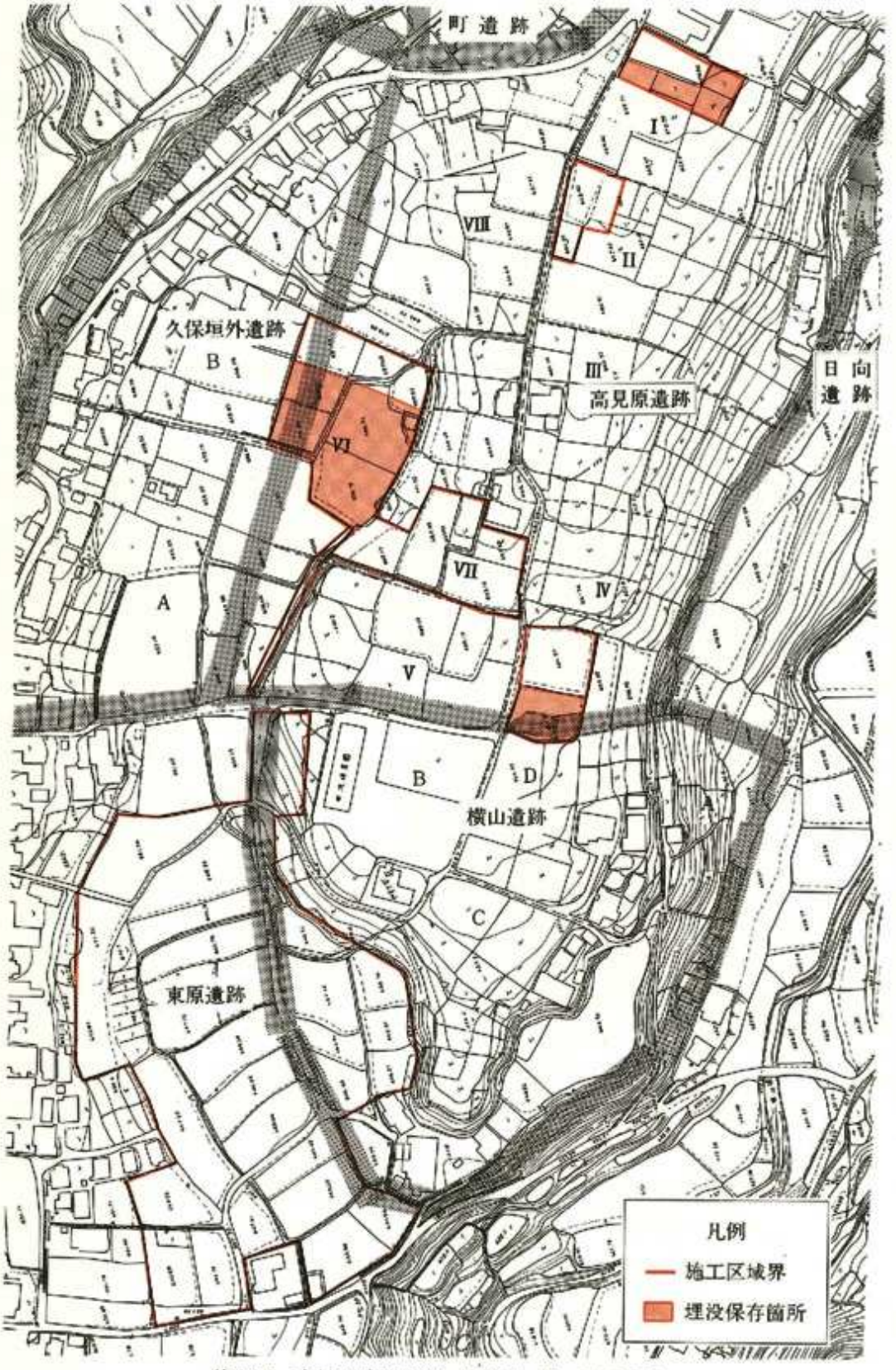
この段丘地形をやや詳しく観ると、天竜川河床面を零として5段を数える段丘が階段状に形成されているが、本遺跡のある高見原面はその最上位段丘に当たり第5段丘面として良い。

高見原段丘は、東方蔵澤寺の所在する尾根の山麓下を基部とし、幅200m～150mをもって西方に向かって長さ約1,000mの突出する舌状台地として形成されている。本遺跡はこの舌状台地の中心部から西半の大部分を占め、東西330m、南北200m、およそ70,000m²の範囲に展開している。なおその西部には引き続き、丘陵尖端部に至るまで、横山遺跡で占められている。

この段丘の周辺は、赤石山脈に並行して、日本列島の大地溝帯糸魚川構造線の内帯側を南北に走る伊那山地の西側山麓線が天竜川に突出し、川に侵蝕されて渓谷状を呈する中において、中沢地区は伊那山地の主峯戸倉山（1680.7m）が東北方に、陣馬形山（1445.3m）が南方にそびえこれらの山地に囲まれた東西2,000m、南北1,000mほどの盆地状地形を呈し、周囲の山地から供給される土砂および対岸大田切川から供給される過剰堆積により段丘礫層が堆積し、厚さ50m余の礫層を形成し、この盆地状堆積面を伊那山地から西流する新宮川、下間川により盆地の北側および南



第１図　高見原遺跡位置図　（S＝1：200,000）



第2図　高見原遺跡地形・地籍図（S＝1：3000）

側を深く侵蝕され比高約50mの河谷が形成され、西端部を南流する天竜川に侵蝕され、前述の雛段状段丘を伴う東西2,500m南北600mを測る台地状地形が形成されたのである。この台地上に中沢地区の中割区、下割区、菅沼区があり中心集落が存在することから「中沢台地」と仮称する。本遺跡は中沢台地の最上位部分に前述のように形成された高見原段丘上に位置しているのである。

3　地質（第2図）

本遺跡所在地および周辺地域の地質構造は、前述地形で述べたように、日本列島の大地構帯に接した内帯側に属するためその様相は異相で、しかも複雑で学術的に未解明な点が多いがその概要を述べよう。

当地域の基盤は、内帯側における領家変成岩帯と領家花崗岩帯の接触地帯で複雑な構造を持つ。南方の陣馬形山塊は領家変成岩帯で当遺跡所在地点もこれに属するが、同じ片状ホルンヘェルス地帯でありながら陣馬形山は硅線石帯であり当遺跡付近は菫青石帯（R2）である。遺跡付近はこの岩盤の上に段丘礫層が厚く堆積し、片麻岩、花崗岩、砂岩、変輝緑岩、頁岩、泥岩の河床礫から成っている。

この段丘礫層は、前述のように、新宮川、下間川二川の河底より比高50mを測る厚さをもつ「中沢台地」の内容となっており第三紀における過剰堆積のもの凄さを想わせるものである。

この堆積作用が行われた後、西流する前述二川およびこれに直交する天竜川により侵蝕作用が激しく行われ5段を数える河岸段丘が徐々に造り出され舌状を呈する大台地地形の「中沢台地」を現出させたのである。この中沢台地の東西中軸線の基部寄りに位置する高見原丘陵は、段丘面上に湧出する自然湧水により侵蝕されて北側が凹地となり、南側は前述下間川に侵蝕されて中沢台地の一支脈として狭長な舌状丘陵が形づくられていったのである。

第四紀末に至って、水平距離50km西方に位置する御岳山が噴出しその爆発による火山灰の降下が著しく中沢台地全体が火山灰に厚く覆われてゆくのである。これが現地表となっているテフラ層（ローム層）である。

高見原丘陵の上面全体は厚さ10mを測るテフラ層に覆われその下部中位に厚さ80cmの黄色パミス層が整合状に介在しPm1と認められ、古期テフラ層上位または中期テフラ層最下位からの風成テフラ堆積層と考えられる。縄文時代竪穴式遺構はこのテフラ層の最上部、いわゆる新期テフラの最上面を掘りあげて構築されていることが過去の発掘調査で判明している。

テフラ層の上部は、後氷期以後の植生腐植物層が30cm内外堆積し現在耕土として利用されている黒色土壌である。

ただし丘陵北側の比高差8m余の凹地（第VI地点）の土層堆積状況は若干異なる。ここでは段丘の湧水の侵蝕でテフラ層はPm1層上部まで消失し舌状丘陵の中軸線に並行する幅100mの小規模な侵蝕谷を形成しているため、地表の黒色土層は1m～3mの厚さに堆積し、1mの深さで湧水現象が見られる。その北側に続く段丘、久保垣外面は新期テフラ層のみが堆積している。

以上述べたように、「中沢台地」は、いわゆるローム層の丘陵地形であって住民の生活に深くかかわっているのである。

第2節　歴史的環境

1　高見原遺跡（横山遺跡を含む）（第2・3図）

本遺跡の所在する俗称原垣外、同横山地籍は広い畑作地帯で、平端面及び南側斜面は、古来から土器、土偶、石器の完型品及びおびただしい破片が出土し、住民及び関係者の関心を呼んでいた。本遺跡の小字地名「高見原」は、当地域の中世の地頭職高見氏および古村名高見村に由来する遺存地名と思われる。考古学的に著名になったのは、大正13年、上伊那教育会主催による上伊那各地の出土遺物調査事業で、東京大学人類学教室鳥居博士の踏査により先住民族の遺跡地としてその著「先史及原史時代の上伊那」に「法昌寺」の地名で記載された。その後出土遺物がおびただしく採集され、中沢小学校郷土室に展示された。

昭和27年、長野県教育委員会は「信濃史料」編さん事業のため全県下にわたる遺跡および遺物の網羅的調査を実施した際、調査員藤沢宗平氏が中沢地区の現地踏査を行った結果、大きな縄文時代遺物包含地として認め、「信濃史料第一巻上（遺跡地名表）」に記載されると共に、県教委の「遺跡台帳」に登録された。

昭和28年中心部の4159番地畑から縄文時代中期藤内II期に所属する竪穴式住居址が発見され、中沢中学校郷土クラブ（指導　林茂樹）が発掘調査した。また同年11月台地尖端部南側の横山A遺跡が発見され同クラブによって発掘調査し、縄文草創期・早期、平安時代の遺物、遺構の存在が確認され、当時の全国学界に知られるようになった。続いて昭和36年横山B遺跡2402番地に縄文中期初頭の竪穴式住居址1軒が同クラブによって発掘された。

昭和48年、県教委は、文化財保存事業の一環として、本遺跡を、全国的に著名な伊那谷河岸段丘上に所在する大遺跡と認め、高見原、横山地籍10ヘクタールに及ぶ遺跡地帯を「重要埋蔵文化財包蔵地・高見原遺跡」として指名・登録し積極的保護の方針を示した。

昭和50年老人福祉施設「やすらぎ荘」建設に伴う記録保存事業として駒ケ根市教育委員会の発掘調査が行われ、縄文時代前期終末の竪穴住居址1軒を発見した。学界未知の個性を持つ遺跡として注目された。

続いて昭和54年、中沢保育園建設に伴う発掘調査が東接地点で行われ、第1号住居址と同期の住居址3軒土壙111基が発見された。高見原法昌寺は廃寺跡として注目され、4190番地代は中世の遺物を多く出土し、横山遺跡B地点南端にも灰釉陶器及び古瀬戸陶片が出土している。

昭和58年の秋、高見原丘陵の南側丘麓の下間川沿岸の下間遺跡が、県営ほ場整備の水田化事業により基盤から全く破壊され消滅してしまった。

続いて翌59年4月、本丘陵先端部南側斜面に所在した横山A遺跡が同事業による水田化事業で破壊され全く消滅し去ってしまった。縄文時代草創期の表裏縄文土器や早期の押型文土器を包含し、学会で注目されていた学術上、極めて貴重な遺跡が何ら調査の手を加えることなく闇に葬り去られたことは、全く遺憾そのもので、文化財保護思想が社会的に昂揚した今日、文化財保護行

政上からみても、大きな汚点を残したといえよう。また前述のように県内で重要度の高い本遺跡のひとつの核を失ったことになるのである。

昭和60年度に至り、数年前から中沢地区で実施していた県営ほ場整備事業が進渉し、本遺跡地帯は、駒ケ根市東部土地改良区の下間地区の計画範囲に編入され、改田事業が実施されることになったため、市教育委員会は、県教委及び文化庁と協議し「国宝・重要文化財等保存整備事業」として「詳細分布調査」を実施し、高見原遺跡の埋蔵状況を具体的に把握することにより、土地改事業による破壊に対応し保護策を講ずることとなった。昭和60年10月21日に着手した分布調査は、高見原遺跡の周辺凡そ15haにわたって試掘坑を100個設定し、約１ケ月余の現場調査を続行した結果、本遺跡全域にかけて、縄文時代中期の遺構、遺物を中心として、古代、中世に至る文化財が埋存すること、西方の横山遺跡は遺跡地が接続すること、周辺に久保垣外遺跡、東原遺跡、日向遺跡、下間遺跡、中世町遺跡がそれぞれ接続して存在していることが判明した。これを集約し、各遺跡と高見原遺跡の境界を設定し、本遺跡地籍図に明示し範囲を確認することができた。(第２図)

また本遺跡が70,000m²にわたる広範囲な遺跡であることから、今後の保存と調査に資するためその内容・地形を検討した結果９区分し、丘陵の中央陵線を境に南傾斜と北傾斜に２分しこれを東部から西方に向かって４区分し、東部南側から第Ⅰ地点～第Ⅳ地点、西端横山遺跡との接続部分を第Ⅴ地点、北側は北側凹地久保垣外遺跡接続部分東部までを第Ⅵ地点～第Ⅺ地点とした。

これと共に西接する横山遺跡30,000m²をＡ地点からＤ地点まで区分した。同一丘陵内に存在しその重要性も共通するからである。

以上の永年にわたる調査を通じて判明してきた本遺跡の歴史性を概観してみよう。まず前述の13地点には，それぞれ**縄文時代**の集落遺構が１単位以上埋存されていると推定されることである。加えて横山Ａ地点には縄文時代の草創期及び、早期文化の生活遺構、同じくＣ地点には縄文時代早期後葉の茅山式期や中期初頭の集落が埋存し同Ｂ地点には前期末葉の集落址の存在が確実視され、同Ｄ地点には、中期後葉の集落址の存在が確認されている。高見原遺跡の範囲内においては前述したように縄文中期初頭から後葉に至る集落址が密集しているものと予察できる上に、特筆すべきは第Ⅱ地点において前期中葉の集落址の存在を窺うことができることと第Ⅵ地点とされる凹地は、縄文時代の低湿地遺跡として重要でかなりの遺物・遺構の存在が予察できることである。

次の**弥生時代**は、若干の土器片が第Ⅵ地点に散見する程度で余り顕著でなく、引き続く古墳時代も同様である。北接する久保垣外遺跡や北西接する東原遺跡に弥生古墳時代の遺物が採集されていることから、この時期には第Ⅵ地点の湿地帯を利用して稲作を行うため、自然条件のよい北側の前記遺跡に移動したのかも知れない。

奈良・平安時代の遺物も同様で横山Ａ・Ｄ地点に竪穴住居址がわずか確認されたにすぎず、北側丘陵の久保垣外、東原地帯に形成されたと推定される。

中世の文化遺物や遺構は再びこの高見原丘陵に集中して発見されている。高見原第Ⅳ地点には南傾斜面に幅10mなどの堀跡が南地方向に走り深さ7m以上と推測できる堀跡が遺存し、その東側に方形に区画された地点があり、それぞれ「ほりばた」・「じょうばた」と俗称されており、この

1. 高見原　2. 横山B　3. 横山A　4. 日向　5. 東原　6. 久保垣外　7. 町　8. 高見坪の内　9. 上垣外　10. 門前　11. 的場　12. 高見城址　13. 小山　14. 羽前場　15. ごみ垣外　16. 細久保　17. 梨ノ木平　18. 菅沼　19. 菅沼城址　20. 大楽寺跡　21. 古城南　22. 古城址　23. 五郎垣外　24. 太座垣外　25. 小林　26. 徳光地　27. 下間　28. 香花社　29. 白山城　30. 一本柿　31. 小山　32. 柴　33. 原城址　34. 曽倉城址　35. 持木平

第3図　高見原遺跡及び周辺遺跡分布図（S＝1：20,000）

地点および堀跡の西部これにつづく横山D地点から古瀬戸灰釉陶片がそれぞれ出土している。またじょうばたに続く第VII地点の北側は高さ8mほどの急斜面が60°近い傾斜に整形されており「じょうばた」の南側斜面と同じで中世城郭の城壁を思わせるものがある。また東部の第IX地点および第I地点南斜面にかけて内耳土器破片古瀬戸灰釉陶片が出土している。その東部の南傾する日向坂の道は丘陵中軸線と直交する凹地で中世の堀跡と推定される。また第IV地点から第VII地点がいわゆる「法昌寺」の地名を残し廃寺跡と伝承されている。

近世は、元禄三年の高遠藩検地帳から見れば一面の畑作地帯として利用されていたと考えられる。近代に至って大正末年、伊那索道会社の鹿塩線ケーブルの中継基地が建設された。

2　周辺の遺跡（第3図）

高見原丘陵の乗る中沢台地一帯および対岸の下間川左岸、新宮川右岸には縄文時代から中世に至る遺跡が30箇所近く存在するので時代の推移に伴ってその概略を紹介したい。

旧石器時代は今の処発見されていないが、洪積世の段丘地形と地層で構成されており台地の各所に自然湧水地点があるのでその付近で、近い将来発見される可能性が高い。

縄文時代の遺跡は、天竜川沿岸の下位段丘から高位に向かって述べるとまず第二段丘に古城南遺跡（21・中期）があり、続いて新宮川沿岸に柴遺跡（32・後期）、第三段丘には高見原遺跡に西接する東原（5・中期）、久保垣外（6・中期）、日向（4・中期）、下間（24・中期）、持木平遺跡（35・中期）が高見原遺跡の衛星的地位を保つように所在している。高位の第四段丘面では高見原の東方500mに的場遺跡（11・早期・中期）、門前・荒井遺跡（12・中期・後期）、上垣外遺跡（9・中期）が高見原丘陵の基部的位置に群集している。

本台地の南側対岸の下間川流域には、下流から梨の木平（17・中期）、細久保（16・中期）、小山III（31・後期）が狭い山麓線に並列している。

本台地の北側、新宮川を距てた対岸の、本曽倉地区には、下流から山麓の小規模な台地上に五郎垣外遺跡（23・中期）、太座垣外（24・早期）、河岸に近い低位段丘上に小林遺跡（25・中期・後期）が所在している。

以上のように中沢台地は縄文時代人の生活痕跡がいたる所に遺存しており、特に中期の遺跡が濃密に存在し、採集漁撈生活の生活文化の盛行ぶりは著しいものがあり、この生産条件を満たす自然条件を十分に備えていた地域であったと考えられる。

弥生時代の遺跡は、前代に比べ急激に衰退し、わずかに菅沼の上の原（後期）、中割の久保垣外（6・後期）、下間川の南岸の羽前場（14・後期）に遺物が散見する程度である。稲作農耕を中心とした弥生人の生活条件には適さないことは、中沢台地面は高燥で水が少なく、段丘地形のため傾斜面が多いことなどを原因としてよいであろう。

古墳時代も、農耕生活が中心であったため弥生時代と同じく発展していない。東原（5）の旧中沢小学校敷地に明治年代には数基の小さな墳丘があったことを伝承しているのみであり、遺物としては、古式須恵器が菅沼細久保から出土している。

奈良・平安時代の遺跡は、高見原丘陵の周辺に急に増加してくる。中沢台地の内央部の西部か

ら東原遺跡（5・平安）、久保垣外遺跡（6・平安）、徳光地（26・平安）と東方に連なり新宮川の低位面にある坪の内遺跡（26・平安）に続き、更に台地上の的場（11・平安）、荒井（10・平安）、一本柿（30・平安）と続き、さらに台地の南対岸の山麓にごみがいと遺跡（15・小山第II・平安）その下間川下流に梨の木平（17・平安）等それぞれ灰釉陶器・須恵器・土師器が伴出する遺跡10数基が台地の周縁に沿って展開している。奈良時代の遺物は今の所見当たらなく平安時代遺物のみが出土しているのは、中央集権国家として整備された平安京政府の権力がこの地にもゆきとどき、水源の開発が行われ、農耕地の開拓、材木の搬出等、生産の昂揚があった結果をものがたるものと思われる。

鎌倉・室町時代になると、中沢台地の中心部に数多くの遺跡が集中する。まず台地基部、的場（11）、一本柿（30）、白山城（29）、坪の内（8）、香花社（28）、高見城址（12）、町（7）、日向（4）、高見原（1）、横山（2）とほぼ台地の中軸線にそっておよそ1kmほどの長さに展開している。

また台地の南対岸に小山Ⅰ遺跡（13）がある。これは昭和59年10月、発掘調査により発見された室町時代中期に造営された単郭方形居館址であった。その規模は東西60m、南北50mのやや長方形に土塁をめぐらせ、内部約3,000m²には掘立柱建物跡30棟（重複）、池泉跡、水路跡、門跡、櫓跡が検出され、古瀬戸灰釉四耳壺や瓶子はじめおびただしい中世陶片、鉄製品等が出土し、15世紀代の初頭から終末に至る約100年間継続された豪族の生活址であることが判明した。

また、中沢台地の基部の北側、新宮川沿岸の低位段丘面に坪の内遺跡（8）が、昭和60年10月発見された。地表下2mの層位に掘立柱建物があり、灰釉陶器・山茶碗・青磁などを共伴しており、およそ12世紀後半または13世紀前半の時期の遺構と認められた。なお「ねずみ」の郭を遺存する。

この時代の地上の遺構として現存するものも、この台地上に数が多い。まず坪の内遺跡の西方100mにある香花社（28）は新宮川谷に突出する円形の残丘上にあるが、この円丘をめぐる周濠跡が、昭和60年10月、土地改良事業により発見され、古瀬戸灰釉陶器が出土していて、古式城郭と認められた。また坪の内遺跡の南方の50mの高位段丘上に白山城址（29）があり、単郭長方形の郭が遺存し古瀬戸灰釉陶片が多く出土している。その西南方に高見城址（12）があり西城郭、外城郭を遺存し周辺に「ほり」「かどた」「つつみばた」「東門」「的場」（11）の中世地名が遺存し、西部の陵線上に「ますがた」と直線道路と屋敷割を残す町遺跡（7）が現存していて、中世城郭と町屋形式のおもかげをとどめている。以上の主体は高見原丘陵の中軸にそって造営されており、先学の説えた高見城の中心施設と考えられる。また本台地の最西端には古城址（22）が天竜川に臨む崖上に残存し、台地の最西南端の突角崖上に菅沼城址（19）が主郭、副郭、空掘、枡形道を遺存している。

また台地の北側対岸の本曽倉区には曽倉城跡が現存し、その西北1k地点、第二段丘上の突角に原城址（32）が郭跡を遺存している。また高見城址の東方1kmの山麓突角に内城址が位置する。

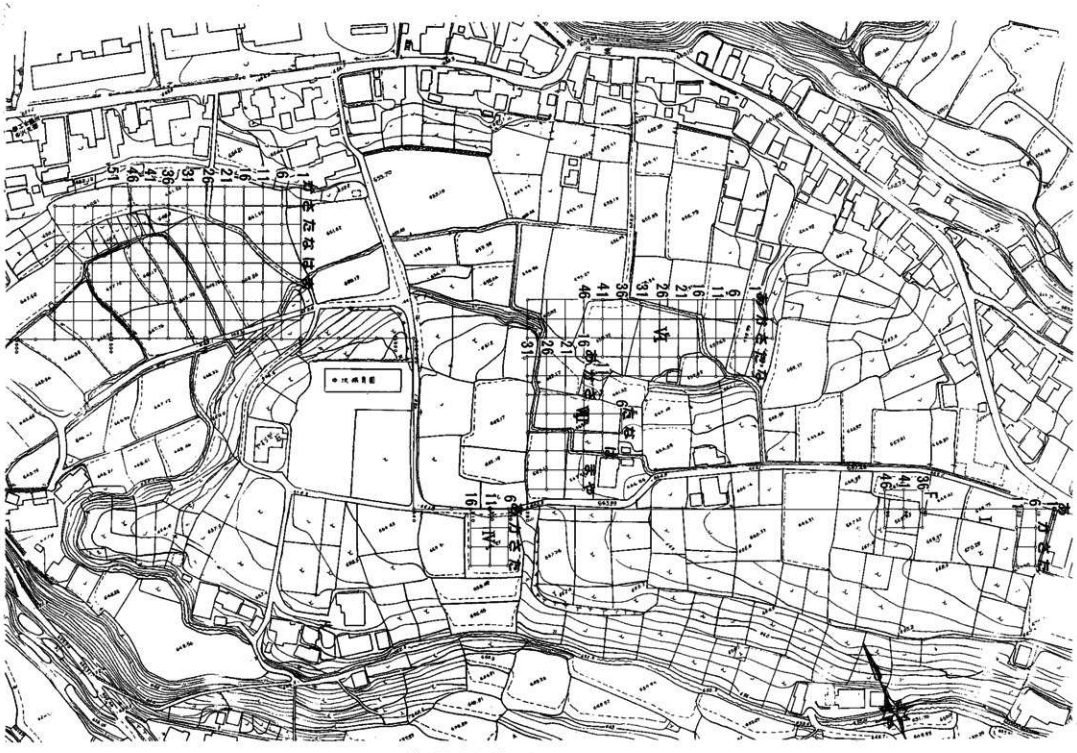
以上の城郭跡は、戦国時代の甲斐武田氏統治以前の構築と目され、この中で古期形式をとどめるものは古城址・香花社城址と考えられ、他は14世紀から16世紀前半期のものと考えられる。いずれにしても、この高見城を中心としてその防御のために構築された城跡群であろうことは配置関係から推定できるのである。また菅沼区大楽寺跡に、「明徳三年」の宝篋印塔が現存する。

このことを中世の文献史料と照合してみるとまず「鎌倉幕府下知状」に記載されている嘉元四年（1312）銘「信濃国伊那郡中沢郷地頭職中沢太郎真氏」があり、また香坂文書中に残る永享四年（1432）記名の「中沢衛門尉」・諏訪上社関係文書として著名な「諏訪御符札之書」に記録された文明十九年（1487）の「中沢高見打死」があり、中沢郷の統治権を持つ在郷の豪族の名を伝えるものである。この時期の遺構、遺物が密集している中沢台地は、三峯川以南、陣馬形以北の地域を一括統治した中沢氏の本拠であったことを明らかに示しているのである。

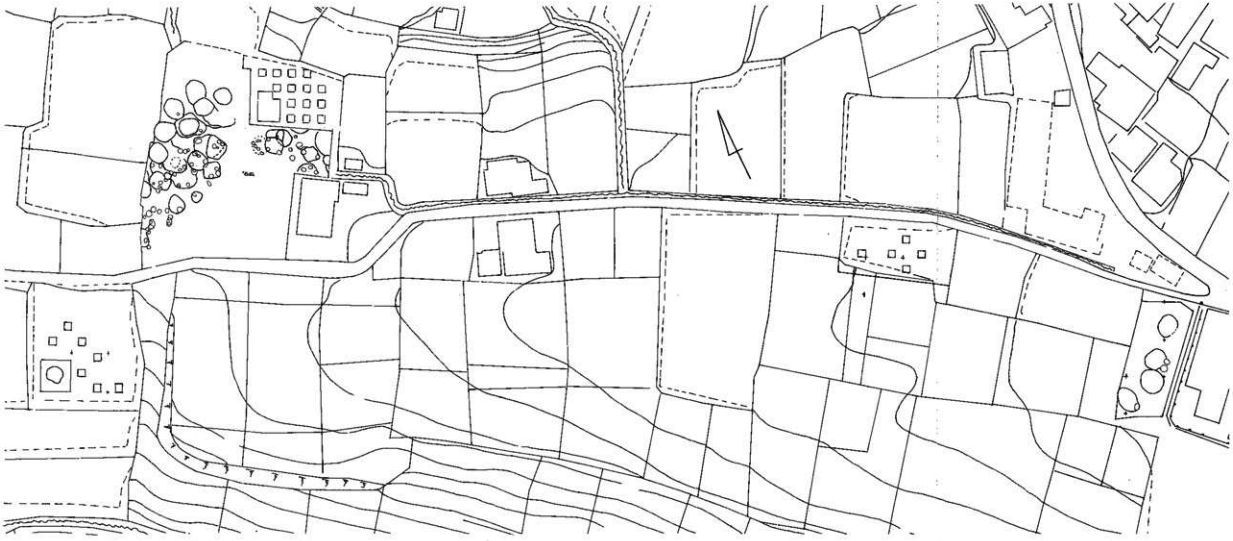
以上述べたように中世の遺構・遺物を濃密に遺存する地域は、余り他に例を見ないのである。日本の中世史上から見て誠に貴重であると思われる。

近世に至って中沢台地上には、上高見村・下高見村・菅沼村の三集落が成立し高遠藩領として統治され、300年間の純農山村の形態を守りつづけ近代に至ってもなお、中沢村の役場、学校、郵便局、農業協同組合等の施設が置かれ、村11部落の行政、文化、教育、経済の中心的地位となって現在に至っている。

（林　茂樹）



第４図　高見原遺跡グリッド図S＝1：2000)



第５図　縄文時代遺構概略図（S＝1：1000）

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　発掘調査地点と調査方法（第２・４・５図）

高見原遺跡は第Ⅱ章で述べたとおり非常に広い範囲にわたる遺跡であり、また過去にも何回かの発掘調査が行われてきている。

今後、宅地造成など開発行為に伴う発掘調査も増加することが考えられるため、遺跡全面に、グリット網を設定できるよう、台地の中心部を通る道路上に基準線を設けることとした。

発掘調査地点が第Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ・東原地点ととびとびの状態であるため、グリットの設定は、各地点毎に各々のグリット名を付けることにし、遺構名についても各地点毎とした。各グリット名は北東を基点とし、南方向へ50音順、北方向へアルファベット、西方向へ算用数字を用い統一した。

調査方法はグリット試掘ののち遺構確認等必要に応じ全面発掘に切り換えて行った。

層位は耕作土（黒色土）―Ⅰ層、地場（水田）及び埋土―Ⅱ層、黒色土（旧表土）―Ⅲ層、漸移層（暗黄褐色土）―Ⅳ層、黄褐色土（ローム層）―Ⅴ層とし、これを標準とし必要に応じ層位を付け加えることにした。工期の都合上やむを得ず重機を用いて表土はぎを行った。各地点毎の詳細は、各項においてふれることとする。　（気賀沢　進）

第２節　第Ⅰ地点

１　概要（第２・５・６図）

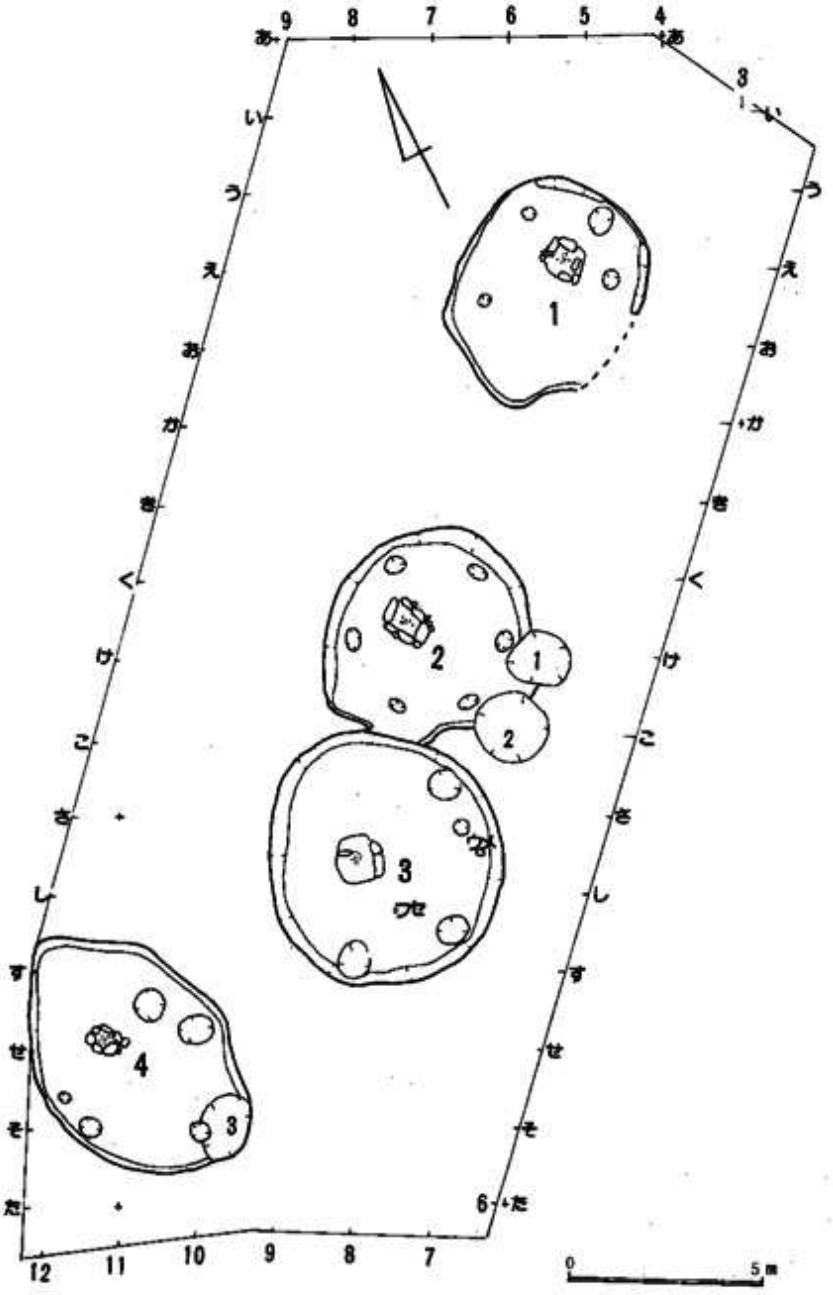
第Ⅰ地点は当遺跡の東端に位置し、中央道路沿いは、水田となっているが大部分は桑畑・野菜畑となっている。

今回ほ場整備事業においては、水田と一部畑が施工区域となったが、水田と畑とは比高差があり、基盤が包含層に達しないよう若干工事の際盛土をして埋立保存できる状態となったため、最上段の水田部分のみの調査を行うにとどめた。

調査は工期の都合上第Ⅰ層及びⅡ層の一部を重機において表土はぎを行った。

第Ⅰ層耕作土は25cm前後、地場は比較的軟らかく5cm前後である。調査区北東部あ～う―2～4グリット部分は開田時にすでに第Ⅴ層まで削られていた。旧地表面は北東から南東に向かって傾斜しており12―たグリットにおいて第Ⅱ層埋土は60cmを測った。

確認された遺構は縄文時代中期の住居址４基と同期の土壙３基である。　（気賀沢　進）



第6図　第Ⅰ地点遺構全測図（S＝1/200）

2　遺構と遺物

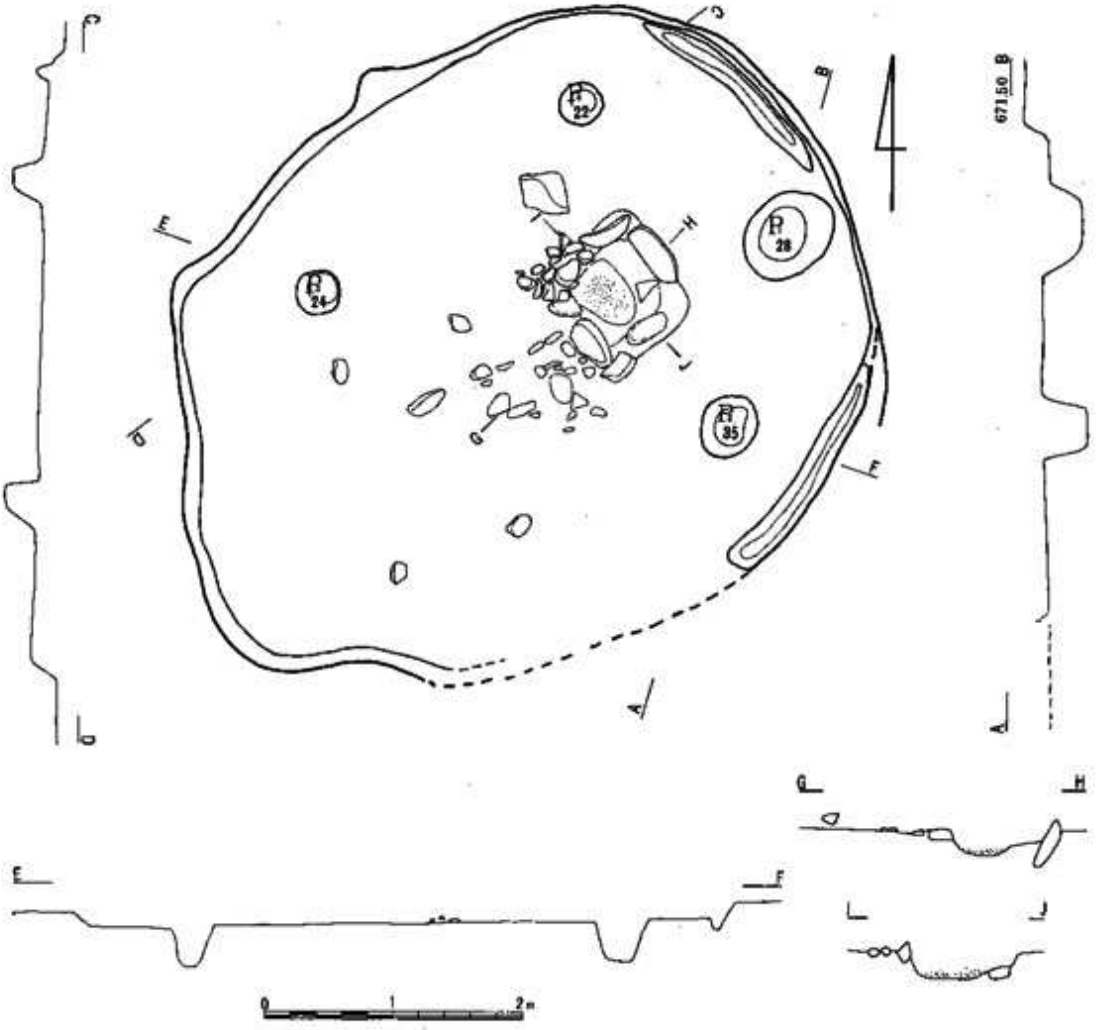
1）　第1号住居址（第7・8・9図　図版3）

遺構（第7図　図版3）

当住居址4基の住居址中、一番北東部に位置しており、開田時の影響を受けかなりの部分まで壁が削られている。

プランはほぼ楕円形を呈すが南壁部分は撹乱のためはっきりしない。大きさは、長軸6.0m短軸4.7mを測る。壁高は現況15～20cm前後である。

床面はローム面をタタキしめてあるが、炉周辺を除きあまり固くない。



第7図　第Ⅰ地点第1号住居址実測図（S＝1/60）

北東壁ぎわに2箇所幅20cm、長さ2m弱にわたって周溝がみられる。

主柱穴は全部で6本と考えるのが妥当と思われるが4本しか確認されていない。

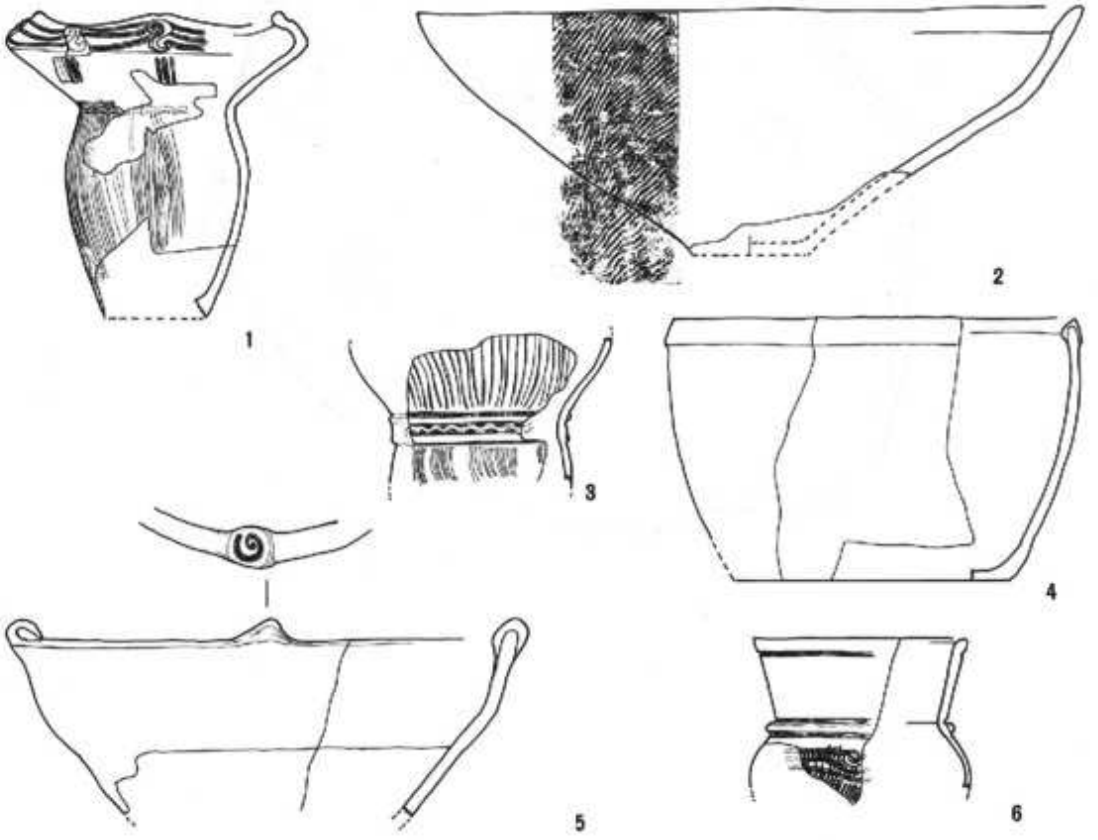
炉は中央やや北東寄りにありほぼ方形の石組炉である。焚口南東部は平盤な自然石2個を横長に、奥壁・左壁は割石を縦長にすえている。右壁は2個のうち1個は抜きとられ、下部には細長い自然石がみられる。外形1.0×1.0m、内形0.6×0.6mを測る。

炉の手前には自然石や割石が雑然とかなりの量確認されている。

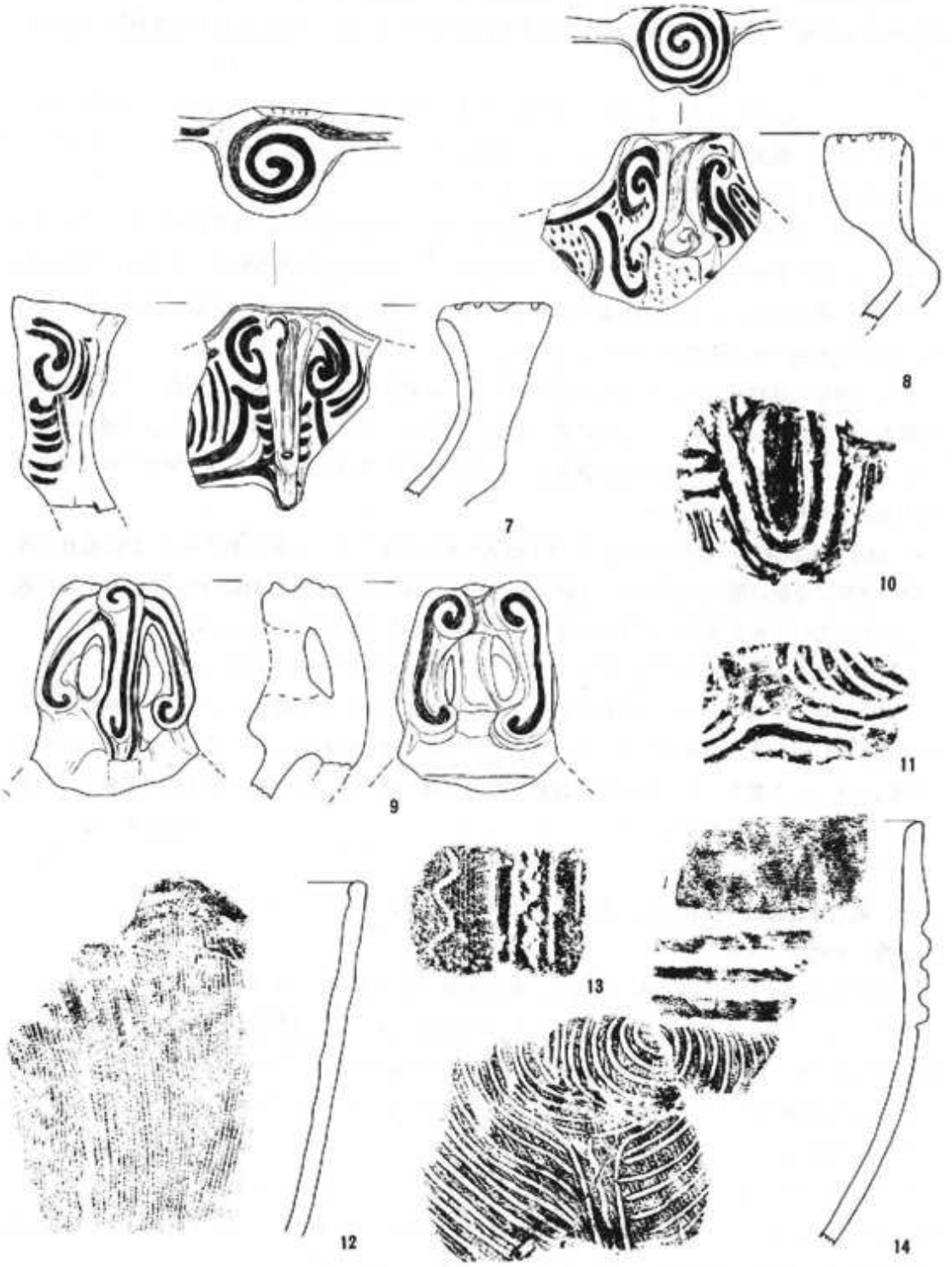
遺物（第8・9図）

遺物は炉付近とりわけ先に述べた石の間や下から集中して出土している。

器形のわかるものは1~6で1を除き半分ほどしか残存していない。1・3は深鉢である。1は内屈する口縁器形で、山形突起状4箇所に持ち、その下部と突起の間8箇所に沈線による逆S字文を付し3条の太目の沈線がそれらをつないでいる。逆S字状文の下部は3本1組の沈線が懸垂する。くびれる頸部には一条の沈状文を横走させ胴部は細沈線が縦走する。長石・雲母を含み茶



第8図　第Ⅰ地点第1号住居址床面出土土器（1/6）



第9図　第Ⅰ地点第1号住居址床面出土土器（1/3）

褐色を呈している。内面胴下半部には一部炭化物の付着がみられる。

3は図上復原によるもので，外傾する口縁は口唇にて内屈し，沈線が下走する。頸部は隆帯の間に波状文を施し、胴部は非常に細い円弧文が数単位でみられる。胎土はち密で黒褐色に焼かれている。

2・4・5は浅鉢である。2は小さい底部から強く張り出し口唇にてやや内傾し口唇部は内そぎで段を持ち、縄文が全面に付されている。底部はなく他は半分ほど残存している。長石を含み黒褐色を呈し、内面は丹念なヘラ削りが施されている。

4・5はともに図上復元である。4は鍋状を呈し珍しい器形である。口唇内外に段を持ち鋭角である。長石・雲母を含み白灰色を呈し、無文である。5は2に似た器形で口唇内外に厚味を持たせ4個の突起を持ち、上面に沈線の渦巻文がみられ下部は無文である。長石・雲母を多量に含み、内面黒褐色・外面黄褐色に焼かれている。

6は、胴部の状態からすると壺形土器であろう。直線状にのびる口縁は口唇直下に1条の沈線を横走させている。頸部には1条の隆帯が走る。胴部は一部しかなく明らかでないが縄文を地文とし、3条の沈線のワラビ手状文が横走している。長石を含み、内外ともヘラ削りの後丹念な磨きを加え、黒褐色に焼かれている。

7～14はともに深鉢の破片である。7～9は把手であり9はブリッチ状把手である。12は波状口縁を持つ深鉢で全面に櫛状工具による沈線が縦走する。14は大形土器の口縁部破片で、無文の口縁下に3条の太い沈線を横走させ胴部は縄文地に沈線による渦巻文や蛇行文が施される。

出土土器は総じて曽利II式期に比定される。1・6は東海系の影響を持つ土器である。

石器は50点出土している。打製石斧16点、磨製石斧4点のうち定角1・蛤刃2・乳棒状1、石錘2点、敲打器8点、特殊敲打器4点、特殊磨石1点、横刃形石器1点、石礫3点、不定形石器（黒耀石・チャート製などの小形のもの詳細は石器の項で述べる）11点の計50点他に黒耀石の原石1個と硬砂岩等の剥片35片である。　（気賀沢　進）

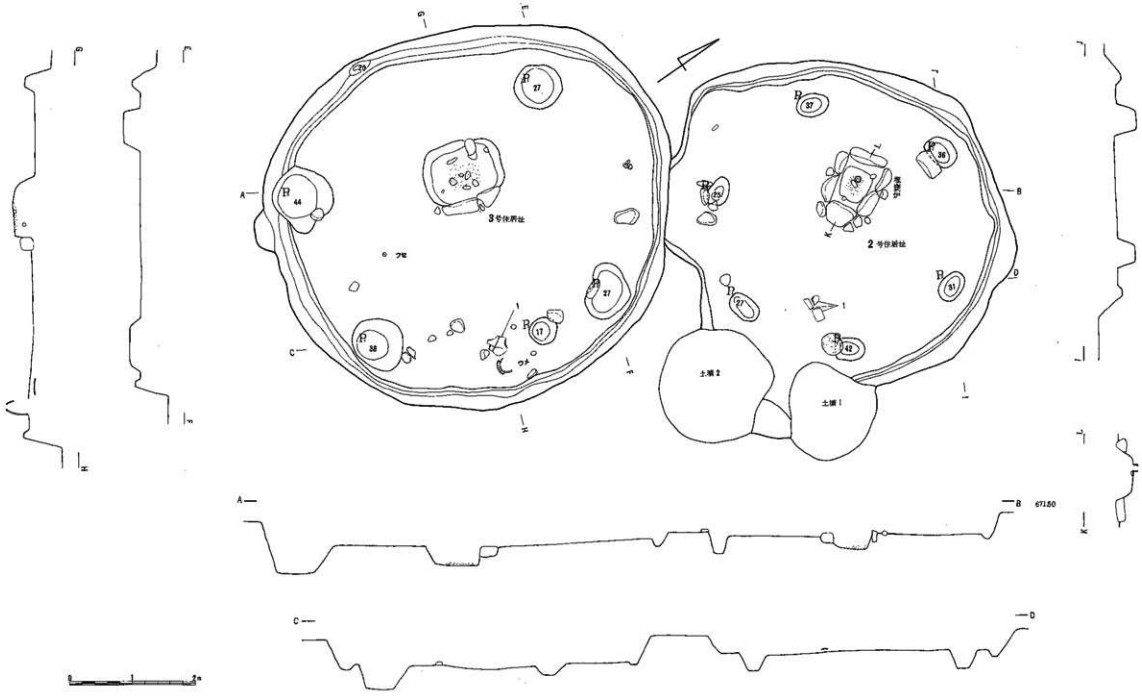
2）　第2号住居址（第10・11・12図　図版3）

遺構（第10図　図版3）

本住居址は第1号住居址の南に位置し、南隅を第3号住居址に、東隅を2つの土壙によって切られている。プランはほぼ円形で、その大きさは約5mであるが、南側にやや張り出している。主軸方向はS—28°—Wである。周囲には幅20cm、深さ10cmの周溝がめぐらされている。壁は直に近く、現高は約30cmである。また、床面はロームのタタキで固く良好である。炉より北側は、南側より若干高くなっている。

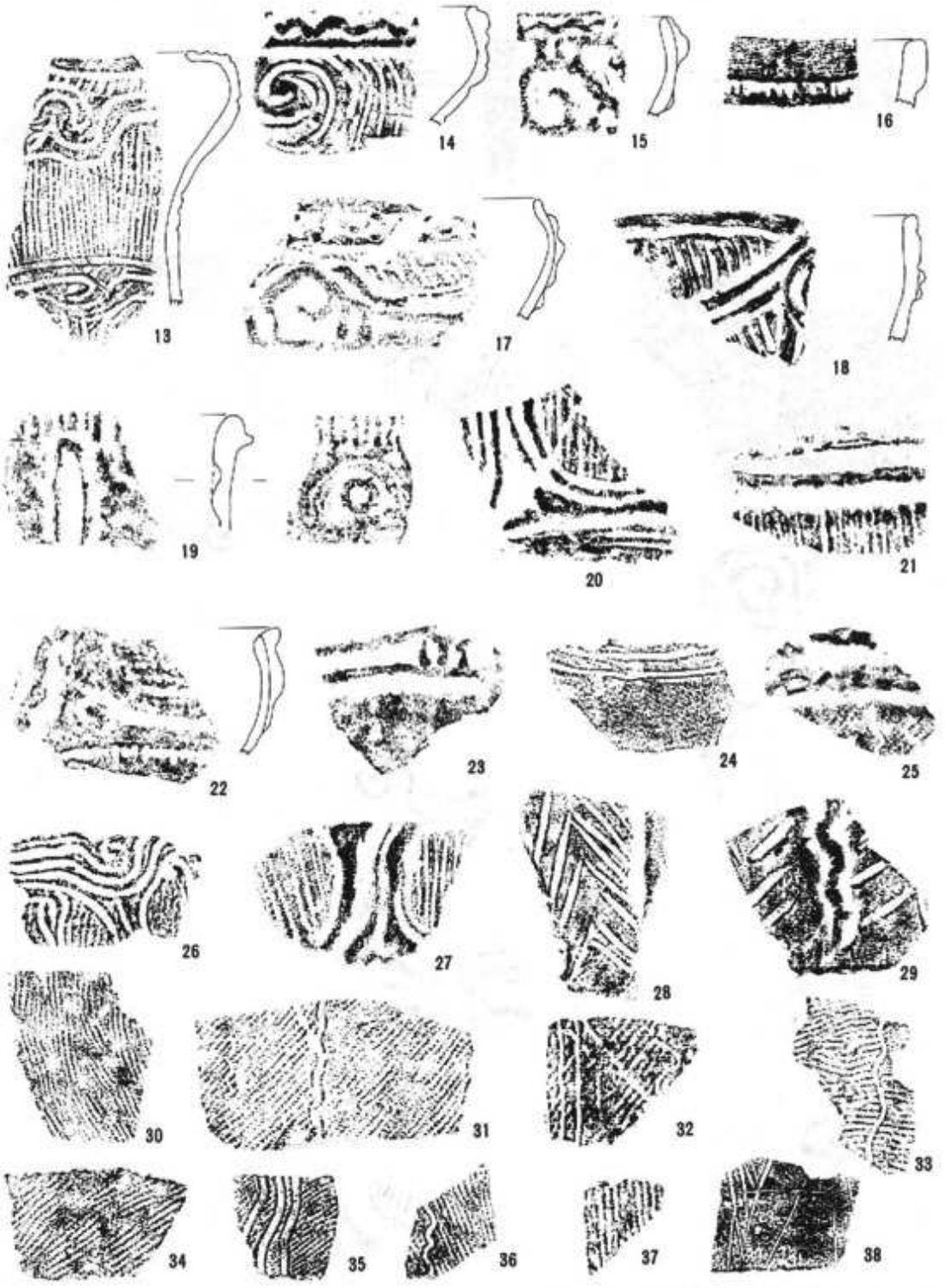
柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4・P_5・P_6の6本とみられる。いずれも30×20cmの楕円形で、P_1・P_2・P_6の深さは35cm前後であるが、P_3は42cmと深く、P_4・P_5は25cm前後と浅い。なおP_3の南脇に直径38cm前後の球状の石が置かれていたが、その性格は不明である。

炉は住居址の中央よりやや北に位置し、外形は130×90cmの完全な長方形の石組炉である。内形は50×50cmの方形で内部には埋甕があり、石組炉と埋甕炉の併用である。たき口には30×50cmの



第10図　第Ⅰ地点第2・3号住居址実測図（S=1/60）

第11図　第Ⅰ地点第２号住居址床面出土土器
（1～6は1/6他は1/3、1は埋甕炉、小数字は出土位置）



第12図　第Ⅰ地点第２号住居址床面出土土器（1/3）

大きな平石が使用され堂々たるものである。

土壙1・2は本住居址の東隅を切っている。土壙1は160×140cmの楕円形で深さ75cm。土壙2は直径180cmの円形で、深さは75cmである。

遺物（第11・12図）

1は埋甕炉に使用されたもので、胴部のみである。全体に縄文を施し、黄褐色を呈している。胎土に長石を含み、表面は加熱によりボロボロの状態である。

2～6は深鉢形土器である。

2は頸部と底部を欠いている。胴部上方に2本の沈線をめぐらし、胴部上方から下方にかけ、2本を1組とした沈線を懸垂させ6分画している。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石、雲母を含んでいる。3・4は口縁部である。3は口唇部に沈線を施し、6分画に隆帯文でワラビ手文を施している。その内部には4本の波状沈線を施文している。4は口縁部に断続で波状に沈線をめぐらし、頸部には沈線を懸垂させている。5は胴部で、P_3・P_4の中間より出土した。全体に粗目の縄文を施し、沈線をワラビ手状に施文している。

7～12は、やはり深鉢形土器の口縁部である。

13～38は土器の拓影図である。すべて深鉢形土器であり、13～19・20はいずれも口縁部である。いずれも太い沈線による渦巻文を主とする曲線や直線と点列で文様を構成しており、時期的には曽利II式期と認められる。

石器は全部で46点出土しており、削器1点が覆土より発見されたのみで他はすべて床面出土である。

床面出土の45点の内訳は次のとおりである。打製石斧24点、磨製定角石斧1点、大形石匙2点、敲打器6点、磨石1点、凹石3点、横刃形石器2点、削器1点、不定形石器4点である。

（酒井　健次）

3）第3号住居址（第10・13～15図　図版4・39）

遺構（第10図　図版4）

本住居址は、北東部で第2号住居址を切っている。第I地点で他の住居址を切っているのは、本住居址のみである。主軸方向はS—73°—Wである。

周囲には幅約20cm、深さ約15cmの周溝がめぐらされているが、その西南隅は柱穴址P_5によって切られている。また、西隅の周溝中には20×40cmほどのピットが検出された。壁はやや緩やかな傾斜をなし、壁の現高は10cmほどである。床面はロームのタタキで固く良好であり、北から南へとやや傾斜している。

主柱穴はP_1・P_2・P_4・P_5の4本とみられ、P_3は支柱穴と思われる。主柱穴P_1・P_4・P_5は直径50cmほどの円形で、支柱穴P_3は直径30cmほどの円形である。P_1・P_2はともに27cmの深さであるのに対し、P_4・P_5は40cm前後の深さとなっている。

炉は住居址の中央よりやや西に位置している。長方形の石組炉であったと考えられるが、石の大半は亡失し、東側の2個のみが残っているにすぎない。推定外形は120×130cmで、内形は80×

100cmである。

P_3の南側からは、正位の埋甕（第13図—1）が検出された。上部に石はなかったが、住居址の入り口部分と考えられる。また、P_4・P_5の中間からは伏甕（第13図—2）が検出された。

遺物（第13～15図　図版39）

1はP_3の南側から検出された埋甕である。口縁部は1/5ほどが残存しており、底部が欠損している。口縁部は沈線で渦巻文を施し、また隆帯文でワラビ手文を施している。また、胴部にはやはり、沈線でワラビ手文を施している。

2は伏甕でP_4・P_5の中間に伏せられていた。小形の深鉢で、ほぼ完形である。頸部に2本の沈線をめぐらせ、胴部には沈線のワラビ手文で4分画している。底部に孔を有する。

3～6は深鉢の口縁部から胴部にかけてのものである。

3は口縁部で、粘土紐によるねじれ文で5分画し、その中は沈線の渦巻文と、粘土紐による渦巻文を施文している。頸部は斜状の沈線文を施す。

4は胴部より下が欠けている。口縁部は半分残存し、隆帯による円形文で6分画されている。その中は沈線で斜状に施されている。口縁部は内外共に丹念なヘラミガキで調整されている。

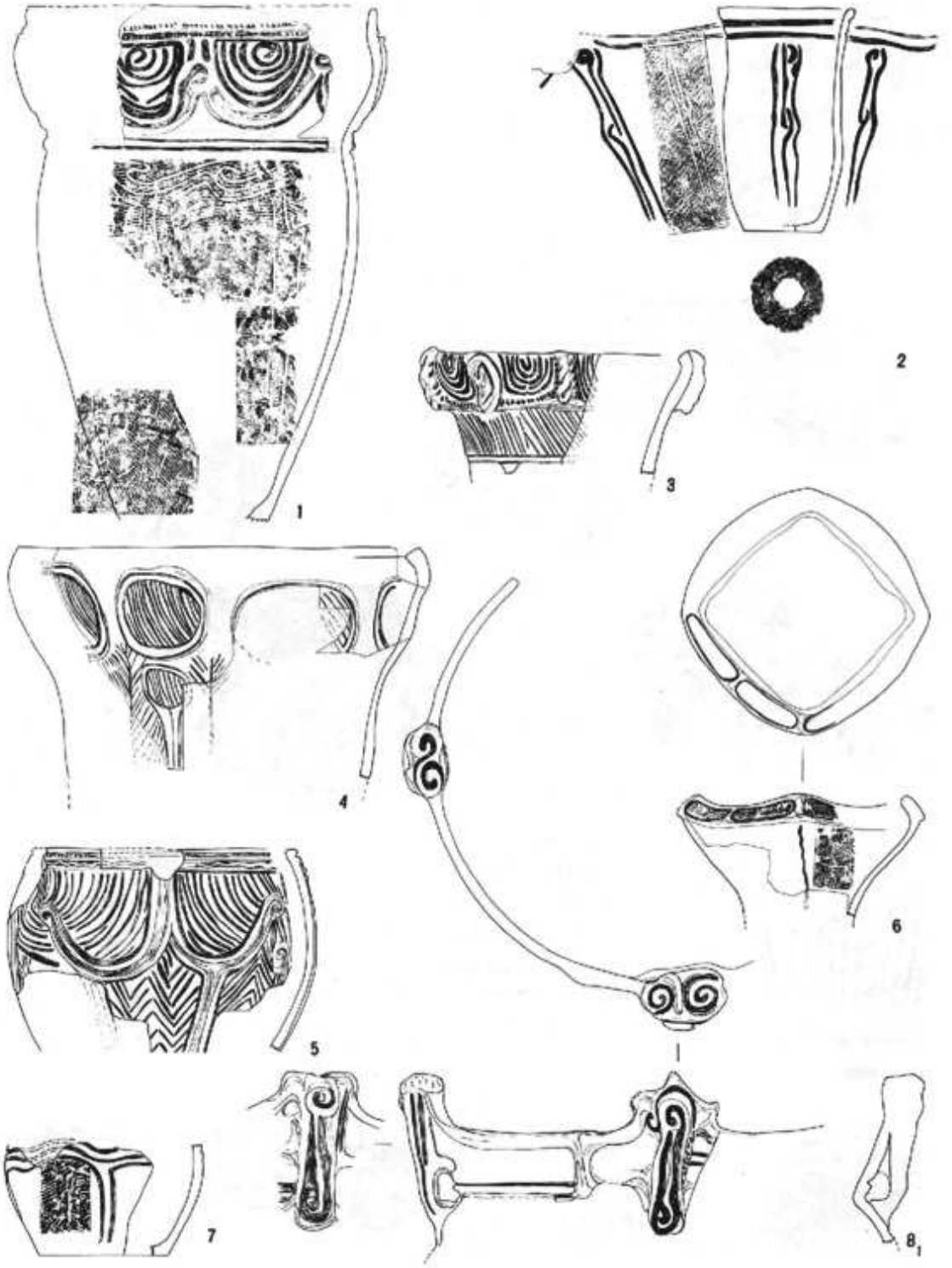
5は胴部から上部にかけてで、全体の1/2が残存している。口唇部は隆帯文で波状に施文し、胴部は隆帯文でワラビ手状に施文している。胴部上方は沈線でウロコ状に施文し、下方は沈線で綾杉文を施している。なお、口縁部外側に炭化物が付着している。

6は口縁部平面形が方形を呈する深鉢で、口縁部は7/8、頸部は3/5が残存している。頸部は沈線で蛇行文を懸垂に施文している。口縁部には沈線で8分画し、その中は竹管文が施されている。

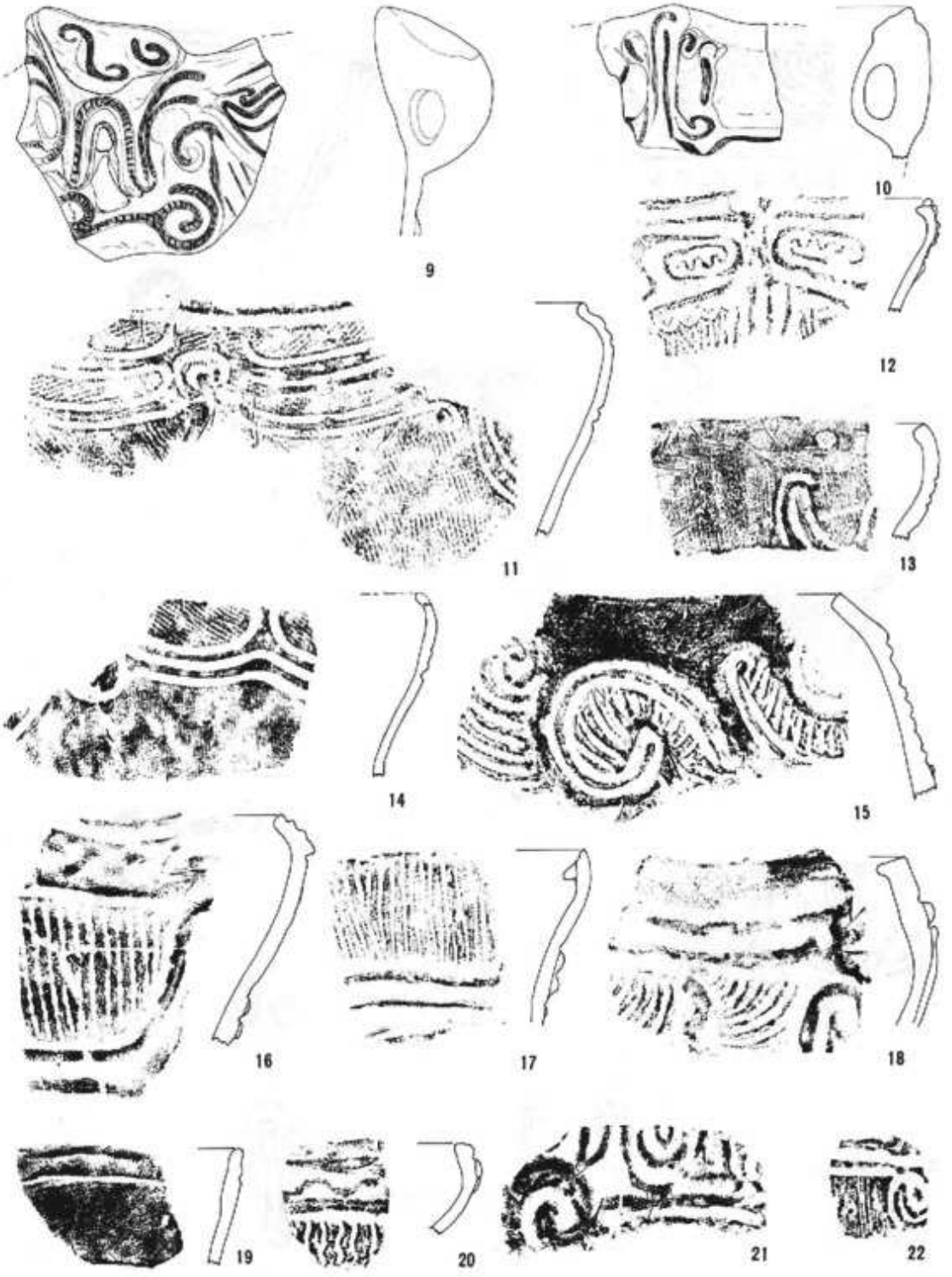
7～10は深鉢形土器の口縁部でそれぞれ隆帯でワラビ手文を施している。

11～49は土器の拓影図で、やはり深鉢形の土器である。11～20は口縁部で、21～49は胴部である。いずれも器面を隆線による渦巻文、沈線による綾杉文はじめ曲直線で文様を構成しており、時期はすべて曽利II式期のものと認められる。

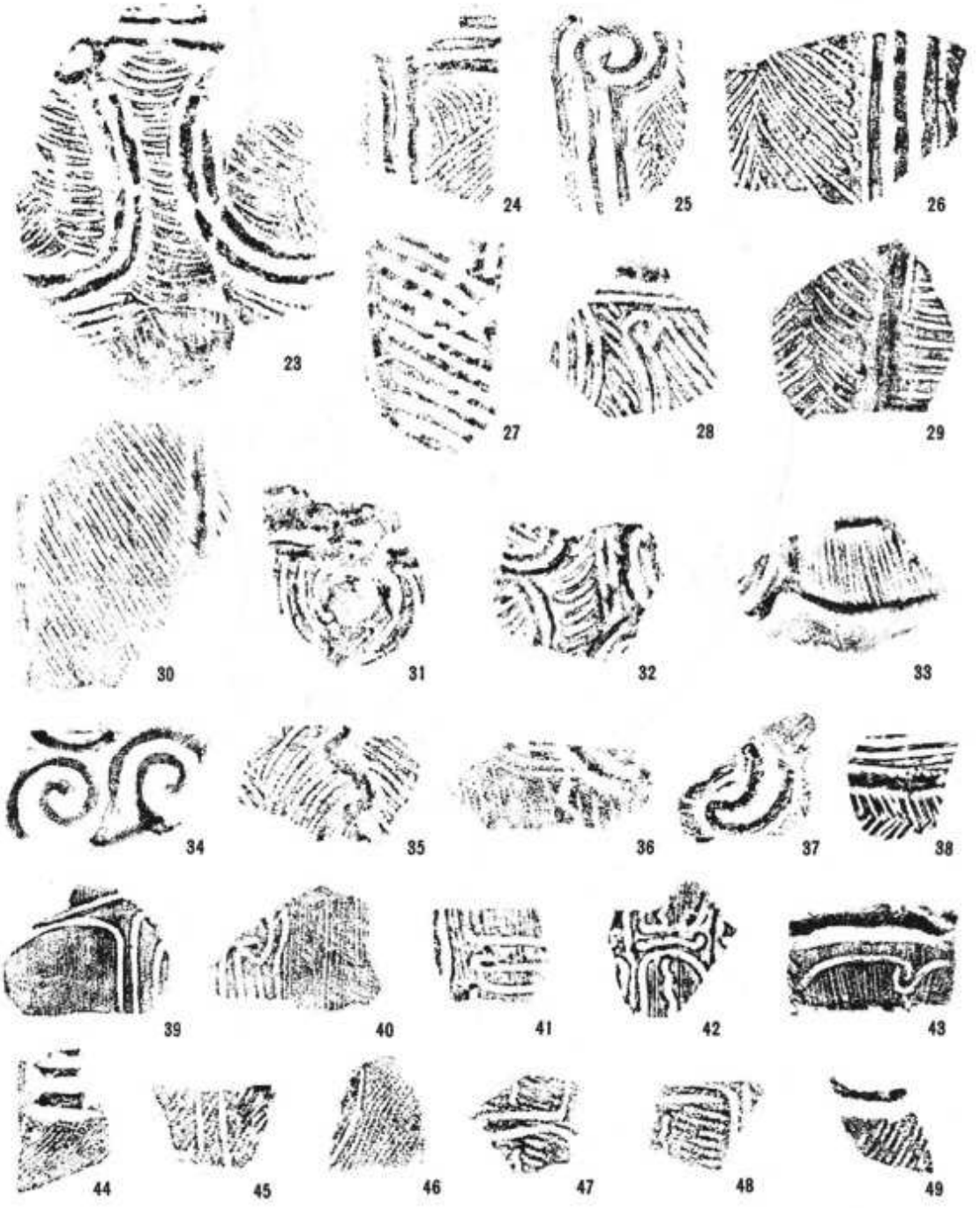
石器は、70点と多くすべて床面から出土している。打製石斧27点、磨製定角石斧1点、磨製蛤刃石斧1点、大形石匙1点、石錘1点、敲打器18点、磨石5点、特殊磨石2点、凹石2点、横刃形石器4点、円形掻器1点、不定形石器7点である。外に剥片93片と黒曜石石核1点が出土している。敲打器・剥片の多いのが目立っている。　（酒井　健次）



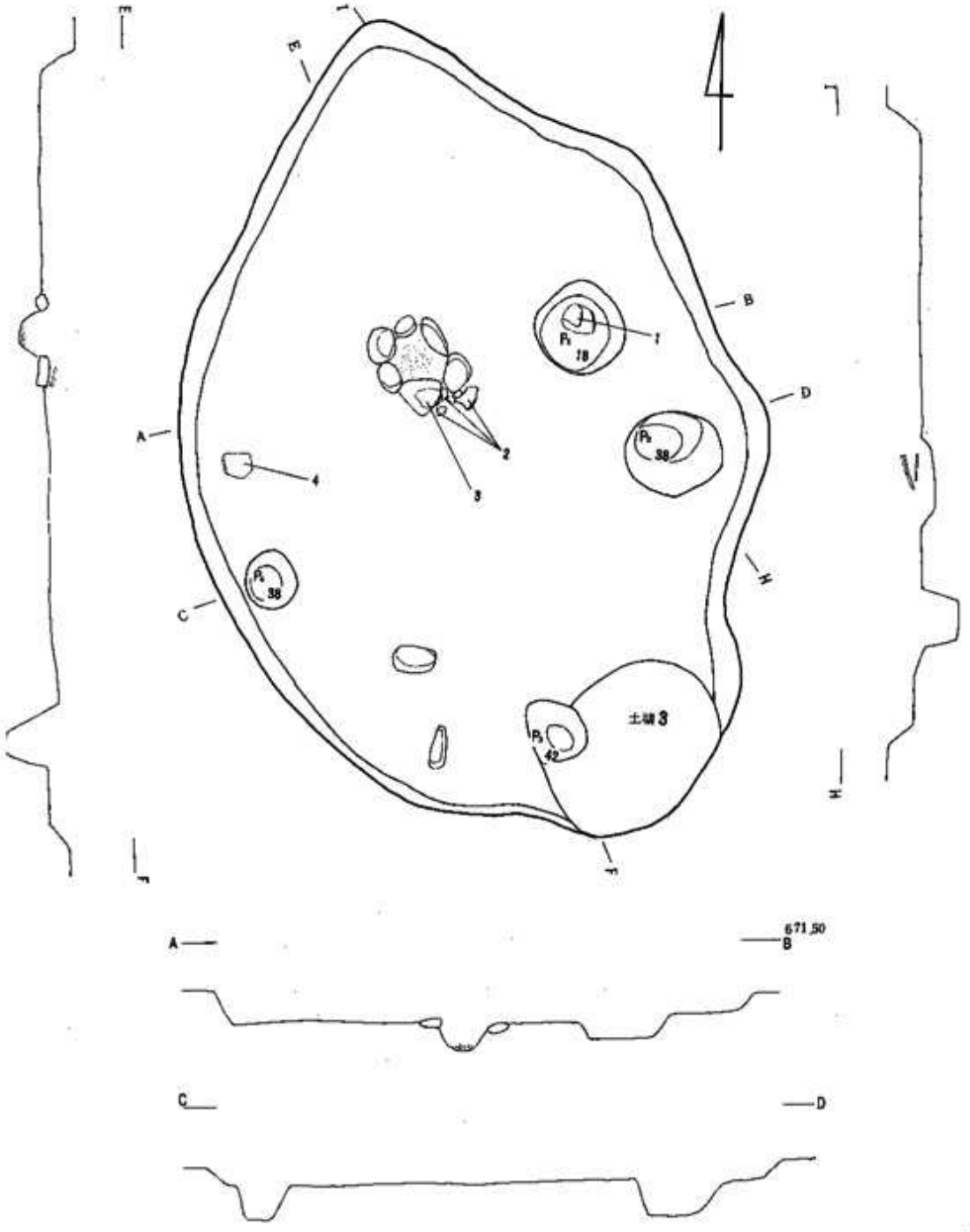
第13図　第Ⅰ地点第3号住居址床面出土土器（1/6、1は埋甕、2は伏甕）



第14図　第Ⅰ地点第３号住居址床面出土土器（1/3）



第15図　第Ⅰ地点第３号住居址床面出土土器（1/3）



第16図　第Ⅰ地点第4号住居址実測図（S＝1/60）

4） 第4号住居址（第16・17・18図　図版4・39）

遺構（第16図　図版4）

本住居址は調査区の南西部に位置し南東部には土壙3がある。プランはややくずれているが長楕円形を呈し、主軸方向はN—30°—Wである。大きさは長軸7.4m、短軸5mを測る。

壁はゆるやかで、壁高は東側で15cm前後西に行くほど深くなり25cm前後である。

床面はロームを固くタタキしめており、ほぼ平坦である。

主柱穴は4本と考えられるが、P_1は柱穴とは考えにくく現存するものは3本である。炉は中央やや北西寄りに位置し、外形はほぼ方形、内形は円形に近く、平盤な自然石6個を横長にすえて構築されている。内部は25cmすり鉢状に掘られ5cmほど焼土の堆積がみられる。

遺物（第17・18図　図版39）

土器は多く炉の周辺を中心に出土しており、器形復原できるものも多い。炉の東側P_1内より1が横つぶれの状態で、また炉石にかぶさるように4・5が出土しており、炉の西側床面から8が発見されている。

1は深鉢形土器で、口頸部の一部と胴下半部を欠いている。動物の顔面を模したと思われる特異な把手は上部は中空となっている。口頸部には粘土紐による円弧文を付し、接点に結び目を施している。胴部は円弧文から垂下する2本1組の隆帯を4個その間に隆帯による円弧文を隆帯文から連絡させ、上部は沈線を渦巻状又は横走させ下部には竹管具による連続押引文が施されている。雲母・細かい長石を含み暗赤褐色に固く焼かれている。内外面とも化粧土を用いた丹念な整形で文様とともに一見して特異な土器を思わせる。把手・文様とも知見によるかぎり類例をみないが、口頸部の紐帯文様に限れば、下伊那高森町増子新切遺跡B14号住居址出土土器に一例求めることができる。また当遺跡第Ⅶ地点第35号住居址にも一例みられる。

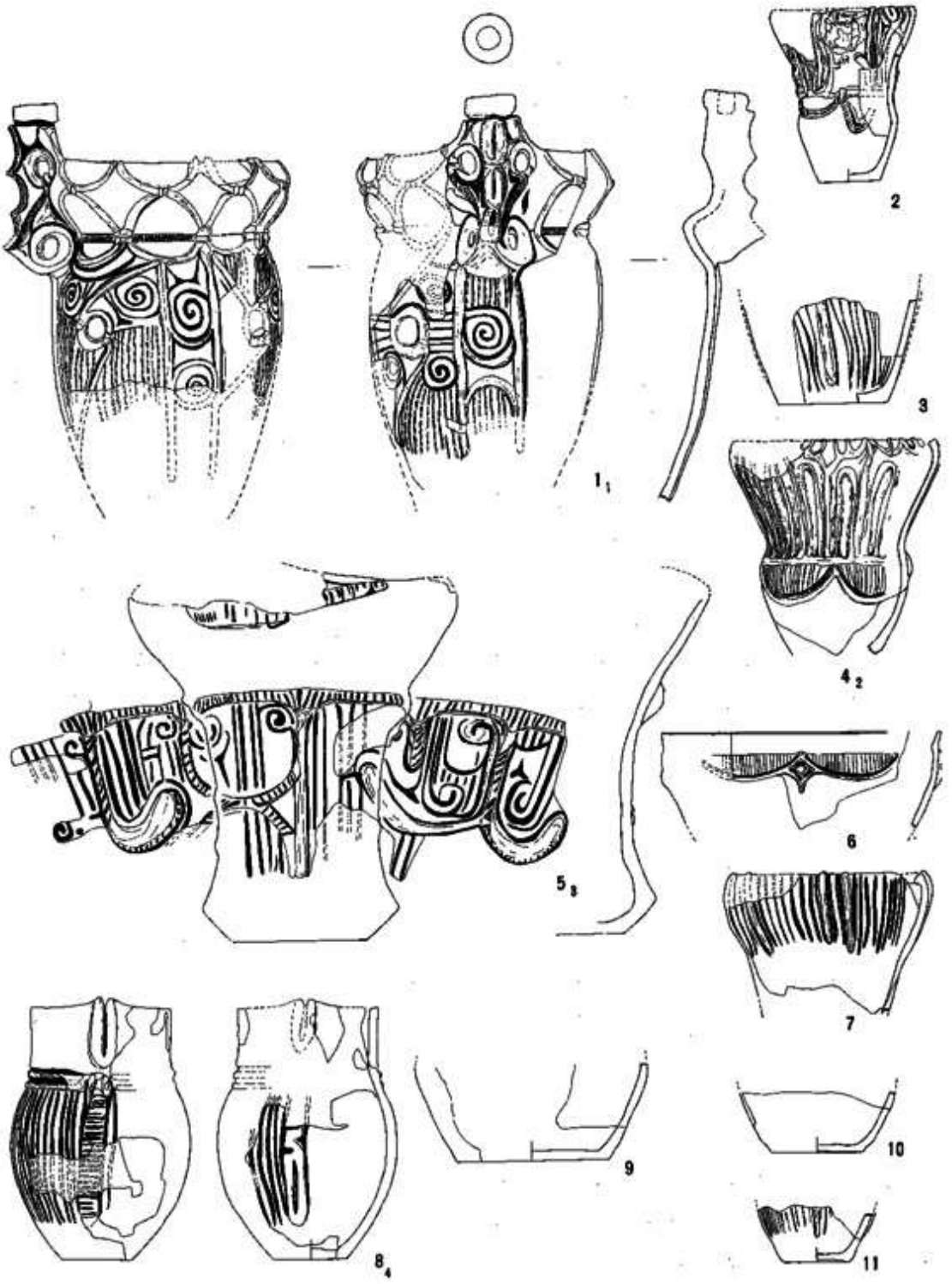
2・4は小形深鉢形土器で、1は口頸部と胴上部を半分ほど欠損している。4は胴下半部を欠き他は半存である。ともに直線的に外傾した後内屈する口縁部に粘土紐によるU字・逆U字文を施している。2はブリッチ状把手の痕跡が1箇所みられる。くびれ部直下に櫛形文を付し下部は無文である。4の内面胴下半部には炭化物が付着している。

5は深鉢形土器で、口縁は内湾し胴部はくびれながら開き、屈曲底に至る。口唇部を一部欠くためはっきりしないが突起が一つ付されていたと思われる。頸部に隆帯をめぐらしそれから垂下する隆帯で胴部文様帯を区画したのち、半肉彫りの渦巻文・三叉文を配したのち沈線が充慎している。

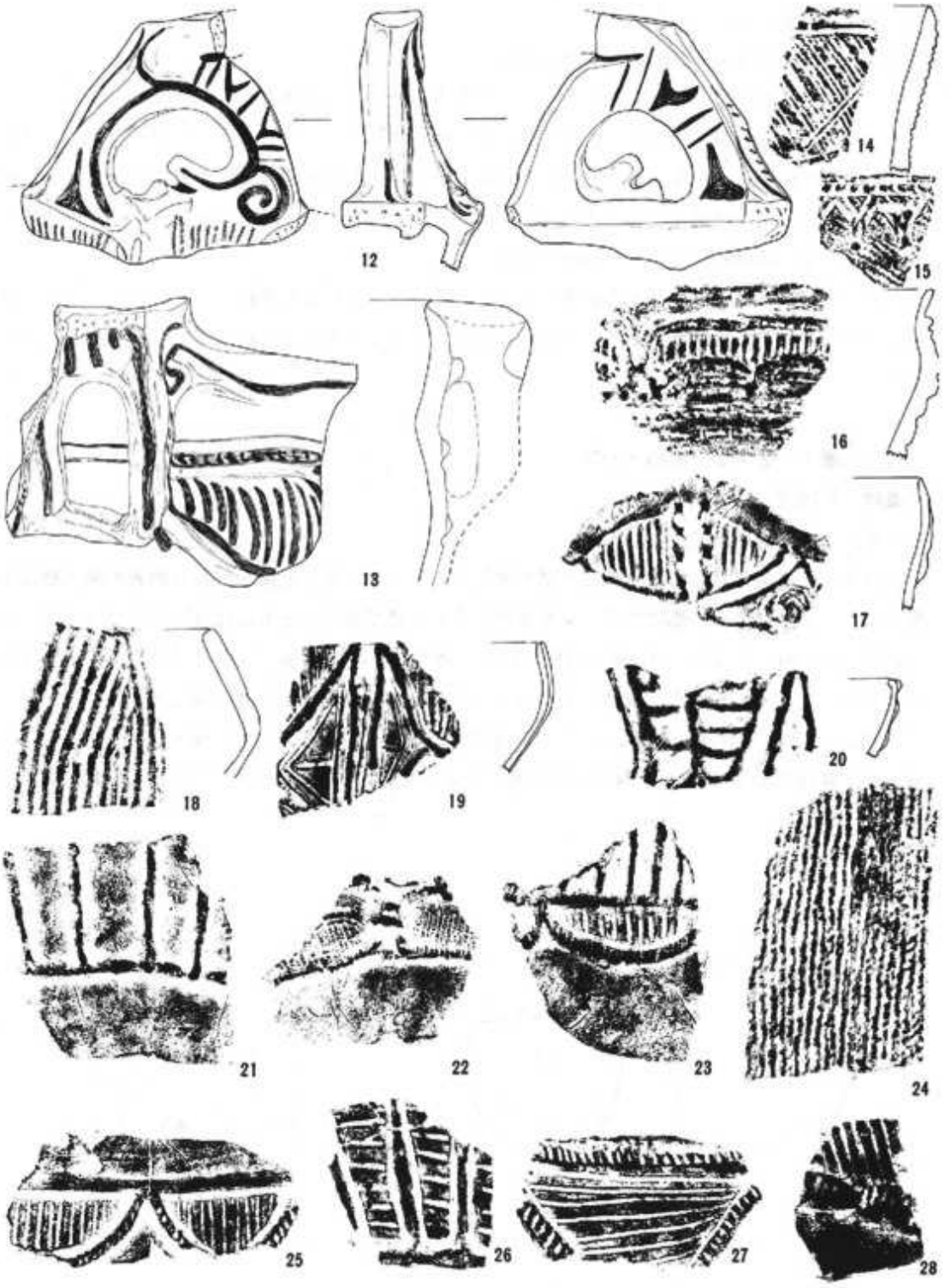
6はゆるやかに外反する胴部から直立した口縁は口唇にて外反する。口唇部に無文部を配しその下部に8個の櫛形文を付し胴部は無文である。浅鉢と思われる。

7は2・4同様のキャリパ状の小形深鉢で胴部以下を欠く。2本1組とする隆帯を4箇所に垂下させその間を沈線が充慎している。

8は球状を呈す胴部から口縁は直立する壺形土器で半完形品である。U字状突起を2箇所に配しゆるやかな波状口縁を呈している。頸部には2条の隆帯をめぐらした後、蛇状の幅広な隆帯を垂下させて胴部を2分画させている。その間は深目の沈線が等間隔に縦走する。胎土には，細粒



第17図　第Ⅰ地点第4号住居址床面出土土器（1/6、小数字は出土位置）



第18図　第Ⅰ地点第４号住居址床面出土土器（1/3）

の長石と雲母を含み、丹念な横ナデ仕上げを行い、全体に黄褐色に焼かれている。口縁部外面には炭化物の付着が認められる。

3・9・10・11は深鉢形土器の底部である。

12・13は把手部で12は蛇体をモチーフにしたもの13はブリッチ状のものである。

5・12・14・15・24を除き総じて曽利Ⅰ式期に比定されるものである。5・12・24は井戸尻Ⅰ式14・15はそれよりやや先行するものと思われる。出土土器中時期を異にするものはこれら以外にはなく、住居址の時期も曽利Ⅰ式期のものである。5は完形品に近く炉石にかぶさった状態で出土しており、時期差については問題が残る。

出土した石器は40点で全て床面出土のものである。内訳は打製石斧19点、大形石匙2点、石錘12点、敲打器1点、特殊磨石2点、不定形石器4点、他に黒耀石の石核が1点、剥片49片が出土している。石錘の出土量が目立つ。　　(気賀沢　進)

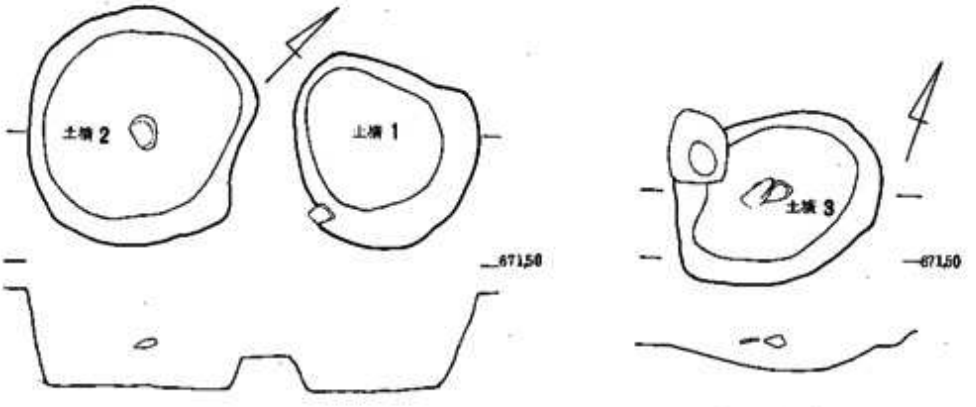
4) 土壙1・2・3 (第19・20図)

遺構 (第19図)

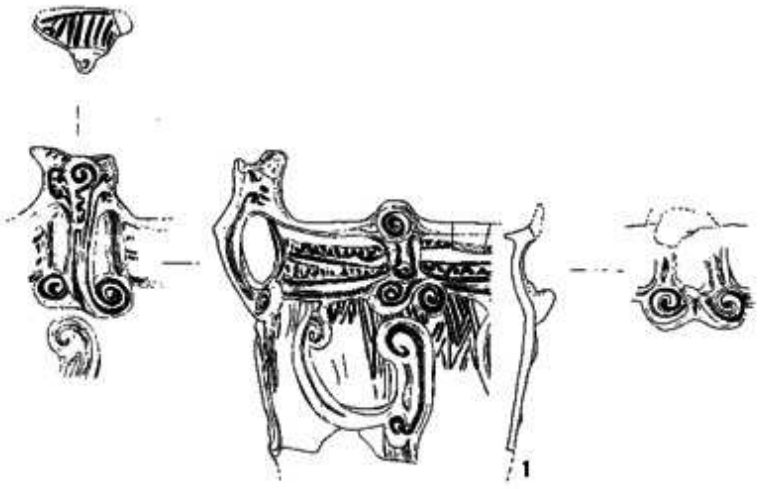
土壙は3基確認されている。

土壙1・2は第2号住居址南東部の壁を壊してつくっている。近接しており両者の間の壁は上部でははっきりせず、下部にてプランを確認できる状態である。ともにほぼ円形のプランで、1は1.55×1.40m、2は1.8×1.8mの規模を測る。深さはともに70cmである。2の中央部分覆土中より自然石が出土している。壁はくずれてはいるが、ともにドラム缶状土壙である。

土壙3は、第4号住居址南東につくられ、壁を一部壊している。1.7×1.3mの楕円形を呈している。すり鉢状で最深部15cmを測る。中央覆土中より深鉢形土器(第20図—1)が横つぶれの状態で出土している。



第19図　第Ⅰ地点第1号・2号・3号土壙実測図 (S=1/60)



第20図　第Ⅰ地点土壙３出土土器（1/6）

遺物（第20図）

出土遺物は非常に少ない。時期を知り得るもの土壙３より出土の深鉢形土器のみである。　1は、胴下半部を欠く小形深鉢形土器で、外屈する口縁部には、沈線による渦巻文を主としたブリッチ状把手1個と楕円文を付す突起が３箇所に配され、その下部には隆帯によるワラビ手状文が胴部を４分画し、綾杉文が埋めている。頸部には削り出しによる波状文が２段に表出されている。口唇内部は受け口状をなしている。砂粒を多く含んで赤褐色を呈している。内面にはヘラ削りの後がみられる。焼きはもろく、胴部文様はすれて消失しているところが多い。曽利Ⅱ式期に比定される。

石器は土壙１より打製石斧２点と石錘１点が出土している。　（気賀沢　進）

第3節　第II地点

1　概要（第4・5図）

第II地点は小範囲の調査であった。水田と一部桑畑を重機による表土はぎの後、グリット設定ののち試掘した。グリットは、便宜上第I地点からの通し番号としてある。

38－J、40－H・い，42－J、46－Jの5グリットをローム層上面まで掘り下げたが、遺物はまったく検出されずまた遺構も確認されなかった。（気賀沢　進）

第4節　第IV地点

1　概要（第2・4・5図）

第IV地点の調査対象地区は道路の南に接する水田2圃場約1500m² であったが、西側の水田は、完全に埋立てられることとなったたため、調査対象外とし永久保存を図った。なお、西側水田南西部土手ぎわに縄文時代中期の住居址の存在が確認されている。

北側半分は開田のためローム面まで削られており、南半部はII層（埋土20～30）下にIII層がわずかに残り漸移層・ロームと続く。III層旧表土の残存が薄いのは、開田の際の耕作土として削りとったものと考えられる。

確認された遺構は、縄文時代中期の住居址一軒のみであった。開田の際多くさんの土器・石器が出たとの話しであり、かなりの遺構があったものと思われる。

2　遺構と遺物

1）第1号住居址（第21・22図）

遺構（第21図）

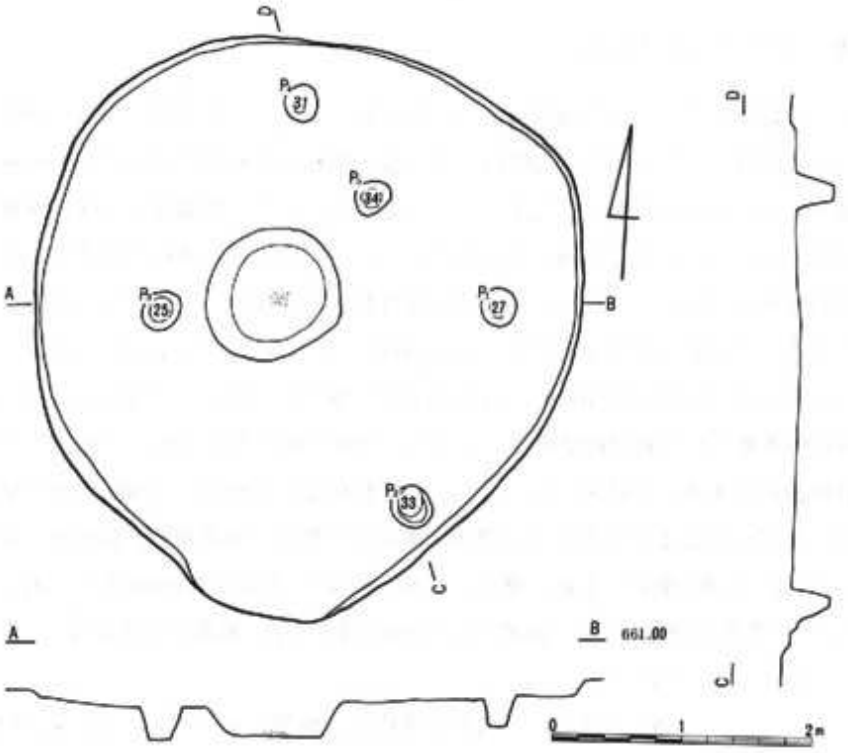
本住居址はほぼ円形を呈し，南側の一部は壁がはっきりしない。大きさは4.3×4.2を測る。主軸方向はN－49°－Wである。壁はゆるやかで、東側が一番高くて12cm前後、他は5cm前後である。

ロームをタタいた床はあまり堅致でない。主柱穴は4本と考えられ、P_5は支柱穴であろう。炉は炉石をすべて抜きとられている。掘形は外形1.05×0.95m、内形0.85×0.75mで深さは30cm、わずかに焼土がみとめられる。

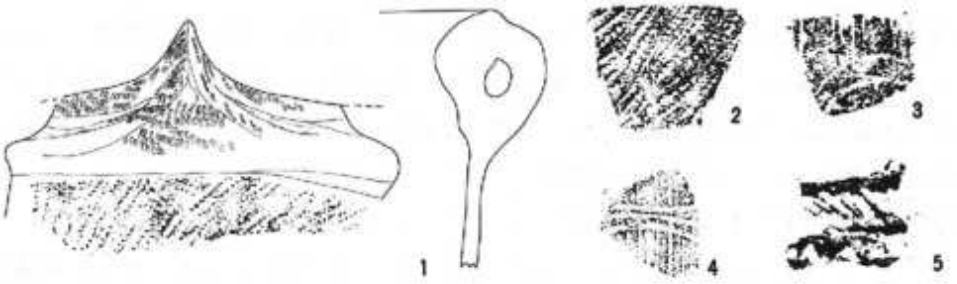
遺物（第22図）

出土土器は非常に少なく10片ほどである。1は深鉢形土器の口縁部で頸部からせり上げた隆帯はブリッチ状把手となり山形をなす。文様は全面に縄文が施されている。2～5はすべて深鉢形土器の小破片である。曽利I式期に比定される。

石器は土器同様少なく石磯1点と不定形石器2点のみである。



第21図　第IV地点第１号住居址実測図（S＝1/60）



第22図　第IV地点第１号住居址床面出土土器（1/3）

第5節　第VI地点

1　概要（第23・24図　図版6・7）

本地点は、高見原丘陵とその中軸線に並行する北側の一支丘（久保垣外丘陵と仮称）との間に形成されている凹地でその面積約20,000m²、丘陵線と凹地の中軸線の比高約10mを測り東西方向に長い谷地形を呈し、古来から「くぼがいと」とよばれていた。本遺跡と久保垣外遺跡は、凹地中軸線で相接するので、昨年度詳細分布調査においてこの中軸線を遺跡の境界と定めた。

中軸線の最凹地は「新堰」（しんい）とよばれる灌漑水路が西流して下間川に注いでいるので境界は明瞭である。本遺跡に属する範囲は、東西190m、南北30mで約5,700m²である。

この地点は、従来から高見原遺跡と久保垣外遺跡の間にある凹地で、遺跡と認められなかったが、昭和61年度実施された範囲確認調査によりこの地点一帯の水田全面に、2mグリッドを12箇所設定し、試掘調査を実施した結果、各グリッド共、水田面より56cm～175cmの黒土層内に多量の遺物が包含されていることが判明した。遺物は縄文式土器片（中期初頭、同前葉、同中葉、同後葉、晩期）・石器（打斧・磨斧、石匙、磨石、石錘、剝片）、青磁片等計500余点であった。また地下1.5mにかけて豊富な湧水があり、南側の高さ8mの段丘崖は、城郭の造営により、整形されて急崖化されていることも判明した。

以上のことから、この地点は明らかに濃密な遺物包含地帯でありその主要なものは、縄文時代中期の全時期に亘るものであることから、段丘上の縄文時代遺構等と密接な関連をもつ低湿地帯の遺跡であることが予察でき得たのである。加えて低湿地帯の性格上縄文時代以降の有機質遺物の包含の可能性の存在を予想することができ、他の縄文時代遺跡と比較する時、極めて顕著な特殊性をもつ地点と考えられた。

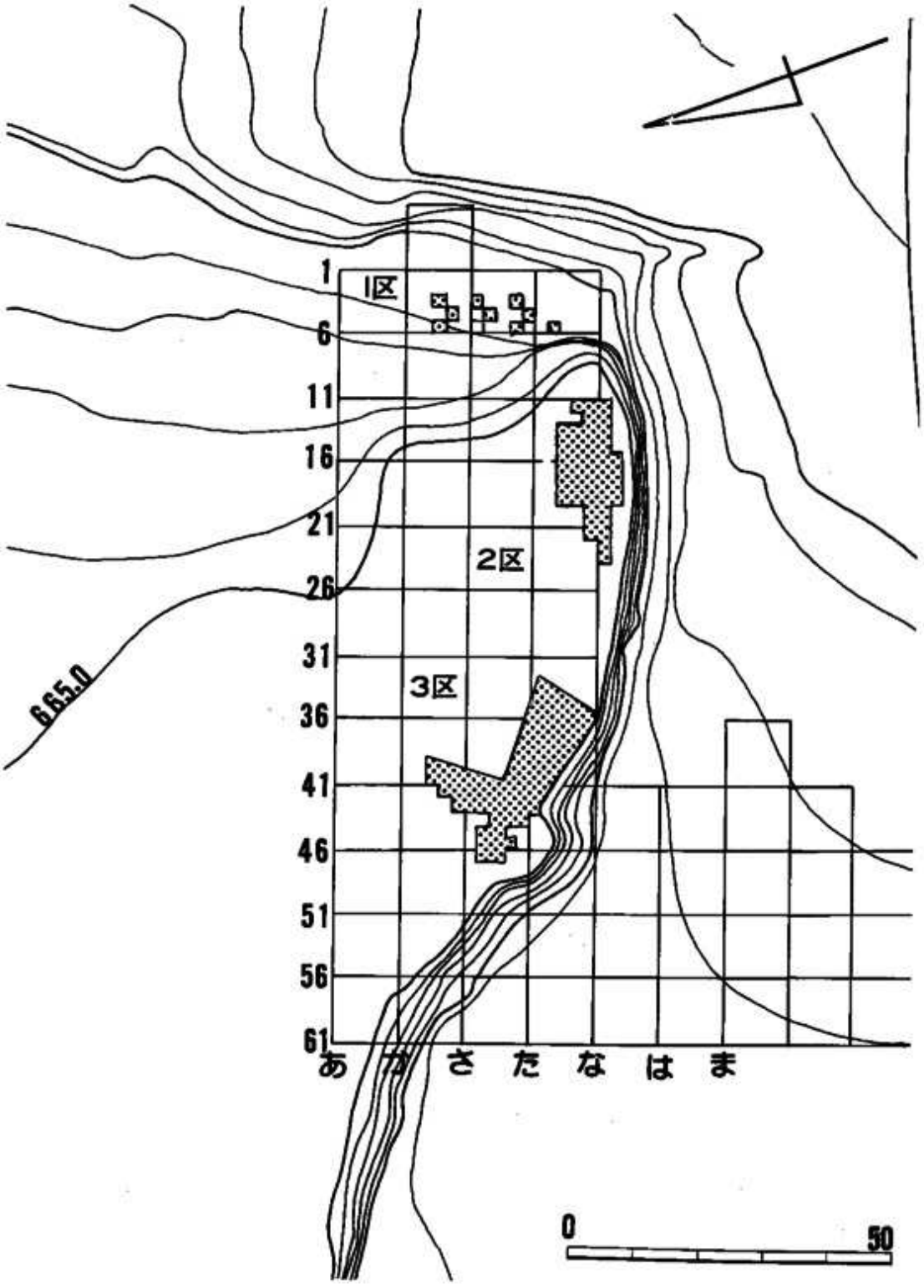
また保存方法としては、全面が水田化工事のため削平されるため破壊は必定であるから全面の記録保存が必要となりそのための発掘調査の実施が必須であることを要請することとなった。

本年度に至り県営圃場整備事業が第VI地点に及ぼされることとなったので、竜東土地改良組合と現地協議を行い、現状保存をでき得る限り実施し得るよう要請した処、設計変更により切削部分をでき得る限り縮小するよう考慮し、現水田面以下の包含層を、新水田面下に埋没させて保存するように配意することとなった。したがって、発掘調査の地点は、切削工事が伴う南側と東側の段丘崖下南地10m巾、長さ計130mの範囲に及ぼすこととなった。

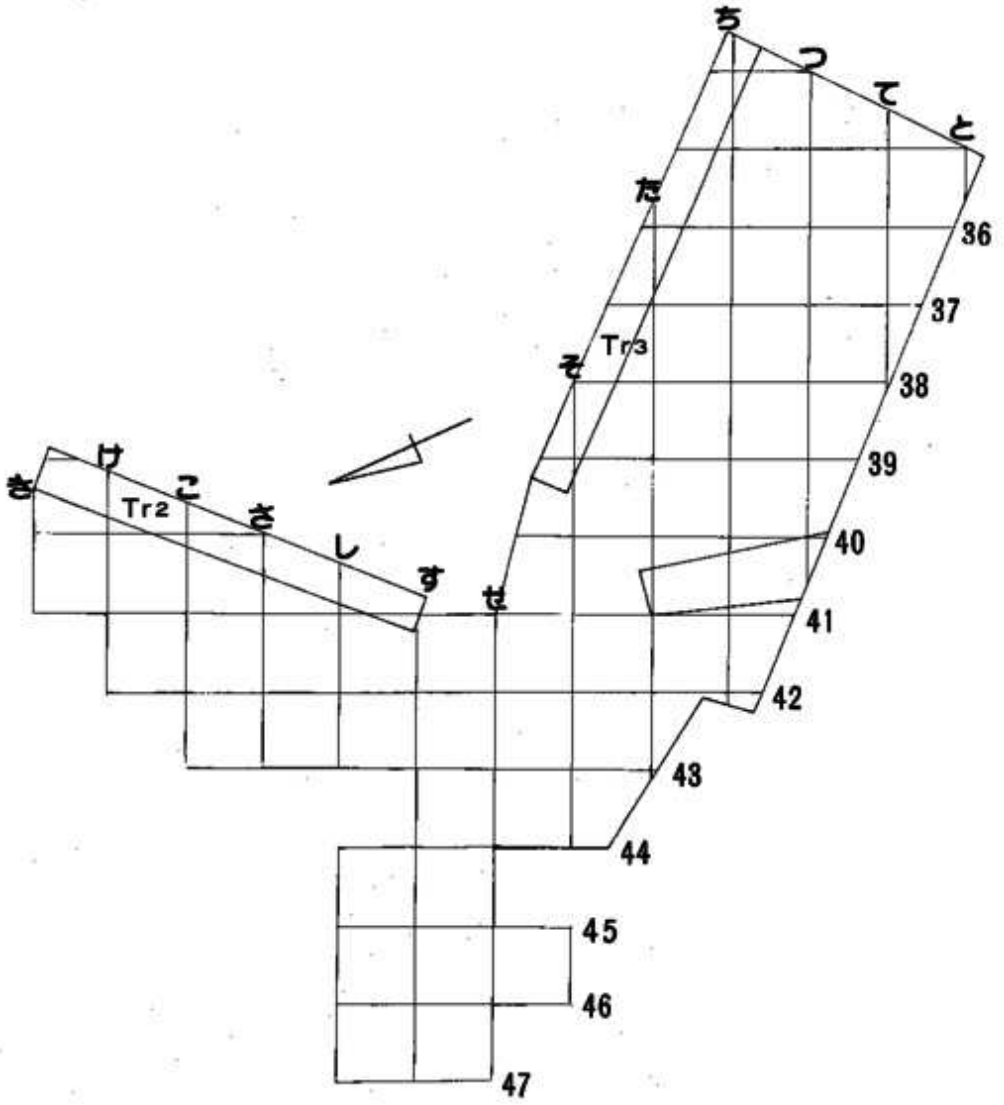
7月16日に開始された本発掘調査に当たって設定された発掘区は、東側の段丘崖の中段水田面を第1区、これに南接する南側段丘崖の微高地を第2区、これに西接する段丘崖下を第3区とした。そのグリッド及び面積は次の通りである。

第1区　　東西6m南北20m　計120m²・グリッド数　30箇所・深掘

第2区　　東西26m南北10m　計260m²・グリッド数　65箇所・トレンチNo3　　深掘



第23図　第VI地点グリッド設定図（S＝1/1000）



第24図　第VI地点第３区グリッド設定図（S＝1/1000）

第３区　　東西30m南北約9m　計260m²・グリット数　60箇所・トレンチNo4、No2、No3深掘
計　　620m²　　155箇所

発掘調査は、第VII地点の調査と並行して実施され８月30日から９月30日まで実施した。以下各地区ごとに概要を述べたい。

2　調査状況及び遺物（第23・24・26図）

1）第1区

西傾斜10°～15°の段丘崖を削平して巾8m内外の水田が過去に造成され現在畑地となっていた。当初設定のグリットを南北に2個間隔、東西に1個間隔で千鳥状に発掘した。

地層は水田耕土層（第Ⅰ層）25cm、水田地場層（第Ⅱ層）10cm～15cm、黒土層（第Ⅲ層a）30cm以下黄褐色の濁れたテフラ層数mの堆積状況で、テフラ層は丘頂からの転移による2次堆積と思われた。遺物はほとんど散発的な傾向で、グリット（以下grと記す）5―くから土師器杯、古瀬戸灰釉碗破片各1、gr3―くから縄文中期土器2片、gr5―く第Ⅲ下層から縄文土器片3片黒耀石片5点、gr3―せから黒耀石片2点、gr―6―せから横刃1点、gr4―せから晩期土器破片1点が出土したのみであった。gr5の線より西の土手は黒土層が約1m堆積しておりその色調は真黒色で有機質の腐植物の堆積と考えられた。これは後述の第2トレンチ断面堆積層と同様である。

以上のように、第Ⅲ層は単純な遺物包含層で第Ⅳ層以下においては遺物は認められなかったのでグリッドによる試掘段階で調査を終了することとした。

遺　物（第26図）

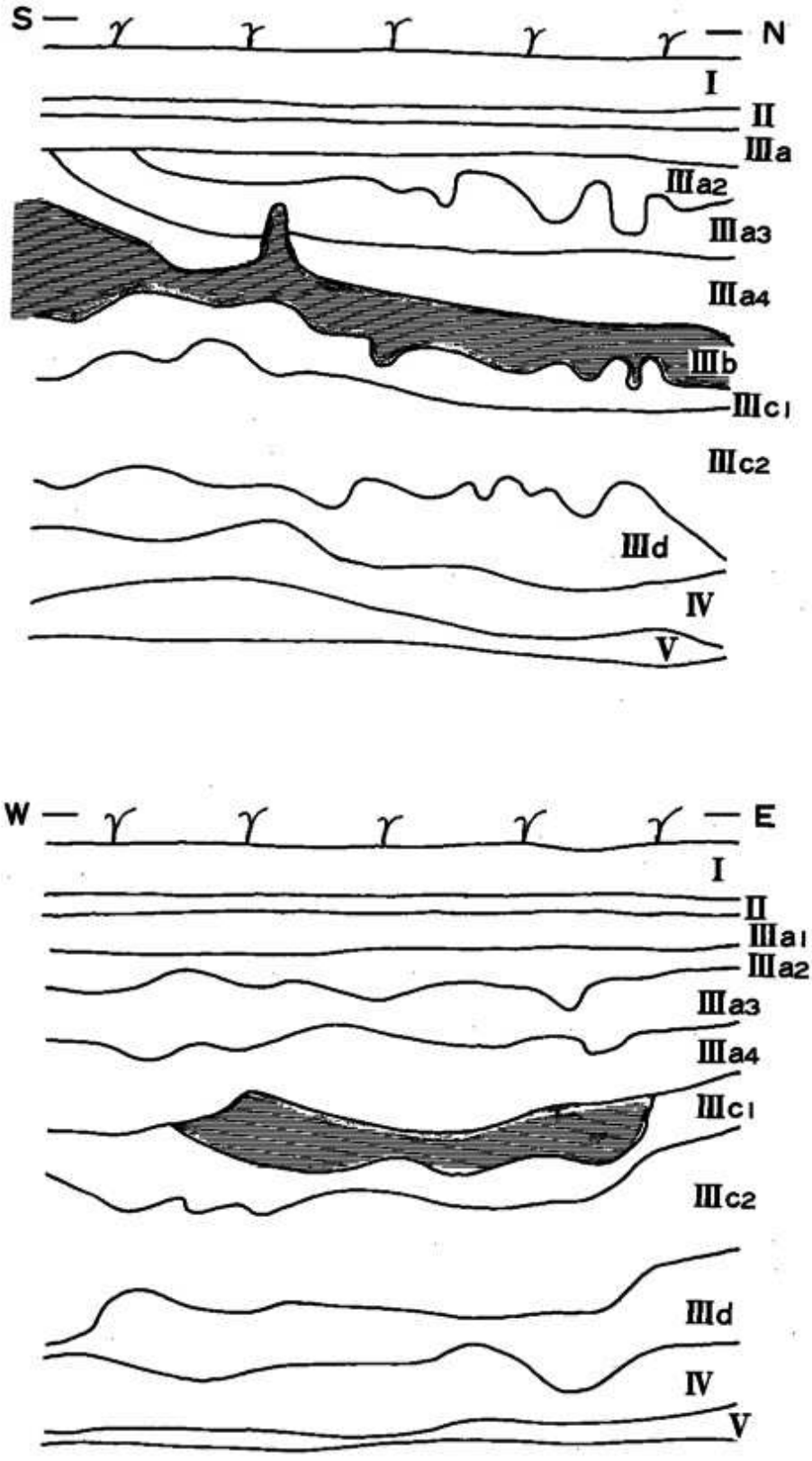
24は土師器内黒杯の口縁部破片である。外面は横ナデによって丹念に調製され、内面は口唇部から黒色研磨されていて国分期第2段階の所産と認められる。25は鉢形土器の口縁下部破片で外面は箆による縦方向のナデにより整形され、胎土は明るい淡褐色の色調で石英細粒が少量混じられ粒子は細かい。内面は炭化物が全面に付着している。縄文晩期に所属するであろう。26から29は縄文中期に属する土器破片で、26は口縁下部に横走する太い沈線が施された鉢形土器破片、27は藤内Ⅰ式期の深鉢、28は新道式期深鉢の胴部破片、29はいわゆる平出ⅢA系の深鉢胴部破片で恐らく新道期に共伴するものであろう。古瀬戸灰釉碗は別項で述べる。

2）第2区（第23・25・26図）

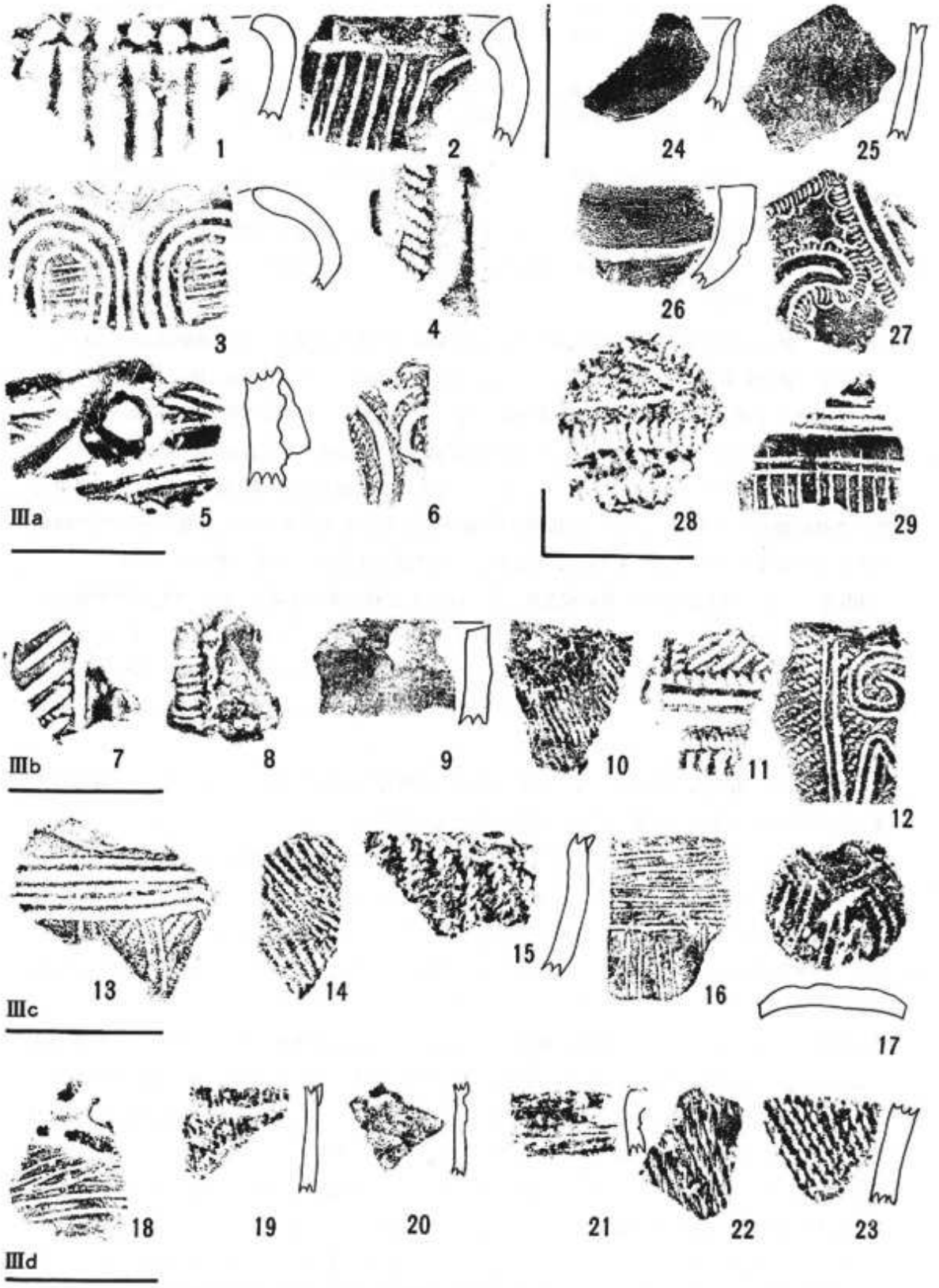
本地区は第1区に西接する微高地で南側段丘崖下に東西に長い短冊形を呈する。現況水田及び畑地として利用されていた。グリッドはこの地形に応じ11～23・つ～にまで南北5列、東西13列計65グリッドを設定し、内40グリッド計160m²全面を発掘し、特にgr15―たは、基盤のテフラ層まで深掘して堆積状況と遺物包含状況を把握しようと努めた。これをトレンチ4と名称した。

本地区の堆積状況は（第25図）第Ⅰ層水田耕土15cm、第Ⅱ層水田地場層5cm～7cm、第Ⅲ層黒土層130cm、第Ⅳ層混合土層20cm、以下第Ⅴ層テフラ層であって第Ⅲ層はa・b・c・dの4層に大別され更に細別されて11層の構造を示した。人工層の第Ⅰ・Ⅱ層を除きその堆積状況は次の通りである。

〔層順番号〕	〔層名〕	〔厚さ〕	〔色調〕	〔構造〕	〔傾斜方向〕	〔傾斜角度〕	〔傾斜状況〕
3	$Ⅲa_1$層	9	黒褐色	粒子がやや粗い	NE24°	1°	単純な直線状
4	$Ⅲa_2$層	5～18	暗黒褐色	粘土粒混入	NE24°	8°	単純な曲線形
5	$Ⅲa_3$層	5～22	黒色	粒子が細かい	NE24°	10°	上面波調多い



第25図　第VI地点　Tr 4 西壁（上）北壁（下）断面実測図



第26図　第Ⅵ地点第１区・２区層位別出土土器（1/2，24～29第１区　1～23第２区）

6	IIIa$_4$層	10～20	真黒色	下部に小礫含有	NE24°	13°	単純な曲線
7	IIIb層	10～30	黒黄色	ローム質土を混在している	NE24°	30°	起伏が激しい
8	IIIc$_1$層	10～20	暗褐色	粒子が細かい	NE24°	6°	上面波調多い
9	IIIc$_2$層	20～45	暗黒褐色	粒子細かく下部に礫を含む	NE24°	6°	単調な曲線
10	IIId層	10～30	亜黒色	ローム質を混在する	NE24°	1°	単調な曲線

この下部の第IV層は、褐黄色を呈し下部の第V層ソフトローム層との混合土層で漸移的な様相を示しているが、小礫や若干の砂質を含み泥状化していた。この下部はテフラ層であるが湧水のため、調査でき得なかった。

遺物は、縄文土器片427片、黒曜石器9点、中世陶器3片等で組織的な包含状態は認められなかった。包含層は第III層のすべてに及んだが上部のIIIa層が60%を占めIIIa4層が最も密度が濃い。トレンチ4出土土器を含めてその1部を第26図に示した。時期的には縄文中期土器が90%を占める。

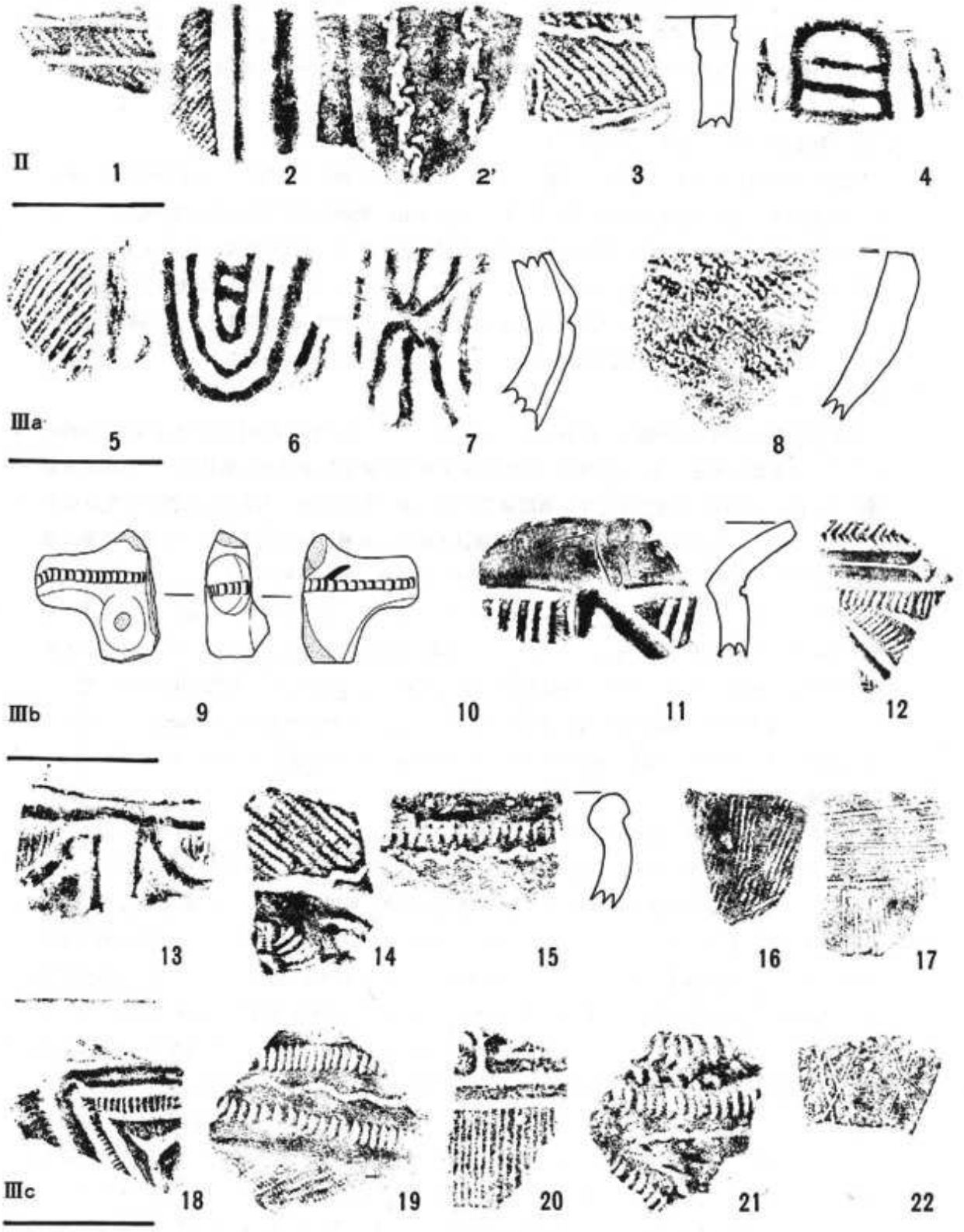
1～6までは、上層のIIIa層出土土器で、曽利期深鉢(4)や、加曽利EI式期の深鉢口辺部(5)、井戸尻期の深鉢（1・2・3・6）が見られる。1・2は井戸尻II式期の深鉢口縁部、3は井戸尻III式期の深鉢口縁部である。したがってIIIa層の形成時期は縄文中葉の半ばから後葉にかけての時期であることが推定されるのである。以下はトレンチIV層出土によって述べることにする。

IIIb層からは、曽利II式期の深鉢胴部片（7）、藤内I式期の深鉢胴部片（8）、井戸尻式期鉢の口縁部(9)、と共に、やや薄手のRL縄文原体を回転施文した中期初頭に属する土器片(10)、沈線により方形区画文を構成する新道期深鉢胴部片(11)、LR縄文にやや太目の平行沈線で曲直文を画いた薄手の深鉢破片等も存在し、中期初頭から後葉に至る土器が混在しており、2次的転移を思わせる。

このことは、IIIb層が明らかにローム質土を混じ不整合な状態を呈していることから南側段丘崖からの崩落であることを裏づけていることになるのである。

IIIc層からは、横走する平行沈線文をLR縄文地の上に数条重ねた中厚手の深鉢胴部破片(13)があり、縄文中期初頭の梨久保式期の系譜を示すものや、集合沈線文で施文した平出IIIA系土器の古式なもの（16）、縄文地に平行沈線文で施文されたメンコ状土版（17）に加えて、瀬戸内地域の船元I式期の深鉢胴部片が存在し、時期的に中期初頭の所産の土器片であって一応の統一性を認めることができる。

IIId層からは、ソウメン状浮線文を横走させ下部に沈線文を並列横走もしくは斜走させる施文を持つ（18）下島式期の深鉢頸部片や、器厚4mm内外の薄手で口縁部隆帯に細い刷痕を器面まで施した縄文早期終末の塩屋式期尖底深鉢破片(19)、器厚3mmのごく薄手で指圧痕のある小形深鉢口辺部片（20）器厚4mmの薄手小形深鉢の口辺部で口縁やや外反し折り返し風の口唇部とその下に横走する細い沈線が施されるもの（21）、中厚手の沈線文土器片（22）、等縄文時代早期末から前期初頭、終末の土器片が散発的に包含されていた。特に（23）は深鉢形土器の胴部片で中膨みの胴下部から底部に至る小破片であるが、胎土良好で若干の黒雲母を含む。焼成堅致で内面は横ナデ調整痕があり、器面全体を縄文原体の押捺で施文しているが、単軸絡条体の廻転施文による



第27図　第VI地点３区層位別出土土器（1/2）

ものである。原体の直径は6～7mm、条の太さは3mmを測り、意外に太い。極めて撚りの強いLR2段の縄文原体を2m間隔で右巻し器面に対して縦方向に回転押圧させたものである。尖底部に近いためか回転方向の角度が異なり重複する傾向が認められる。恐らく早期に所属する土器であろう。

3) 第3区（第24・27図　図版7～10）

第Ⅲ区は、第Ⅱ区の西方約30mの位置で、同じく段丘崖下に接して設定された東西約26m、南北約8mの長方形に加えて、北東側に12m張り出した巾約6mの範囲を加えて凡330m²発掘区で、この全面を発掘調査した。またこの凹地に臨む崖下の巾せまいテラス状地形を呈していることから、地層堆積の状況を把握するためトレンチ1、トレンチ2、トレンチ3を設定し基盤まで深掘した。

まず本区東端部に接してその東外側約20m²を試掘した処、深さ1mの位置で突然大量の湧水が噴出し、約20m²の坑内は30分間で溢水状態になった。明らかに段丘崖下の自然湧水であることが確認できたのである。

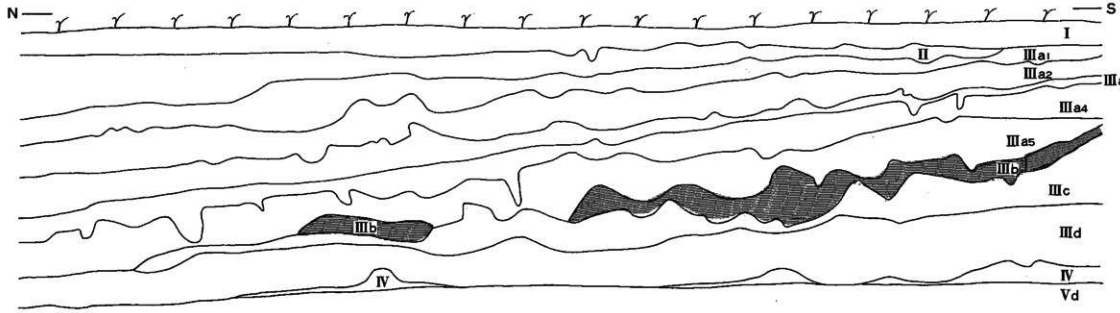
発掘区東端を10m西に移動し、gr34―ち～と、gr47―し～せに至る東西13列、南北4列、208m²のグリッド発掘を実施した。この地点の土層は第Ⅰ層水田耕土27cm内外、第Ⅱ層人工の水田基盤層9～10cm、いずれも黒褐色を呈す。第Ⅲ層黒褐色土層で厚さ40cmであるが、色調の変化が認められたのでさらにこれを4層に分層する。a層は黒褐色、b層は黄褐色の混ローム層、c層は暗褐色を呈する。d層は不整合でブロック状を呈し、他の層は整合状態である。

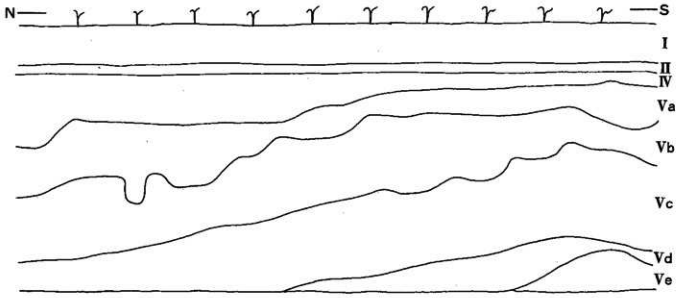
遺跡は、土器片が多く、石器は意外に少ない。出土状態は、散発的であり、若干の枕大礫の集積（図版7）の他遺構は全く認められなかった。集石は組織的な要素は認められず、gr37―たおよび北接するgr38―たから出土した第Ⅲb層と水平のレベル上であったが第Ⅲb層は不整合で、ブロック状を呈するため第Ⅲc層上面に該当する。この周辺に遺物が密集しておりgr34―た・ち・つからgr38―せ・そ・た・ち等の範囲16グリット計64m²に土器片が濃密に分布包含されていた。

遺　物（第27図）

本発掘区における出土遺物は、後述する地層調査を目的としたトレンチ2の出土数を含めて、その総数は、土器破片1,369点、石器42点、黒曜石器及剥片21点、中世陶器4点を数えた。

土器片包含の層位別数量は第Ⅱ層152点、第Ⅲa層585点、第Ⅲb層347点、第Ⅲc層285点で第Ⅲa層が全体の42%を占める。その1部トレンチ3出土土器を層位別に第27図に示す。第Ⅱ層は撹乱されていたが、後期前葉（1）のもの、中期曽利式のもの、井戸尻式期のもの（3・4）の混在を示す。第Ⅲa層は曽利式期のもの（5）井戸尻式期のもの（6・7）、藤内式期の深鉢等が混在する。第Ⅲb層は、土偶片（9）を出土した。小形土偶の上半身部で中央から縦割れした断欠品、現長42mmを測る。乳房は突起し比較的大きい。井戸尻式期に属するものであろうか。土器は井戸尻期（10）、藤内式期のもの（12）が出土しているが、他のグリッドからは曽利式期の出器片も出土し混在が激しく、地層的にもローム質粘土を含み、崩落により転位したものと見られる。第Ⅲc層は井戸尻期のものを若干含み藤内式期（14・18・19・20）が多く、新道式期のもの（15・21）も含み、平出ⅢA系古式のもの（17・22）や、細いRL縄文施文の土器片等、全体に中期中葉から前葉に至る時期のものを包括している。





地層名	厚さ cm	土質	色相	色名度	色名	傾斜度 S→N
I	30	耕土(畑)	7.5YR	3/4	ブラウン	0
II	10～35	混土壌	7.5YR	4/3	ブラウン	
IIIa1	10～40	黒ボク土	7.5YR	4/3	ブラウン	4°
IIIa2	10～30	黒ボク土	10YR	3/2	ブラウン・クロ	6°
IIIa3	5～15	黒ボク土	7.5YR	1/2	ブラック	6°
IIIa4	15～30	黒ボク土	10YR	1.7/1	ブラック・クロ	8°
IIIa5	5～45	黒ボク土	7.5YR	2/1	ブラック・クロ	7°
IIIb	10～45	黒ボクローム土	7.5YR	3/3	ブラウン	14°
IIIc	5～40	黒ボク土	7.5YR	3/4	ブラウン	17°
IIId	20～40	黒ボク土	7.5YR	2/3	ブラウン	3°
IV	20～25	ローム土	(測定不能)	(測定不能)	イエロー	2.5°
Vd	?	ローム土	(測定不能)	(測定不能)	イエロー	1°

第2トレンチ断面層位測定値表

第28図　第VI地点第2トレンチ（上）第1トレンチ地層断面実測図（S＝1/20）

石器は総数70点余が主として第Ⅲ層内から出土した。３区出土を種別に見ると、打製石斧22点磨製石斧１点、敲打器11点、特殊磨石３点、横刃３点、石錘２点で、打斧と敲打器が卓越する。

なお第Ⅵ地点における石器出土総数は116点を数え主として第Ⅲ層から出土している。器種別では、打斧60点、磨斧５点、敲打器32点、磨石１点、特殊磨石６点、横刃７点、石錘５点、黒曜石製小形石器８点、同剥片59点を出土した。大形石器では打斧が40％、敲打器が28％を占め、他種に較べ大きく卓越している。このことは本地点が湿地帯に臨むテラス状微地形であり、縄文人の水辺の活動を表明しているものと考えられる。

4） 地層調査

発掘区における地層の下部構造を把握するために設定した第１トレンチ、第２トレンチについて詳述したい。

① 第１トレンチ（第28・29図下　図版10）

第３区gr4―た～ちにかけて設定して試掘溝（5×1.5m）で長軸はNE10°―SE10°方向を示し、南側段丘崖下端の線と直交する。深さ1.8mまで掘り下げたがその下部は湧水のため中止した。大部分が堅い褐色のテフラ層である。第Ⅰ層黒褐色耕土層35cm、第Ⅱ黒褐色水田基盤層10cm、第Ⅲ層は水田造成時に削平されて無い。第Ⅳ層黄褐色テフラ層20～30cmであるがやや黒味を帯び２次堆積の地層と考えられる。第Ⅴ層はテフラ層、120cm以上で、ａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅに五分類される。まず上からⅤa層は黄褐色を呈し、硬質である。Ⅴb層は黄褐色で白色粉末状粒子を多く含む、厚さ30cm～50cm内外、Ⅴc層は明るい黄褐色を呈し、硬度が高く、黄色のやや大きめの軽石を点々と含む。厚さ60cm内外、Ⅴd層はオレンジ色を呈した軽石層で厚さ30cm内外、Ⅴe層は灰褐色を呈した粘土層で厚さ30cm以下は不詳、第Ⅴ層は、NE10°方向に向って著しく傾斜しⅤa層6°、Ⅴb層9°、Ⅴc層13°、Ⅴd層10°、Ⅴe層15°以上を測る傾斜度を示している。第Ⅴ層以下の基盤層が御岳火山噴火によるテフラ層形成時に傾斜していたことを示している。

テフラ層の層序を伊那盆地段丘上の基準テフラ層と比較してみると第Ⅴd層は、御岳第１軽石浮石帯（PmⅠ）に比定でき得る。第Ⅴe層は粘土化した灰褐色を呈し若干のシルトを含み、同第１軽石浮石帯（PmⅠ′）と思われる。したがって、第Ⅴc層から第Ⅴa層は中期テフラ層中部に該当する、この層より上位のテフラ層はこの位置で不明であるが、5m南側の高さ8mの段丘崖は6m近いテフラ層の堆積が見られる。発掘終了後の改田工事による切削面から見る時、トレンチ南部1m近くの第Ⅲa層の上部に厚さ80cmの厚い黄白色パミス層が存在した。恐らく第Ⅱ′軽石層（PmⅡ′）と思われる。したがって当地点においては、伊那谷型テフラ層の中部テフラ層まで確認できたうえ、この形成時点以前に、第Ⅵ地点の凹地は形成されていたことが判明したのである。

② 第２トレンチ（第24・28図上図版８）

第１トレンチの北端より6m北東にNE45―SW45°方向に設定された試掘溝で、長さ10.5m、巾1m、深さ1.75mの規模である。詳細分布調査時に、黒土層の堆積が厚く、遺物の包含層が余りにも深いのでこれを精密に把握しその原因を確認する目的で深掘したが、湧水が激しく排水溝設定によっても退水せず調査に時日を要した。土質調査は信州大学農学部中堀謙二先生が指導された。

本トレンチの南端は、前述第Ⅲ区のテラス状地形の北縁が終り急に地表角度が変換する位置に設けられ、地層の状態が、前述第３地点と著しく異なる。第Ⅰ層は水田耕土層で黒褐色を呈し厚さ30cm、第Ⅱ層は人工の水田基盤層で10～35cm、PmⅡ′層が混入堆積し黄褐色を呈する。以下自然堆積層で第Ⅲ層は全体に異様に黒味が強く厚さ120～150cmを測り、NE45°方向に著しく傾斜している。色調により５分類に分層された。まずⅢa1層は厚さ10～40cm、単調に4°傾斜し、暗褐色を呈する。Ⅲa2層は10～30で表面の起伏が大きく傾斜角6°を示し、黒褐色を呈する。Ⅲa3層は暗黒色を呈し厚さ5～15cmで6°の傾斜を示す表面の起伏は波うつ。Ⅲa4層は、真黒色を呈し厚さ15～30cmで傾斜角8°を示すが、他の層と異なり南ほど厚く北方は薄くなり上面は単調である。Ⅲa5層は黒褐色を呈し層上面の起伏は極めて激しく5cm～45cmの厚さで平均7°で傾斜する。

第Ⅲb層は暗黄褐色で、ローム質粘土を混入し、層上面の起伏甚しく、時にブロック状を呈し、他上下の層に対し不整合で厚さ10～45cmを測り、傾斜角14°を示し、異相な土層である。

第Ⅲc層は、暗褐色を呈し、層上面の起伏甚しく厚さ5～40cmで17°～14°傾斜し末端は薄くなる。

第Ⅲd層は、暗黒色を呈し、層上面は極めて単調で3°傾斜で平坦化している。厚さ40～20cm。

第Ⅳ層は、汚れた褐色土で、下層のテフラ層と小礫が混在する。厚さ20cm内外で2.5°の傾斜を示す。

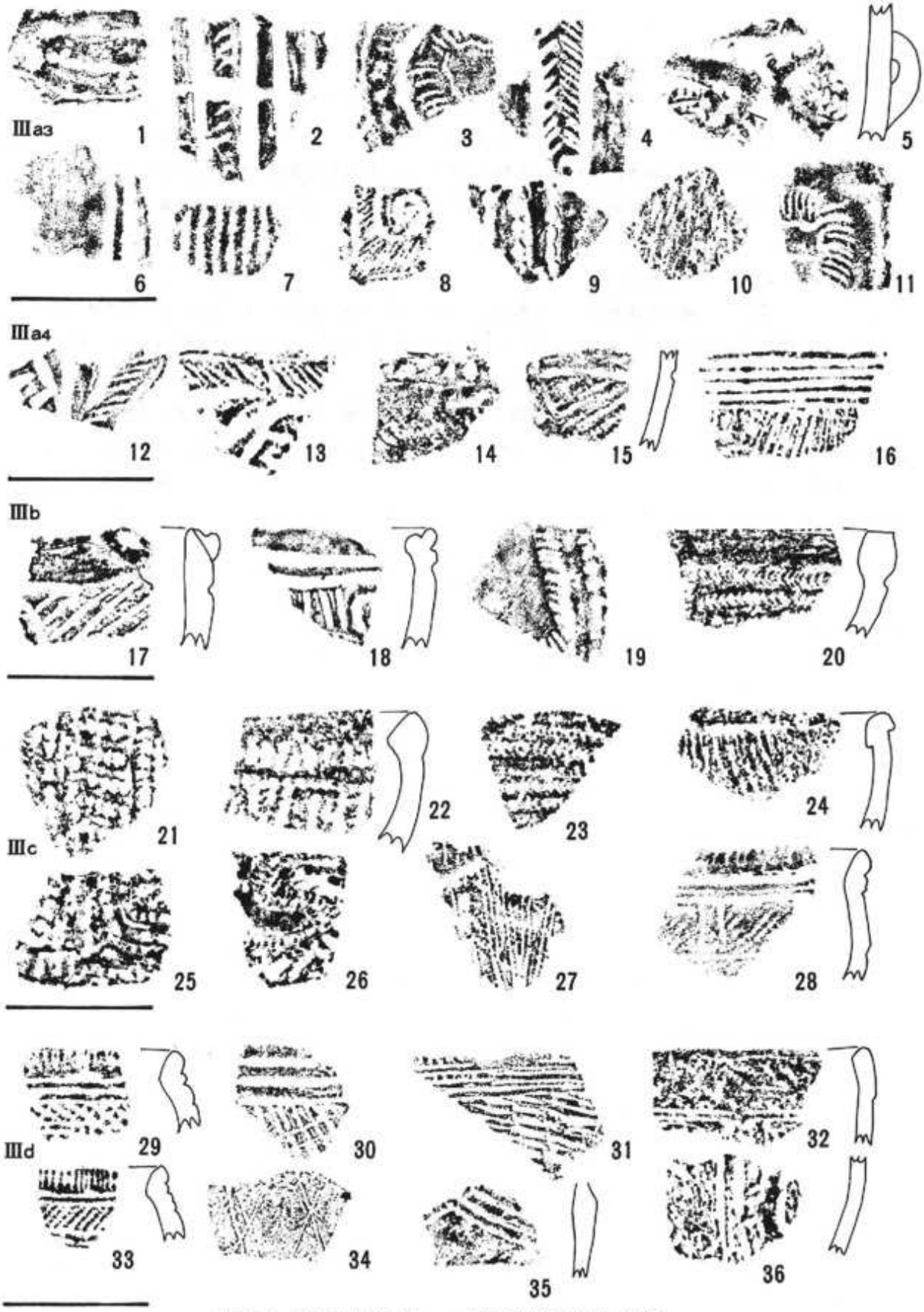
第Ⅴ層は、小礫を混在するが黄褐色を呈し湧水によりやや粘土化し、傾斜は1°ほどで平坦である。

遺物（第29図）は第Ⅲa・Ⅲb・Ⅲc・Ⅲd層から土器片122点、石器１点を散発的に包含していた。Ⅲa層の土器は、a_1層45点、a_3層22点、a_4層８点、を数え、Ⅲb層から26点、石器３点、Ⅲa層21点の出土を見た。その１部を第29図に示した。第Ⅲ層に於ては、Ⅲa_1～$_2$層とも中期初頭から後葉に至る土器片であるが、井戸尻式期のものが大半を占め混在状態である。Ⅲa3では、井戸尻期が大部分で中に藤内式期（3・11）・船元式期のもの（10）等が若干ある。Ⅲa4層では中期初頭のもの（13・14・15）に加えて平出ⅢＡ系古式（16）がある。第Ⅲb層では井戸尻式期（17・18）、新道式期（19・20）が混在しておりⅢc層貉沢式期（21・22・25）加えて、新道式期（23・26）があり、中期初頭期の（27・28）や、船元式期のもの（24）がありほぼ整合している。第Ⅲd層では、集合沈線で飾る踊場式系のもの（29・30）、縄文地に半割竹管文を加える平出ⅢＡ系、古式のもの（34・35）、下島式系の弧状密接沈線施文のもの（31）、桜沢式類似（32・36）等があり中期初頭的な土器で斎一的である。

以上各層の土器内容は細別時期に混在が認められ、南側丘崖または南接するテラス（３区）から雨水等により斜面を移動転位した傾向が濃い、但しⅢb層はほぼ安定していたもののようである。

④　まとめ

（１）　本地点は、「くぼがいと」凹地の南縁にあたる部分で、この凹地の形成の時期は、高見原段丘形成以後の中位段丘完成の時期、即ち、地質年代においては、更新世中期後半の時期と推定される。このことは高見原丘陵を覆う御岳火山灰層による中期テフラ層最下層が基盤であることが認められ、第Ⅳ区の発掘区は、中期テフラの第Ⅱ′軽石層下部まで、自然湧水の滞水によって浸



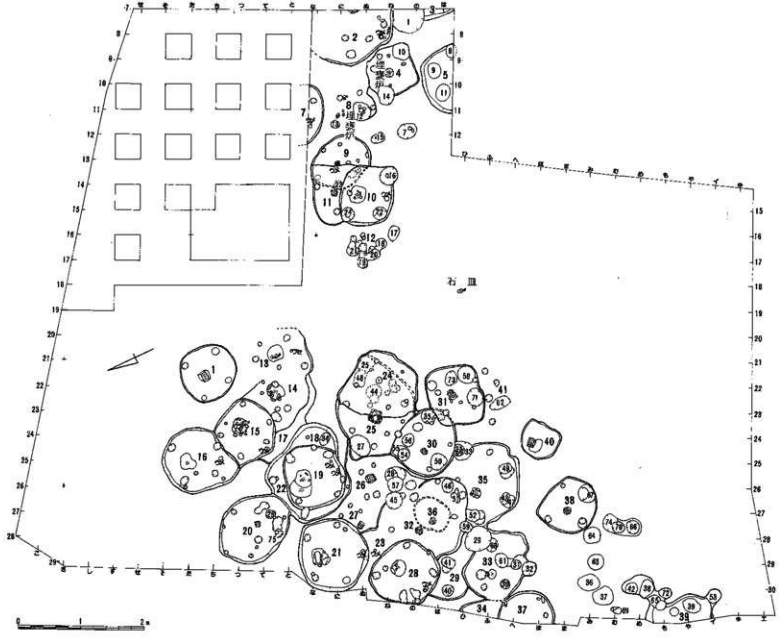
第29図　第VI地点第２トレンチ層位別出土土器（1/2）

蝕されて消滅しており、その上に第Ⅲ層の黒色土壌が堆積していることからも証明される。

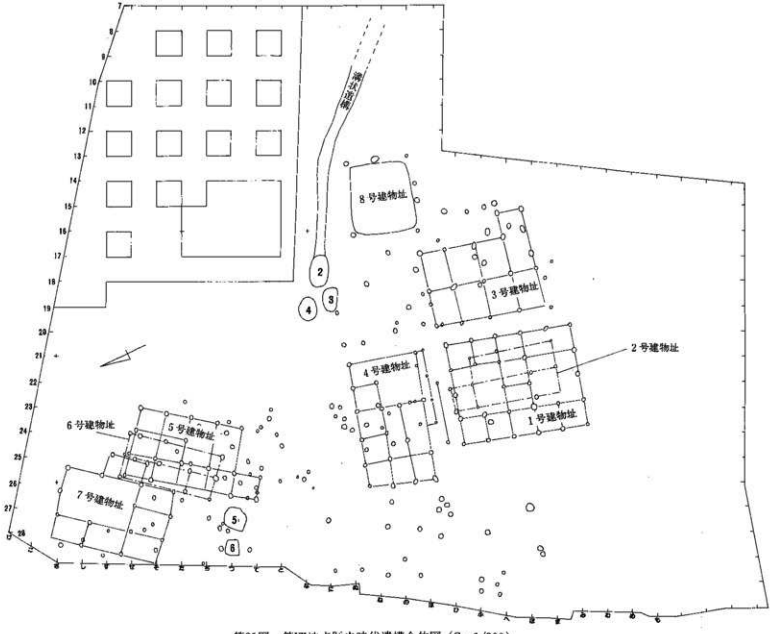
（2） 地表を覆っている黒色土壌は、地質学的名称を与えるならば「黒ボク土壌」であり、その黒色の強いのは「湿地帯性草原」即ち植物の繁茂による有機質堆積の腐植層であることを意味している。厚さ180cm近い堆積は、7層に分層され、各層ごとに湿地の消長、植物繁茂の消長が交替しており、今後各層土壌の分析により、後氷期以後縄文時代から中世に至る植物相と気候変動の様相が把握できる可能性が強い。

（3） 遺物包含層の第Ⅲ層出土の土器は、最下部で縄文前期的様相が濃く認められるがⅢc層以上は、縄文中期全般に亘るものが混在してる。但し、2区中央部、3区東部一帯のⅢc層は遺物が密集していたこと、出土石器に打斧、敲打器が卓越していることなど、水辺における生活痕跡を示すものと解され、集落が営まれた南接の丘陵上には湧水地がないことを併せ考える時、本地点は絶好の水利用の場所と確認できる。また出土土器には高見原全域の土器文化が投影されていると解される。

（林　茂樹）



第30図　第VII地点縄文時代遺構全体図（S=1/300）



第31図　第Ⅶ地点歴史時代遺構全体図（S=1/300）

第6節　第Ⅶ地点

1　概要（第2・4・5・30・31図）

第Ⅶ地点は、60年度の分布調査の折にも遺物が多く出土しており、又中世の遺構の存在の可能性も強い地点であり、一枚の圃場になる所から埋立保存を図ることもできない点など、当初から主力を注いで調査を行わねばと覚悟していた地点であった。

後述するとおり、中世と縄文時代の遺構が重複しかも密集し確認される状態で調査は複雑かつ困難をきわめた。最後は工期に追われる状態となり遺構検出に全力を注いだため、部分的に詳細な調査を行い得なかった点を反省している。

中世の遺構の存在もあり、当初手掘りによる調査を試みたが、中途から第Ⅰ層（耕土）及び桑の抜根について重機にゆだねることとなった。

グリット試掘後・遺構検出等によって全面発掘に切り換える方法を採用した。結果的には、一部北東部分を除いて全面発掘となった。

7～18－し～との地点北東部分は、開田のさいにローム面まで削られていて遺構は検出できなかった。

第Ⅲ層を掘り込んで中世の柱穴址群が検出されたため、第Ⅲ層上面で一担全面拡げ、遺構の調査終了後、下層の縄文時代の調査を行った。縄文時代の遺構検出面は第Ⅲ層下部である。

ひ～へグリットラインに台地の陵線があり、北と南にゆるやかに傾斜している。

第Ⅰ層は平均20cm、第Ⅱ層地場は5cm前後である。地場は非常に固い上，遺物が多量に出土して調査はなかなはかどらなかった。第Ⅱ層の埋土は深い所では50cmを測る。

調査の結果検出された遺構は縄文時代中期の住居址41基と土壙76基、歴史時代の建物址8棟、土壙5基である。全体部に示すとおり、縄文時代の遺構は重複し、密集した状態である。

（気賀沢　進）

2　縄文時代の遺構と遺物

1）第１号住居址（第32・33図　図版11）

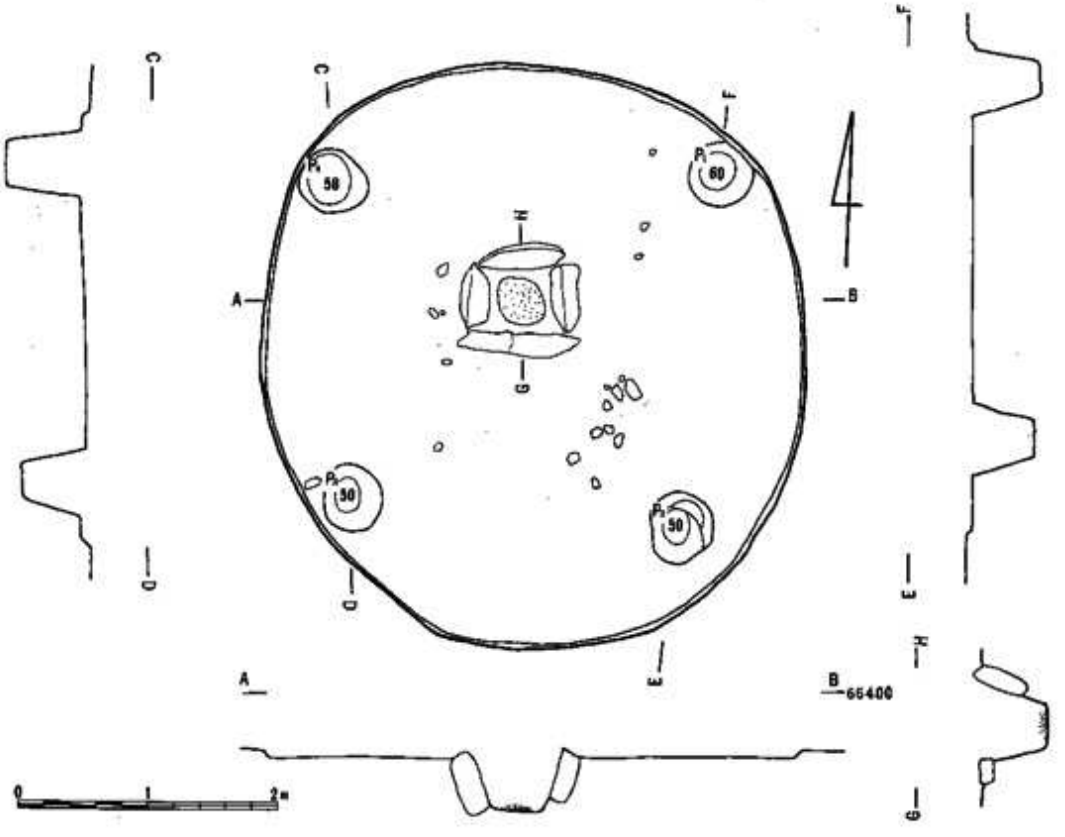
遺構（第32図　図版11）

本住居址は第16号住居址の東側にあり、第16号住居址と共に、第Ⅶ地点では最も北側に位置している。プランは、ほぼ円形で、その大きさは4.5mである。主軸は、おおかた真北である。

壁は開田時の掘削により、現高はわずか８cmにすぎない。床面はロームを固く、つきかためてあり、平坦で良好である。なお、周溝は確認されなかった。

柱穴はP_1、P_2、P_3、P_4の４本であり、P_2を除いて他の３本は壁のすぐ際にある。柱穴の大きさはすべて直径50cm前後で、柱穴の深さはP_1が60cm、P_2、P_3が共に50cm、P_4が58cmと比較的深く掘り込まれている。また、その他支柱穴は検出されなかった。

炉は住居址の中央よりやや北に位置し、方形の石組炉である。炉に使用されていた石はすべて



第32図　第Ⅶ地点第１号住居址実測図（S＝1/60）

残存しており、大きさは外形90×90cm、内形は50×50cmである。炉の深さは50cmで、他の住居址のものと比べて深いものである。炉の中央には直径40cm、厚さ6cmの焼土が充満していた。炉の周囲から土器片が断片的に出土したが、小片ばかりで量も少なかった。

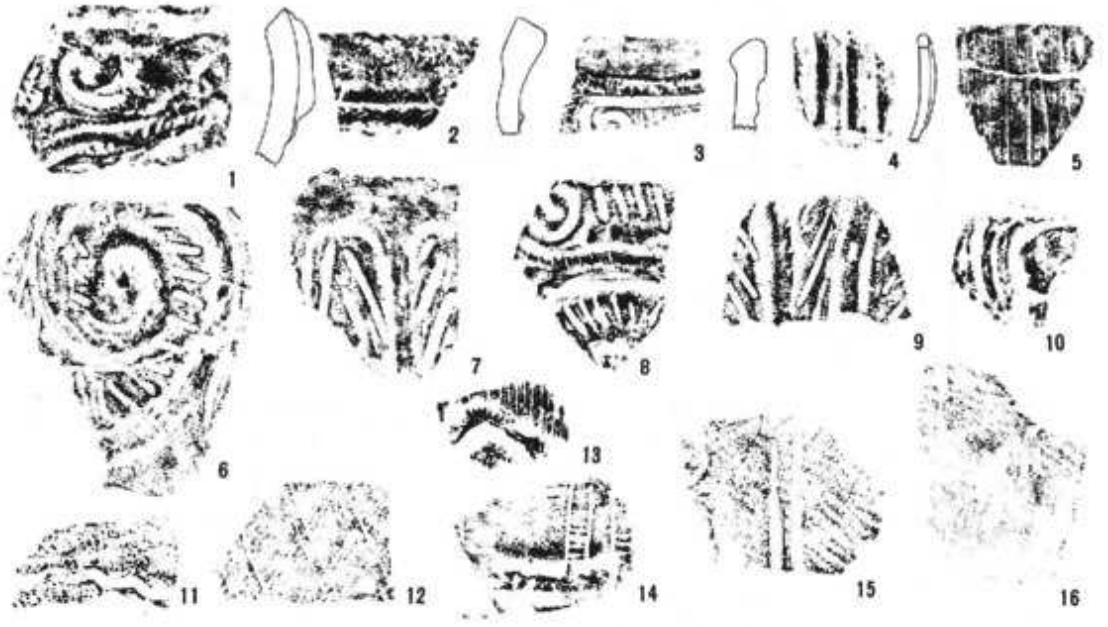
遺物（第33図）

本住居址より出土した土器は小片ばかりで、復原可能なものは一点もなく、量も少なかった。1～16は拓影で、すべて深鉢形土器の胴部である。

1～4は口縁部である。1は粘土紐の隆帯で渦巻文を施し、2･3は共に隆帯文上に突差し文を施している。4は浮隆線文による口縁部破片で、井戸尻最末期から曽利期にみられるものである。5は細い沈線を懸垂させている。6は本住居址の中で比較的大きな破片で、隆帯により渦巻文をつくりだし、沈線を放射状に施文している。7は隆帯によって区画された中を沈線で綾杉状に施文している。11は沈線を蛇行させている。12は半割竹管の平行沈線をX字状に交差させている。15･16は底部で粗目の縄文を全体に施し、沈線を懸垂させている。

総じて曽利II式期に属するが、5・12はこれに先行する平出III類Aに属するものであろう。

石器は少なく不定形石器9点と剥片5片、黒曜石の石核1点のみである。（酒井健次）



第33図　第VII地点第1号住居址床面出土土器（1/3）

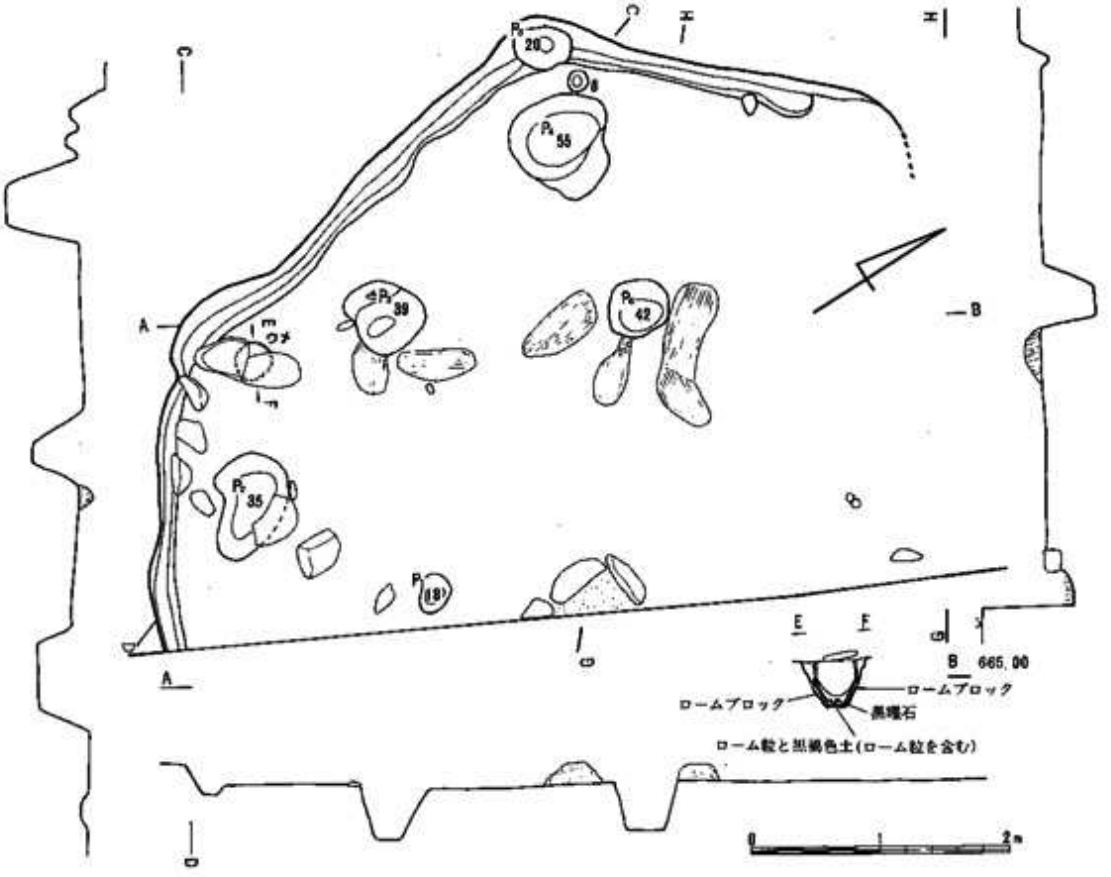
2） 第２号住居址（第34、35図　図版12・40）

遺構（第34図　図版12）

本住居址は第Ⅶ地点の東端に位置し、東側半分は調査区域外のため残念ながら未発掘である。また北側は開田時の掘削によると思われるが、削り取られている。プランは六角形であろうと推定され、大きさは南北７m前後と思われる。主軸はN－82°－Wである。壁はゆるやかで、現高は20cmである。床面はロームを固くつきかため、周溝は幅20cm、深さ10cmのものが確認された。

柱穴はP_1、P_2、P_3、P_4、P_5、P_6の６本が確認されたが主柱穴はP_2、P_3、P_4で、P_1、P_5、P_6は支柱穴と考えられる。なお、本住居址は火災によって焼失したものとみられ、P_3、P_6の周辺からは幅30cm炭化した木柱が倒壊した状態で検出された。

炉は住居址のほぼ中央に位置していたが、前述の事情により、1/3ほどしか検出できなかった。自然石を用いた石組炉で、大きさは100cm×100cmほどのものと推定される。



第34図　第Ⅶ地点第２号住居址実測図（S＝1/60）

埋甕(1)はP_2、P_3の中間の周溝のすぐ際から検出され、自然石の平石2個がその上にのせられていた。埋甕は床面を40cmほど掘り込み、周囲にロームブロックを施し、甕を正位に埋納している。甕の中にはローム粒を含む黒色土があり、その中に黒耀石製の剥片が1片含まれていた。出産時にへその緒・胎盤を切除した際に使用したものではないかと考えられ、埋甕の性格を研究する上で貴重な資料となるものである。また、埋甕の東側には人頭大の石が4点、周溝に沿って並べられていた。

遺物（35図　図版40）

1は埋甕で口唇部を欠いている。頸部がくびれ、胴部はふくらみをもつ。口縁部は隆帯で渦巻文を施文し、連続突刺文で埋めている。胴部は隆帯のワラビ手文、沈線の蛇行文を懸垂させ8分画し、その中を沈線で綾杉状に施文している。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み焼成は良好である。胴上半部以上には炭化物が付着している。

2は深鉢形土器の底部で黄褐色を呈し、胎土に長石を多く含み焼成は良好である。

3は土偶の下半身部である。脚部は分離して作られておらず、胎土を削って表現している。臀部を突き出し、沈線でさらに強調している。正面から側面にかけて、沈線で三角文をつくりだしその中を短い沈線で施文し、衣服を表現しているのではないかと考えられる。

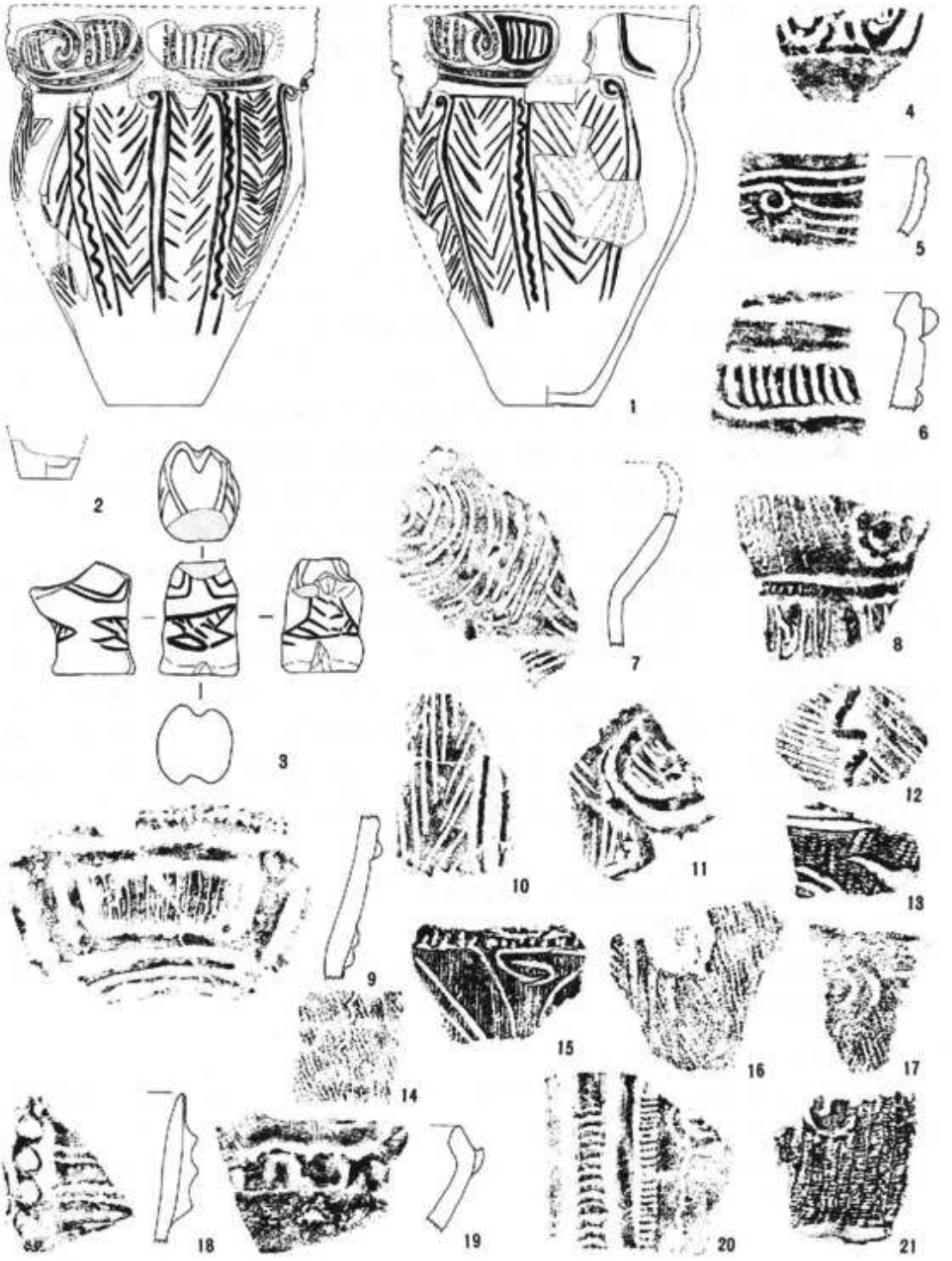
4～9は深鉢形土器の口縁部である。4は隆帯でウロコ状に施文している。5は沈線でワラビ手文を施し、これに併行して沈線を施文している。6は隆帯で区画し、その中に沈線を懸垂させて埋めている。7は頸部がくびれており、沈線をウロコ状に施文している。　10～17は胴部で、10は2本1組の隆帯を懸垂させ、区画し、その中を沈線で綾杉状に埋めている。11は隆帯で渦巻文を施し、その中を沈線が埋めている。12は隆帯を蛇行させ、その周囲に沈線が走っている。15は地文に細沈線を使用し、沈線による懸垂文・ワラビ手を描いている。16・17は地文に縄文を使用し、沈線で懸垂させている。16は隆帯の渦巻文が施文されていたと思われるが、はがれてしまっている。17は沈線で渦巻文を施文している。

18・19は口縁部である。18は浮隆線文で円弧を連続して懸垂させ、沈線を併行させている。19も浮隆線文で楕円文を横に連続させている。

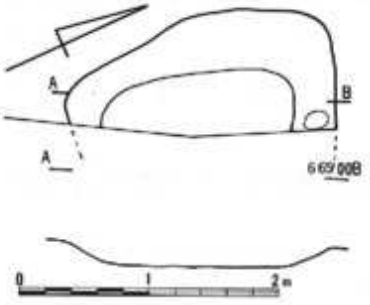
20・21は胴部である。20はキャタピラ状文を2本懸垂させ、沈線で渦巻文・蛇行文を施文している。21は粗目の縄文を懸垂させている。

一部を除き総じて曽利II式期に該当する。

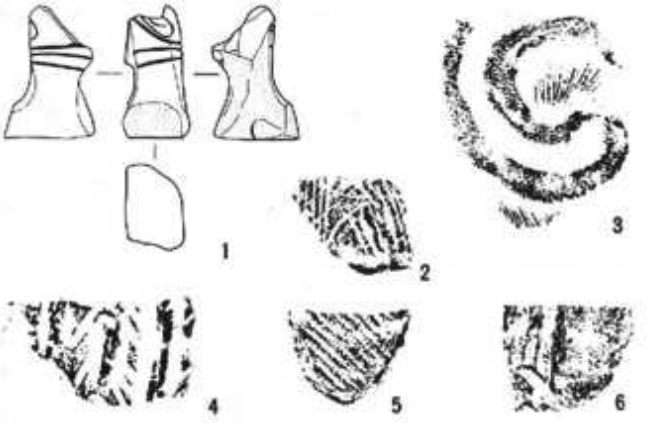
石器は全部で61点出石している。打製石斧25点，磨製蛤刃石斧2点、大形石匙1点，敲打器6点，磨石1点、凹石1点、横刃形石器3点、ピエスエス・キーユ、掻器、削器各1点ずつで、他に剥片58点、黒耀石の石核1点が出土している。　（酒井健次）



第35図　第Ⅶ地点第２号住居址床面出土土器（1、2は1/6他は1/3、1は埋甕）



第36図　第Ⅶ地点第３号
住居址実測図（S＝1/60）



第37図　第Ⅶ地点第３号住居址床面
出土土器及び土製品（1/3）

3）　第３住居址（第36、37図　図版11・46）

遺構（第36図　図版）

本住居址は第２号住居址の南に位置している。西側一部分の検出をみただけで、残りは調査区域以外のため残念ながら未発掘である。プラン・主軸共に不明である。壁はなだらかな傾斜をみせているにすぎない。

遺物（第37図　図版11）

前述のとおり、本住居址はほんの一部分の検出であるため、遺物も極めて少ない。

１は土偶で左側の脚部である。つま先を欠損し、内側にも脱離した跡が認められる。3本の沈線を上部にめぐらせ、一番上の線は渦巻文となっている。

3～6は深鉢形土器の胴部である。3は隆帯により渦巻文をつくり、放射状に沈線を放っている。

4は隆帯を懸垂させ、その中を沈線で綾杉状に施文している。

総じて曽利Ⅱ式期に比定される。

石器はまったく出土していない。　（酒井健次）

4）　第４号住居址（第38、39図　図版13・40）

遺構（第38図　図版13）

本住居址は調査区の東部分に位置し、第2・5・8号住居址に囲まれている。

北西部と南東部は土壙によって壁が壊されており、プランは明瞭ではないが、ややくずれた方形であろうか。柱穴の位置から考えると主軸が合致しない点が問題を残している。

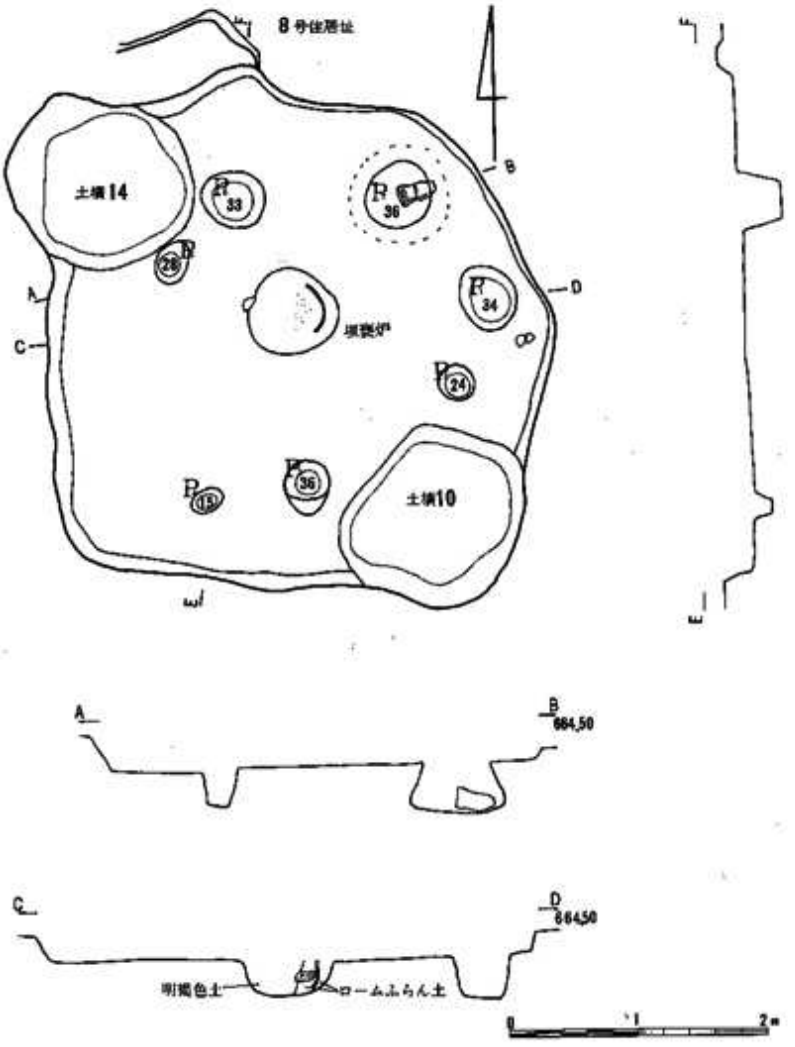
主軸方向はN－33°－Wと考えられる。

壁はゆるやかで、西側及び南側は深く20～25cm前後、北東部が最も低くて10cm前後である。

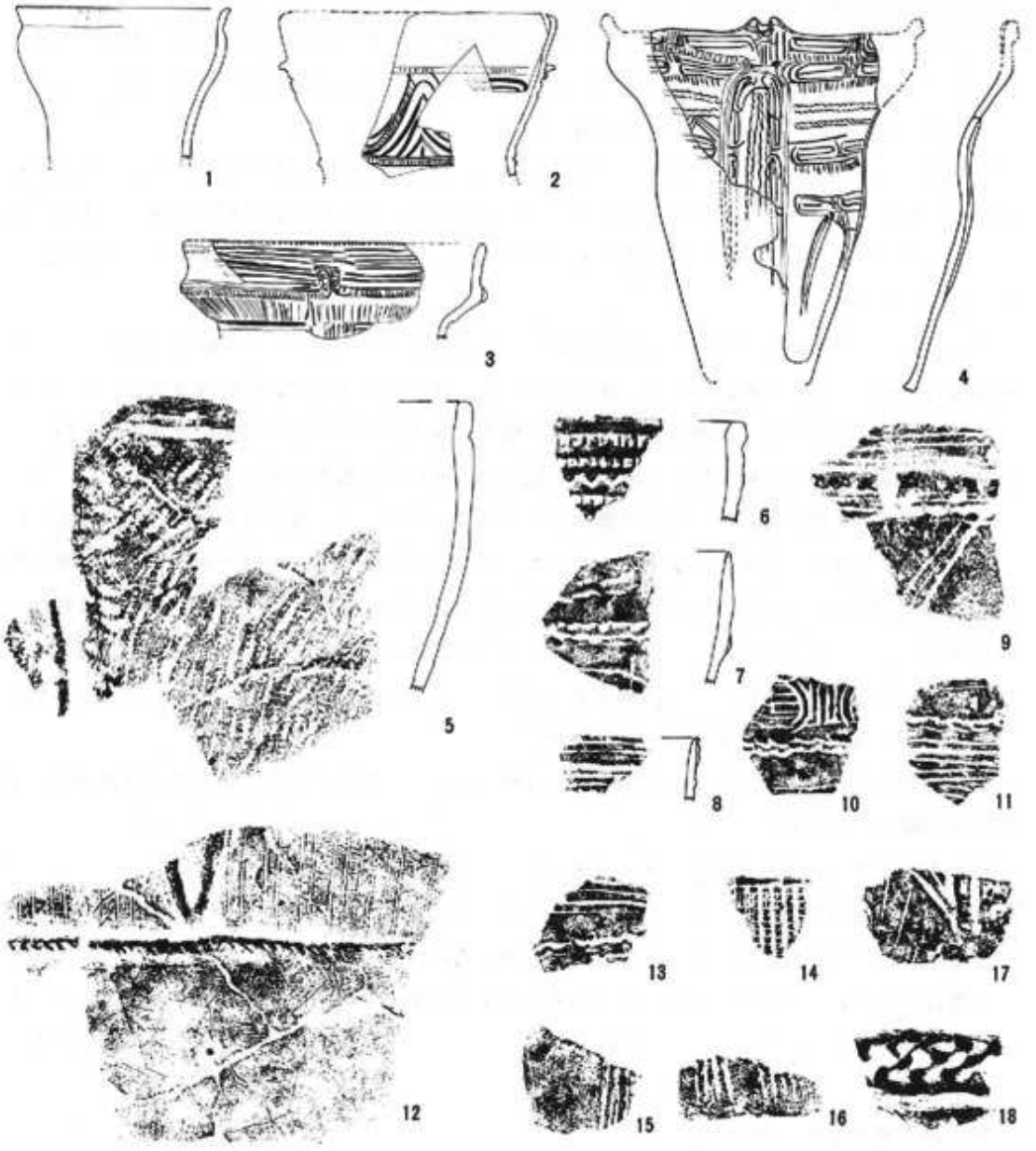
床面は南西部がやや低くなるが、ほぼ平坦である。ロームを掘り込んだ床面はタタキしめられているが、炉周辺を除きあまり固くない。炉は中央やや北西よりにありいわゆる埋甕炉で70×65cmのほぼ円形をなし丸底形に掘りくぼめられ、小形深鉢形土器（第39図－1）の上半部が半分東側部分に埋設されていた。

主柱穴としては、P_1、P_3、P_6が考えられ、4本であったと考えられる。P_2、P_4、P_5は支柱穴であろう。

炉の北東壁ぎわに深さ40cmの袋状ピットがあり、小形深鉢形土器（第39図－4）が横つぶれの状態で出土している。



第38図　第Ⅶ地点第4号住居址実測図（S＝1/60）



第39図　第Ⅶ地点第４号住居址床面出土土器

（1～4は1/6他は1/3、1は埋甕炉、4は袋状ピット内出土）

遺物（第39図　図版46）

出土土器はあまり多くないが1～5と器形を知り得るものは多い。

1は炉内埋設土器で胴下半部を欠き半分しかない。胴央部からゆるやかに外反し内湾する口縁は口唇部を強く外反させている。口唇部に顕著な指頭痕を残すほかは無文である。雲母を多量に含みキラキラしている。内面は横、外面は縦の丹念な磨きを施し焼きが良く一見土師器を思わせる。色調は明黄褐色で内面にはすすが付着している。

2、3はともに5分の2ほどの破片から図上復原したものである。2はキャリパー形の小形深鉢形土器で、内屈する口唇部はそぎ状を呈している。口縁部とくびれる頸部に刻みを持った隆帯をめぐらし、その間は沈線による三叉文等が施される。雲母を多量に含み、丹念な横ナデ調整を行い固く焼かれている。

3はやはり小形深鉢形土器で、胴部以下はない。頸部から強く外反した口縁はほぼ直立し、口唇部は丸味をおびる。口縁部に1条の隆帯をめぐらしせり上がり状の突起を表出させ、その上位には鋭った棒状工具により乱雑な深目の沈線が横位に施されている。口唇部には刻み目を持つ。くびれる頸部に1条の沈線をはわせ隆帯との間には沈線が縦に施される。

4は袋状ピット内底部につく感じで横つぶれの状態で出土した。当初完形に近い状態であったが、はがれてしまい一部復原することとなった。ややくびれる頸部から強く張出した口縁部は内屈し、2個と1個のこぶ状突起を交互に施している。文様帯は突起に併せ、2条と1条の隆帯による懸垂文によって4分画されている。沈線による方形区画文を4段に配しその間には、波状文等によって充填される。胴部は方形区画文より円弧文が下垂される。雲母を含み固く黒褐色に焼かれている。平出ⅢA型式に属するものである。

5は無頸壺で直立する口唇下に1条の太い沈線をめぐらし胴部は直交する隆帯で区画され、全面に粗い縄文が施される。

12は大形の深鉢形土器の破片である。他はすべて深鉢形土器の小破片である。

出土土器には時期差のあるものもあるが1・3・4からすると当住居址の時期は九兵衛尾根Ⅰ式期に比定でき得ると思われる。17・18は曽利期初頭のものである。

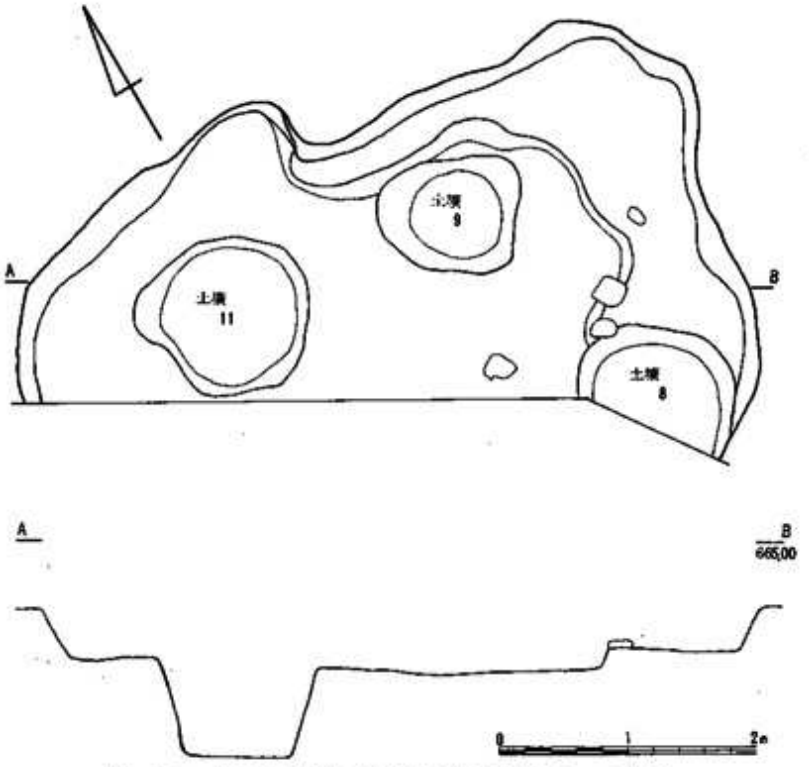
石器は少なく15点ですべて床面出土である。内訳は打製石斧5点、石錘3点、敲打器4点、不定形石器3点で、他に剥片27片が出土している。　（気賀沢進）

5）　第5号住居址（第40、41図）

遺構（第40図）

本住居址は4号住居址の南側に位置している。南側半分は調査区域外のため未発掘である。プラン・主軸共に不明である。壁は直に近く現高40cmである。さらに内側にも、もう一段壁があり現高は20cmである。床面はロームを固くたたきしめている。

本住居址からは土壙8・9・11が検出されたが、柱穴・炉等は検出されなかった。



第40図　第Ⅶ地点第５号住居址実測図（S＝1/60）

遺物（第41図）

本住居址からは土器片が断片的に出土したのみで、復原可能なものは１点もなかった。

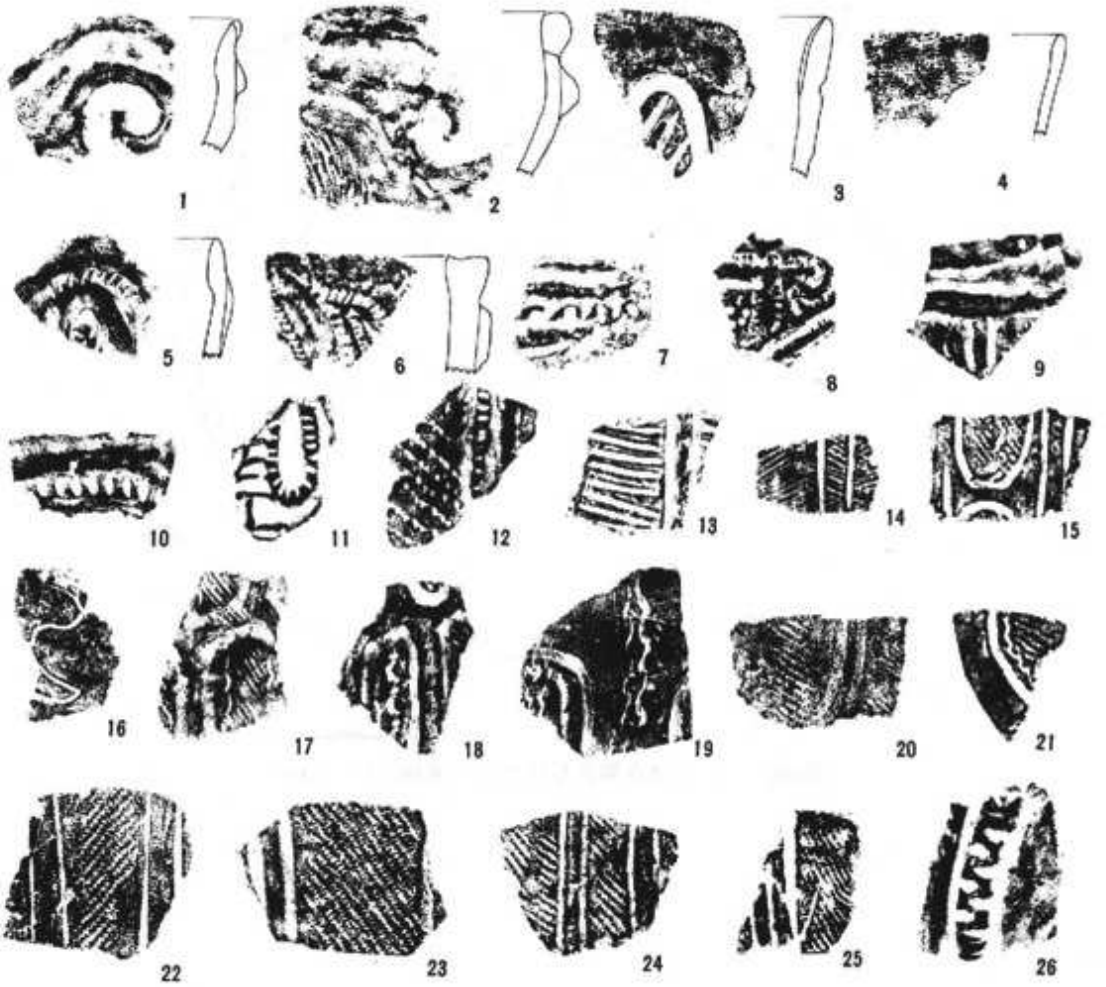
1～10は深鉢形土器の口縁部である。1は隆帯により渦巻文を施文している。3は太い沈線を器面にえがき、その中を沈線で斜状に施している。5は隆帯の間を沈線を刻んでいる。7は沈線で蛇行文を施し、それに併行して隆帯を施している。

11～26は深鉢形土器の胴部である。12は１条の隆帯を懸垂させ連続点列文を刻む。13は隆帯を懸垂させ、沈線を横に連続させている。9、15、17～19、21は結節縄文がみられる。

22～25は地文に縄文を用い２条を１組とする懸垂沈線が施されその内部は縄文がすり消されている。

6、11、14などやや先行するものもみられるが総じて曽利Ⅲ式期に比定される。

石器は少なく14点出土しておりすべて床面出土である。打製石斧２点、磨製蛤刃石斧・石錘各１点、石磯２点、石錐１点、不定形石器７点で、他に剥片10片が出土している。　（酒井健次）



第41図　第Ⅶ地点第５号住居址床面出土土器（1/3）

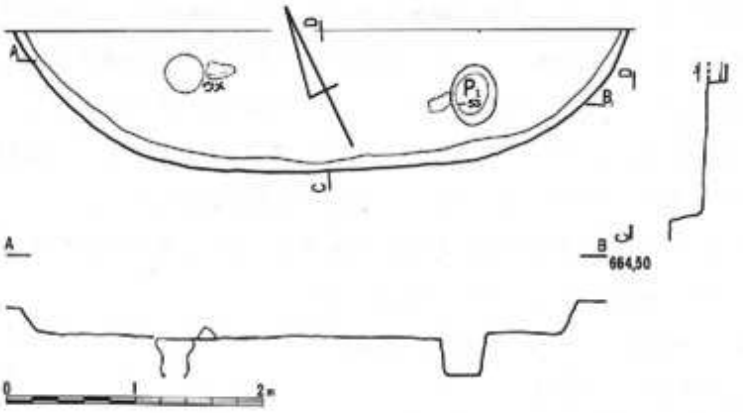
6）　第７号住居址（第42、43図　図版14・40）

遺構（第42図　図版14）

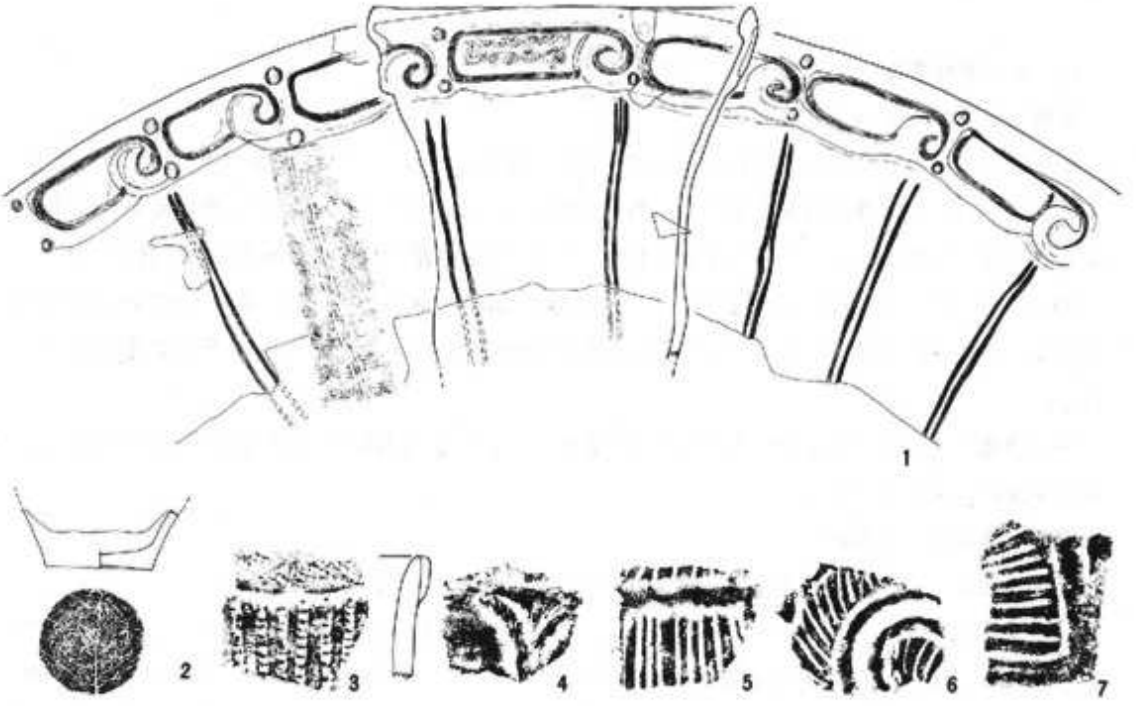
本住居址は８号住居址の北側に位置している。耕作による攪乱のため、南側の一部分が残存しているのみで、他はカットされている。プランは円形・あるいは楕円形と推定され主軸は不明である。壁は直に近く、現高は30cmである。床面はロームを固くたたきしめ良好である。

柱穴はP_1のみが確認された。50×40cmの楕円形で、深さ53cmである。

埋甕は西側南壁ぎわから検出された。埋甕の上に、石は乗せられていなかった。



第42図　第Ⅶ地点第７号住居址実測図（S＝1/60）



第43図　第Ⅶ地点第７号住居址床面出土土器（1、2は1/6他は1/3、1は埋甕）

遺物（第43図　図版40）

本住居址は、ほんの一部分が検出されたのみで、遺物も少なかった。

1は埋甕で底部を欠いている。器形は頸部をくびれさせ、胴部がわずか張り出している。口縁部は隆帯文で渦巻をつくり7分画している。内側にはかすかであるが縄文を施文させている。また分画の切れ目ごとに、上下1対の円が刻まれている。頸部から胴部にかけて、2本1組の沈線が懸垂され、7分画させている。そして胴部にも不明瞭な縄文を施文している。色調は全体に黒褐色で、胴土に砂粒や雲母をやや多く含んでいる。なお、焼成は良好である。

2は深鉢形土器の底部で木葉痕がみられる。白黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含んでおり、内外共にザラザラし、焼成はあまり良いとは言えない。

3は鉢形土器の口縁部で、口唇部に隆帯を施し、その上を竹管で施文している。さらにその下には竹管による連続押引文が懸垂している。

4～7は深鉢形土器の胴部である。5～7は隆帯を施し沈線で埋めている。

1は加曽利EIII式に比定でき得ると思われ、総じて曽利III式期に属すると思われる。3·4はやや先行するものである。

石器は7点と少なく不定形石器1点が覆土出土で6点は床面出土である。6点の内訳は打製石斧2点、敲打器3点、横刃形石器1点である。　（酒井健次）

7）第8号住居址（第44、45図　図版14・40）

遺構（第44図　図版14）

本住居址は第4号住居址の北側・第7号住居址の南側に位置している。他の住居址と比べ上位にあったため、開田時の破壊を受け東・西・北側はカットされている。また、南側も第4号住居址によりカットされ、そのプランは全く不明である。壁も明瞭ではない。床面は固く良好である。

柱穴はP_1、P_2、P_3の3本が確認された。P_1は50×40cmの楕円形で、P_2、P_3は直径40cmの円形である。深さはP_1が28cm、P_2、P_3が15cm前後と比較的浅い。また、P_1のすぐ際には集石がみられる。

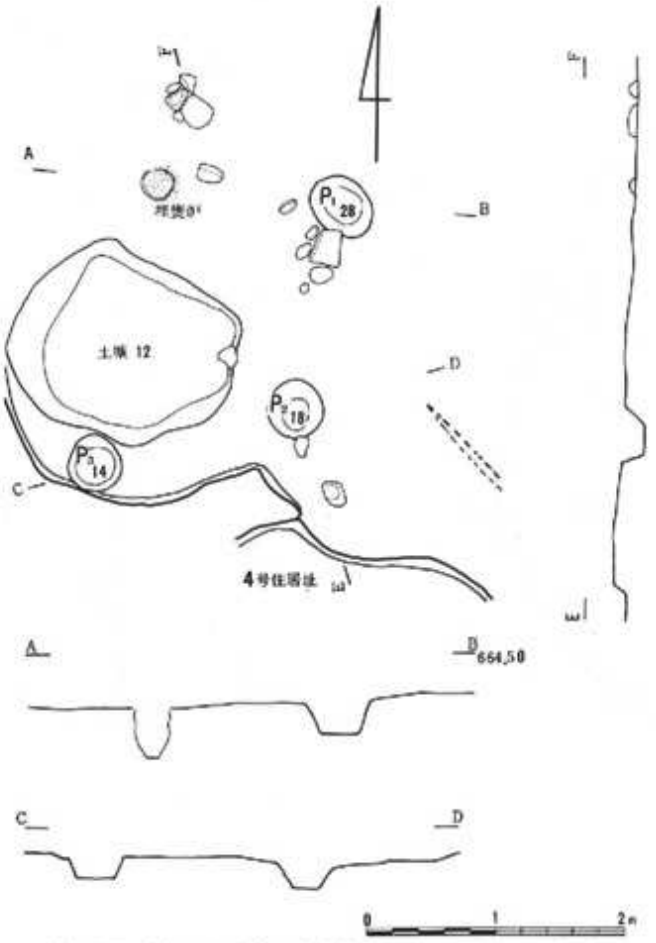
炉は埋甕炉である。炉の北側には人頭大の集石がみられる。内部には焼石がわずかにみられる。炉の南側には土壙12がある。

遺物（第45図　図版40）

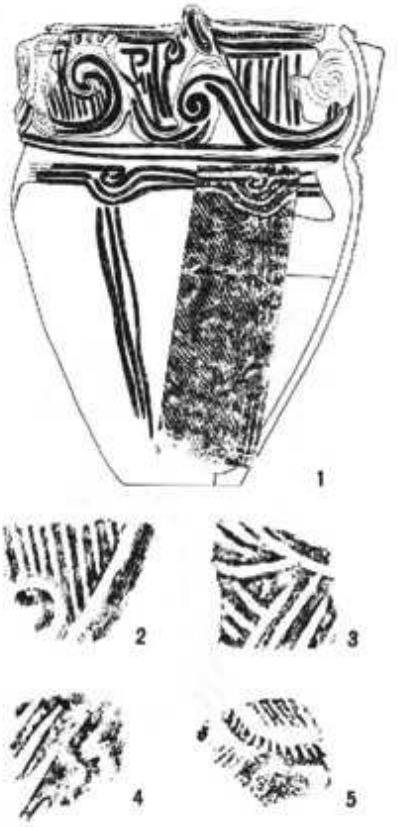
遺物は極めて少ない。耕作による攪乱が相当激しかったことを物語っている。

1は埋甕炉に用いられていたものである。ほぼ完形で口縁部は内屈し、頸部をくびれさせ、胴部をやや張り出している。口縁部はワラビ手を隆帯でつくり6分画している。その中を沈線で懸垂させている。胴部は地文に縄文を使用し、頸部は3本1組の沈線を横に施文し、一番上の沈線はワラビ手状をなしている。さらに、3本1組の沈線を懸垂させ6分画している。色調は赤褐色を呈し、口縁部と頸部には炭化物・タール状のものが付着している。胎土には砂粒を多く含んでおり、焼成は良好である。

2～5は深鉢形土器の胴部である。2は隆帯によるワラビ手文がみられ沈線を斜状に施している。



第44図　第Ⅶ地点第８号住居址実測図（S=1/60）



第45図　第Ⅶ地点第８号住居址床面出土土器（１は1/6他は1/3、１は埋甕）

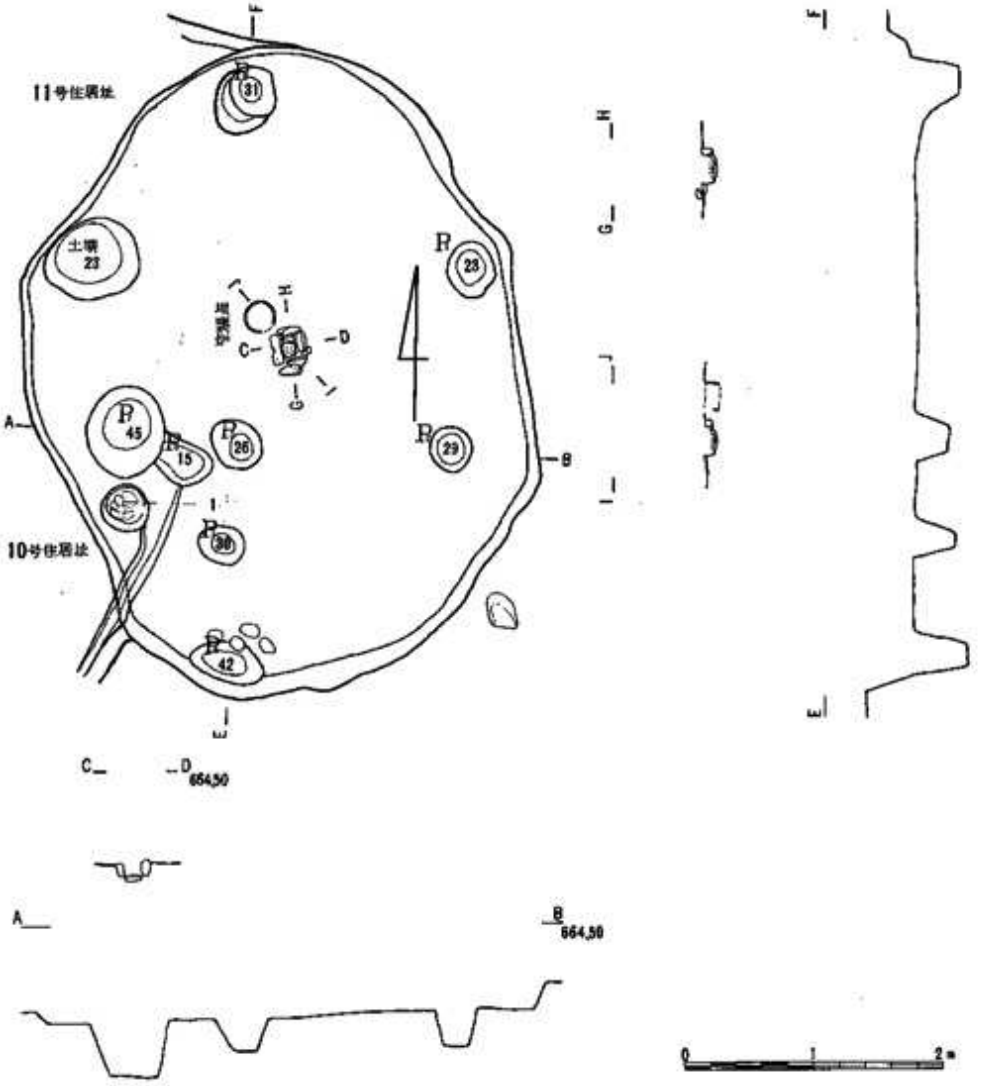
3は太い沈線を施し、さらに沈線で斜状に埋めている。4は隆帯による蛇行文がみられる。

総じて曽利Ⅱ式期に属する。

石器は床面から９点出土しているのみで少ない。

打製石斧２点、小形石匙１点、敲打器２点、不定形石器４点他に剥片３片が出土している。

（酒井健次）



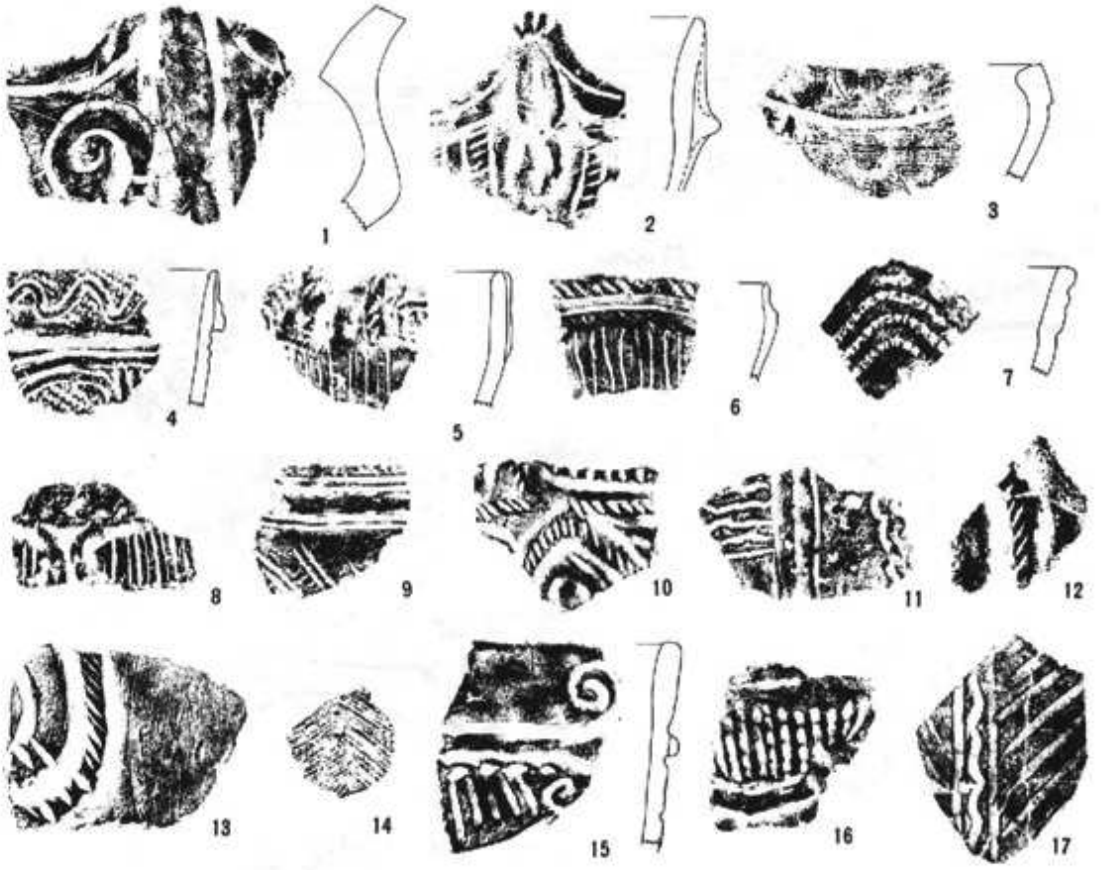
第46図　第Ⅶ地点第９号住居址実測図（S＝1/60）

8）　第９号住居址（第46・47・48図　図版15・16）

遺構（第46図　図版15・16）

本住居址は第８号住居址の西側にあり、南西部は第10号住居址、北西部は第11号住居址が貼床している。第10号住居址との床面差は5cm前後、第11号住居址とは中央部にて10cm、壁ぎわでは20cmを測る。

平面形は長楕円形を呈し、4.9×3.3mである。主軸はN－8°－Wである。



第47図　第Ⅶ地点第９号住居址覆土出土土器（1/3）

床面は西に向かってやや下がっており、ロームをタタキしめた床は固く良好である。

壁はゆるやかで、壁高は南側で30cm前後北側では15cm前後である。

主柱穴はP_1・P_2・P_3・P_7・P_8の５本と考えられ、P_4・P_5は支柱穴であろう。

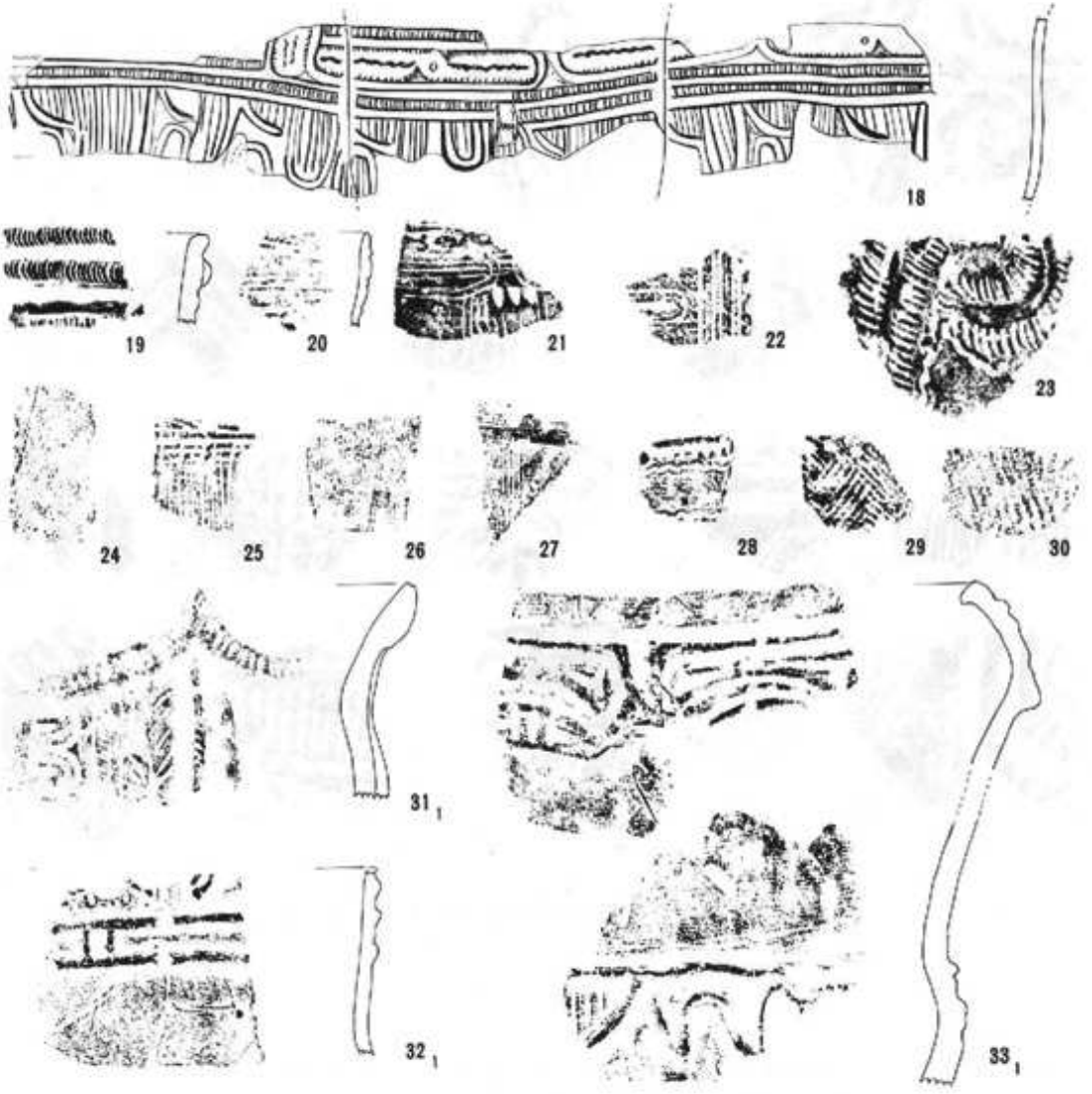
炉は中央やや北東寄りに位置し、方形の石組炉である。外形30×25cm、内形20×15cmを測り、組長い自然石を４個用い、焚口部は横長に他は縦長に裾えられている。深さは5cmで底には平盤な自然石が敷かれている。焼土は底に薄くみられた。炉の北西部に深鉢形土器（第48図―18）の胴部が埋設されていた。副炉と考えられる。

南西部床面には第10号住居址の周溝が掘り込んでいる。P_7の南側が若干くぼめられ、深鉢形土器の破片（31～33）が埋め込まれていた。

遺物（第47・48図）

土器はかなり多く出土している。第47図は覆土、48図は床面出土のものである。

器形を知り得るものは、18・31～33ぐらいで他はすべて小破片である。



第48図　第VII地点第９号住居址床面出土土器
（18は1/6他は1/3、18は埋甕炉、小数字は出土位置）

18は副炉として埋設されていたもので深鉢形土器の胴部である。竹管工具による方形区画文・U字文・波状文を器面に配している。区画文の内部に印刻文をもつ。梨久保式土器に比定されるものである。砂粒を多く含み黒褐色に焼かれ、外面には炭化物が付着している。

20～22・24～28は同系列のものである。

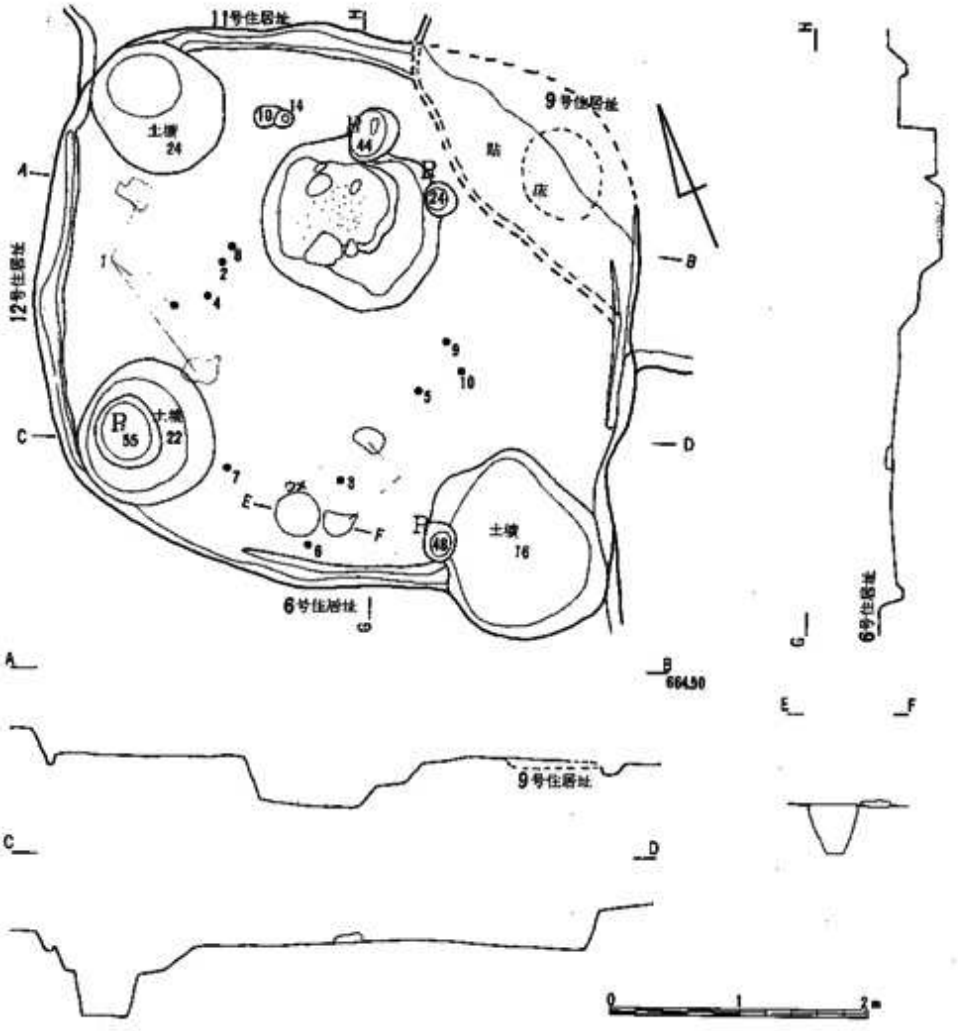
31～33はともに深鉢形土器の口縁部破片である。

出土土器には時期を異にするものもみられるが、総じて中期初頭九兵衛尾根期に属すると考えられる。

15～17は曽利期、1・3・13・23・31～33は井戸尻期のものである。31～33は前述したとおり一括出土しており、住居址と時期を異にし土壙の一部であったとも考えられる。

石器は24点出土している。石鏃1点が覆土より出土している外はすべて床面出土である。打製石斧3点、磨製蛤刃石斧・石錘各1点、特殊敲打器4点、磨石2点、横刃形石器2点、円形掻器1点、不定形石器9点で、他に剥片51片と硬砂岩の原石1点が出土している。

（気賀沢　進）



第49図　第Ⅶ地点第10号住居址実測図
（S＝1/60、1～7は土器、8は打製石斧、9は石錘、10は凹石）

9) 第10号住居址（第49・50・51図　図版15・16・41）

遺構（第49図　図版15・16）

当住居址は第11号住居址、第12号住居址を切って造られており、北東部は第9号住居址に貼床している。また中央南半上面には当住居址の覆土をタタいて中世の第8号建物址が造られている。その床面差は15cm内外である。北東部の壁は検出できなかったが、周溝の一部が第9号住居址の床面まで達しており、プランはほぼ復原できる。4.6×4.2cmの隅丸方形を呈している。主軸方向はN—24°—Eである。

第11号住居址との床面差は、10cm、12号住居址とは20cm前後を測る。床面は中央部がやや高く壁ぎわが低くなっている。ロームをタタキしめた床は炉周辺を除きあまり固くない。

柱穴はP_1・P_2の2本が考えられるが、土壙によって壊されたのかはっきりしないが4本であったと考えるのが妥当であろう。P_2は土壙22を掘り込んでいる。

炉は方形の石組炉であったと考えられるが、炉石はすべて抜きとられたのか現存しない。掘り形は外形1.4×1.3m、内形0.9×0.7mで東側に段を持ち深さは35cmほどである。底に5cmほど焼土が堆積している。内部からは土器とともに人頭大からこぶし大位の自然石が雑然と検出されている。また炉周辺の覆土中よりも同様の自然石が10個ほど確認されている。

南壁ぎわやや西に寄って正位の埋甕（第51図—19)）が発見された。埋甕のすぐ東わきには、平盤な花崗岩が半割りで据えられており、50cmほど中央によった所にその半分が床面にすえられていた。

遺物は炉周辺及び南半部に集中して確認されている。

遺物（第50・51図　図版41）

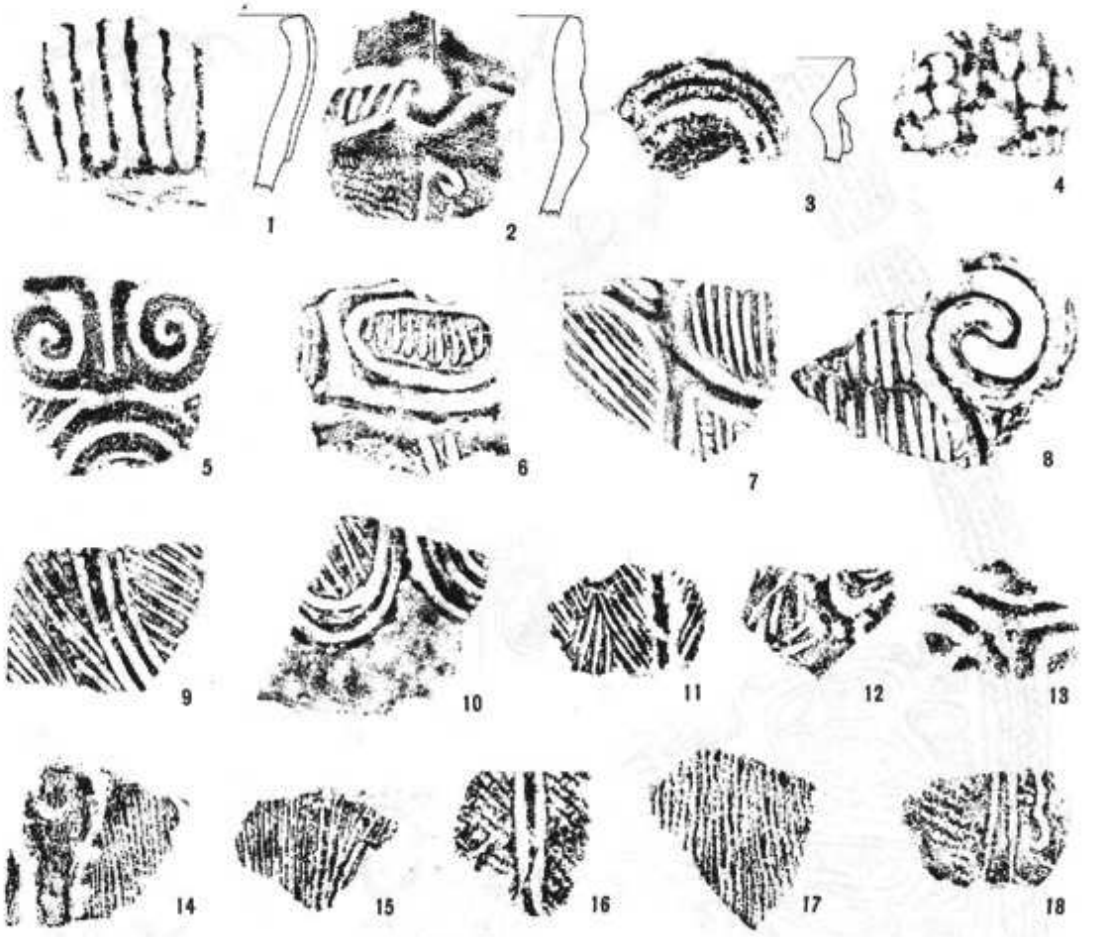
土器は多量に出土しているが、全様を知り得るものはその割に少ない。

第50図は覆土出土のもの、第51図は床面出土のものである。1～18はすべて深鉢形土器の破片である。

19は埋甕で完形品である。口唇直下に最大径を持ついわゆる甕形土器で、口唇部は内そぎ状となる。口縁部には組紐状の隆帯で7区画し、内部は方形区角文と波状文が施される。胴部は口縁部文様に相応して隆帯によるワラビ手文が配され、内部は沈線の綾杉文が充填する。砂粒をわずかに含み、丹念な横みがきが施され暗茶褐色に固く焼かれている。

20は土壙22と24のわきから出土した接合資料（1）で、胴上部に最大径を持ったスマートな土器で底部を欠き半完形品である。口唇部は受け口状を呈し、渦巻文を持ったブリッチ状把手を1個配し、他は3個の舌状突起がつく。頸部は沈線のワラビ手文を横走させその間には沈線が縦に施される。胴部は4個の隆帯によるワラビ手文が配され沈線文が充填し底部に近い部分は無文である。砂粒を多量に含み赤褐色に固く焼かれている。

21は炉の西より出土したもので胴下半部を欠いている。口縁部を肥厚させ、ワラビ手文や楕円文が交互に配されている。地文は無文で、胴部には太目の沈線によってU字文・S字状蛇行文が施される。



第50図　第Ⅶ地点第10号住居址覆土出土土器（1/3）

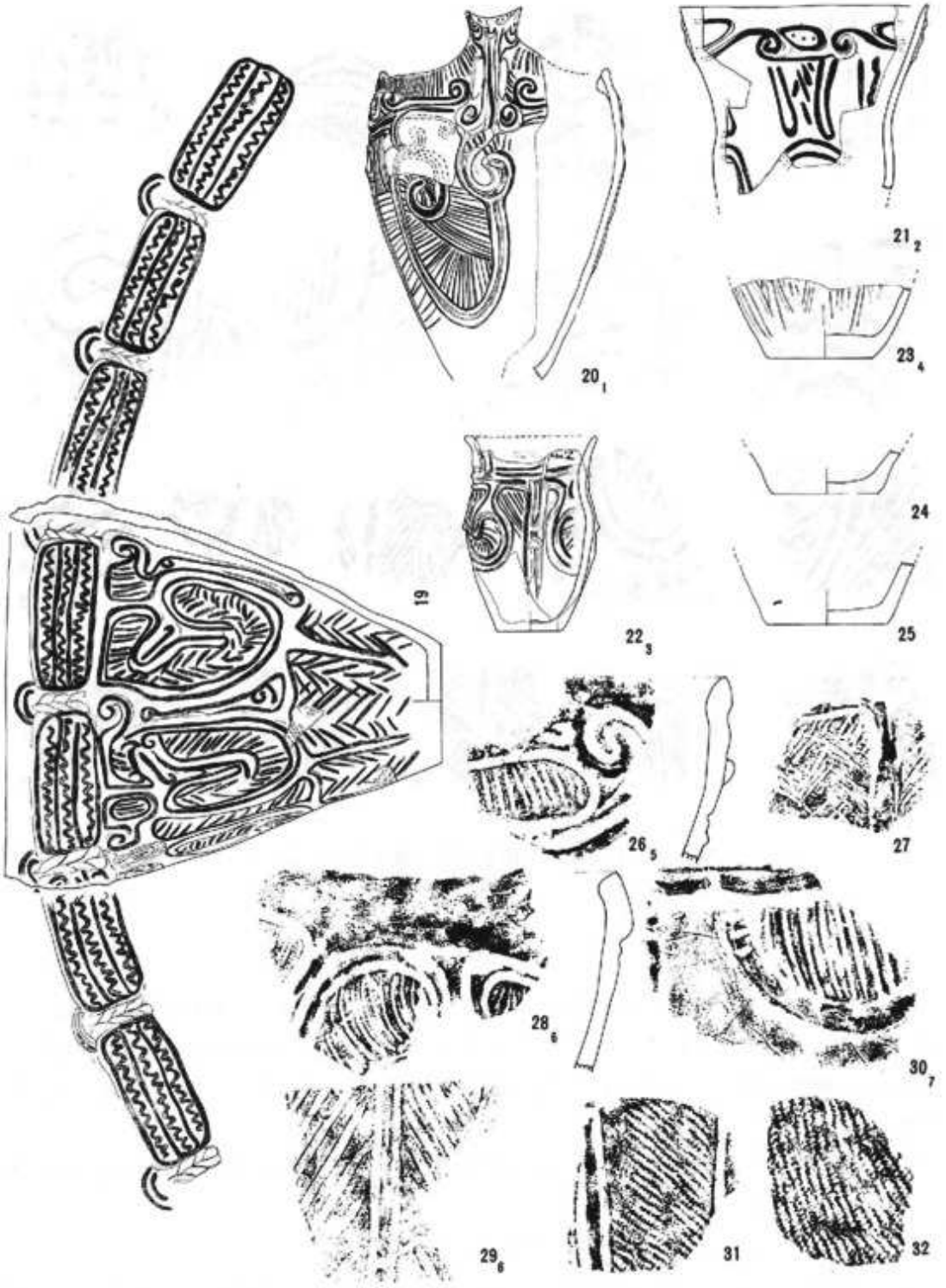
22は埋甕の近くから出土した小形深鉢形土器で、胴下半部を大半欠き口縁部は一部しかない。やや内そぎ状となる口唇部から２条と１条の粘土紐を交互に垂下させその間は削出しの波状文が施される。胴部は人形文とワラビ手文が交互に施されている。大粒な長石と雲母を多量に含み黄褐色に固く焼かれている。

23～25は深鉢形土器の底部で24・25は炉内部より出土している。26～32は深鉢形土器ないし甕形土器の破片である。

先行する土器の混在もみられるが総じて曽利Ⅱ式期に比定される。

石器は覆土から17点、床面から54点出土している。実測図中８は打製石斧、９は石錘、10は凹石である。

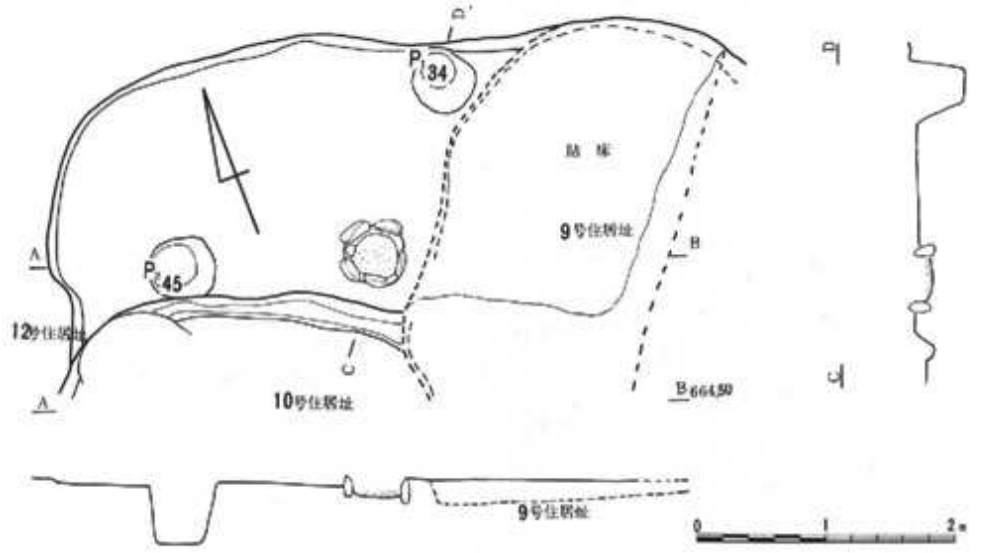
覆土出土の17点の内訳は打製石斧８点、石錘１点、敲打器４点、磨石１点、特殊磨石１点不定



第51図第Ⅶ地点第10住居址床面出土土器（19～25は1/6他は1/3、19は埋甕、小数字は出土位置）

形石器２点である。床面出土54点の内訳は打製石斧13点、石錐１点、敲打器９点、特殊敲打器２点、磨石１点、凹石２点、石棒の破片１点、石礫１点不定形石器24点である。外に覆土より剥片19片と黒曜石の石核１点、床面より剥片31片と硬砂岩の原石が１点出土している。

（気賀沢　進）



第52図　第Ⅶ地点第11号住居址実測図（S＝1/60）

10）　第11号住居址（第52・53図　図版15・16）

遺構（第52図　図版15・16）

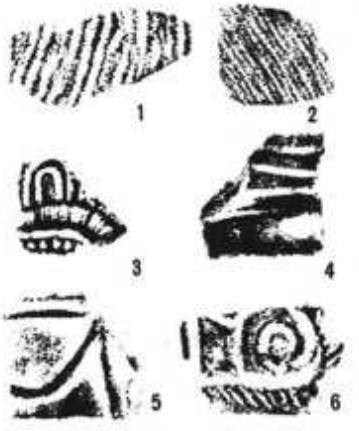
当住居址は西側の第12号住居址を切り、東側は第９号住居址に貼床している。南半部は第10号住居址によって切られ、住居址の北西部４分の１ほどが残るのみである。

貼床の状態からみると楕円形を呈していたと考えられるが定かでない。第12号住居址との床面差はわずかであり、北側の壁高も5cm前後を測るのみである。

床面はロームをタタキしめて固いが、貼床はロームを薄く敷いたもので、タタキもあまりみられず貼床の拡がりははっきりとはつかめなかった。

炉は５個の細長い自然石を縦長に用いて小形の円形石組炉をつくっている。外径55cm、内径30cm、深さ10cmである。

柱穴はP_1・P_2の２本が確認されている。



第53図　第Ⅶ地点第11号住居址床面出土土器（1/3）

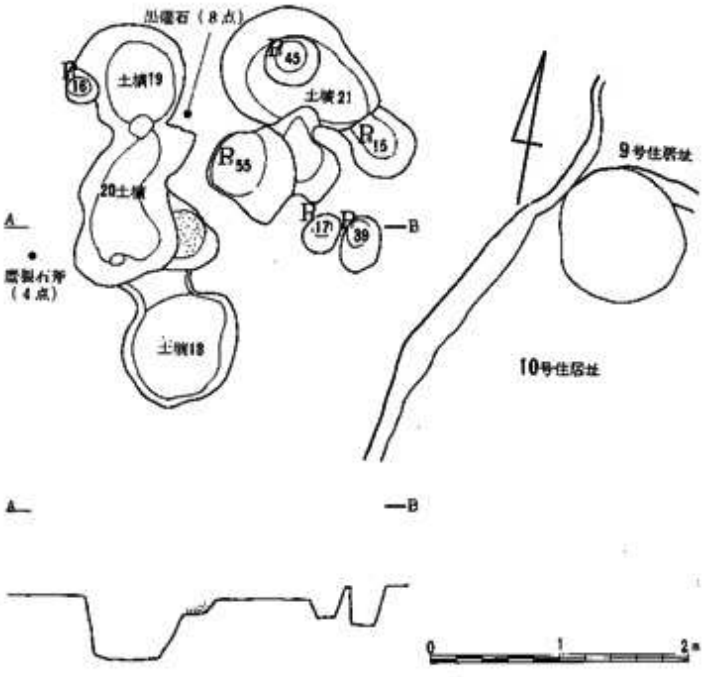
遺物（第53図）

出土遺物は極めて少なく、土器はすべて小破片である。

1～6は深鉢形土器で曽利Ⅰ式期に比定される。

石器は覆土より4点、床面より3点の計7点が出土したのみである。覆土4点の内訳は、磨製の峪刃石斧と乳棒状石斧、敲打器、凹石がそれぞれ1点ずつである。床面出土の内訳は打製石斧、特殊磨石、不定形石器1点ずつである。他に剥片が覆土より3点、床面より5点出土している。

（気賀沢　進）



第54図　第Ⅶ地点第12号住居址実測図（S＝1/60）

11）　第12号住居址（第54・55図　図版17）

遺構（第54図　図版17）

本住居址は第9・10号住居址の西に位置している。東側は第10号住居址によって切られ、西・南・北の限界は確認できない。このため、プラン・主軸ともに不明である。床面はロームを固くたたきしめているものの、平担とは言えない。

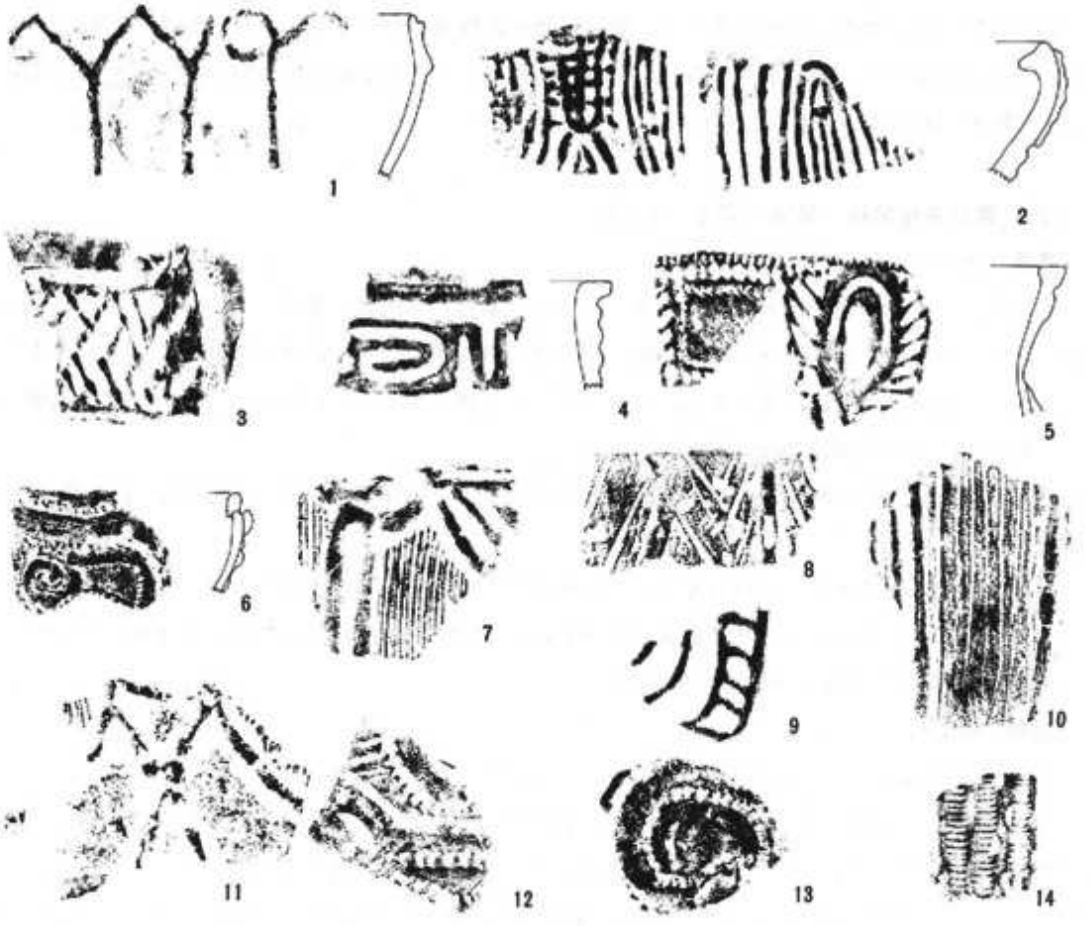
柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4・P_5・P_6の6本が検出されたが、いずれが主柱穴か、支柱穴か判然としない。深さはP_1が39cm、P_2・P_4・P_6が15cmである。これに対しP_3・P_5はそれぞれ55cm・45cm

と深く、主柱穴ではないかと考えられるが、間隔が一致しない。

炉も判然としないが、P_3の西側に直径40cmの焼土があり、これが炉ではないかと考えられる。

本住居址内には土壙15・18・20・21があり、土壙20は前述の焼土を切っている。

また、20号土壙の西側から磨製石斧が、土壙19の東側からは黒曜石片がそれぞれまとまって検出された。磨製石斧は床面より一段高くなったところに4本並べられていた。このうち大形のもの2本は刃部を東に向け、正面を上に寝かせてある。小形のもの2本は刃部を西に向け側面を上に立てられた状態である。黒曜石片は8点がまとまって出土した。このうち1点は石匙の加工途中のものと考えられる。また付近からは敲打器、凹石、緑色岩の剝片も出土している。これらは住居址内に貯蔵しておいたものと考えられ、生活空間を考える上で重要な意味を持つと思われる。



第55図　第Ⅶ地点第12号住居址床面出土土器（1/3）

遺物（第55図）

本住居址からは土器片が断片的に出土し、復原可能なものは１点もなかった。

１・２は深鉢形土器の口縁部で、いずれも内屈している。１は浮隆線文をＹ字状に連続させている。２は細隆線をソーメン状に施している。３も細隆線文をＸ字状に重ねている。

4～6も口縁部である。５・６は隆帯をワラビ手状に施文しさらに刻み目を入れている。

7～14は深鉢形土器の胴部である。８は隆帯を懸垂させ、沈線で綾杉状に施文している。10も２本１組の隆帯を懸垂させ、沈線を懸垂させている。11は細隆線をＸ字状に交差させ、その交差点は結接状になっている。14は半割竹管文を連続して懸垂させている。

８のやや後出するものをのぞけば、曽利Ｉ式期に比定できる。

石器は、すでに述べたように特徴ある出土状態を示している。土器に比べて石器は多くみられ、床面から45点が出土している。

打製石斧15点、磨製の定角石斧２点、蛤刃石斧・乳棒状石斧各１点、小形石匙１点、敲打器４点、特殊敲打器２点、凹石２点、石磯・石錐・掻器各１点、不定形石器14点である。他に剥片46片と黒曜石の石核１点が出土している。　（酒井　健次）

12）　第13号住居址（第56・57図　図版18）

遺構（第56図　図版18）

本住居址は第14号住居址の東側に位置している。第14号住居址と重複しているが、いずれも床面の高さが同じである、さらに東・北側は開田時の破壊をうけその限界は確認することができない。従ってそのプランは不明である。床面はロームを固くたたきしめている。また、壁は南側のみが確認できるが現高は10cmである。

柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4・P_5の５本が確認された。このうちP_2・P_3・P_5は主柱穴、P_1・P_4は支柱穴と考えられる。

炉は中央部に位置する。自然石を用いた石組炉であるが西側の石が残存しているのみで、大半は亡失していた。さらに炉の中央部には直径40cm、厚さ10cmにわたって焼土が堆積していた。

伏甕は南側のP_2・P_3の中間から検出された。

遺物（第57図）

本住居址から出土した土器は極めて少なく、伏甕を除いて復原は不可能であった。

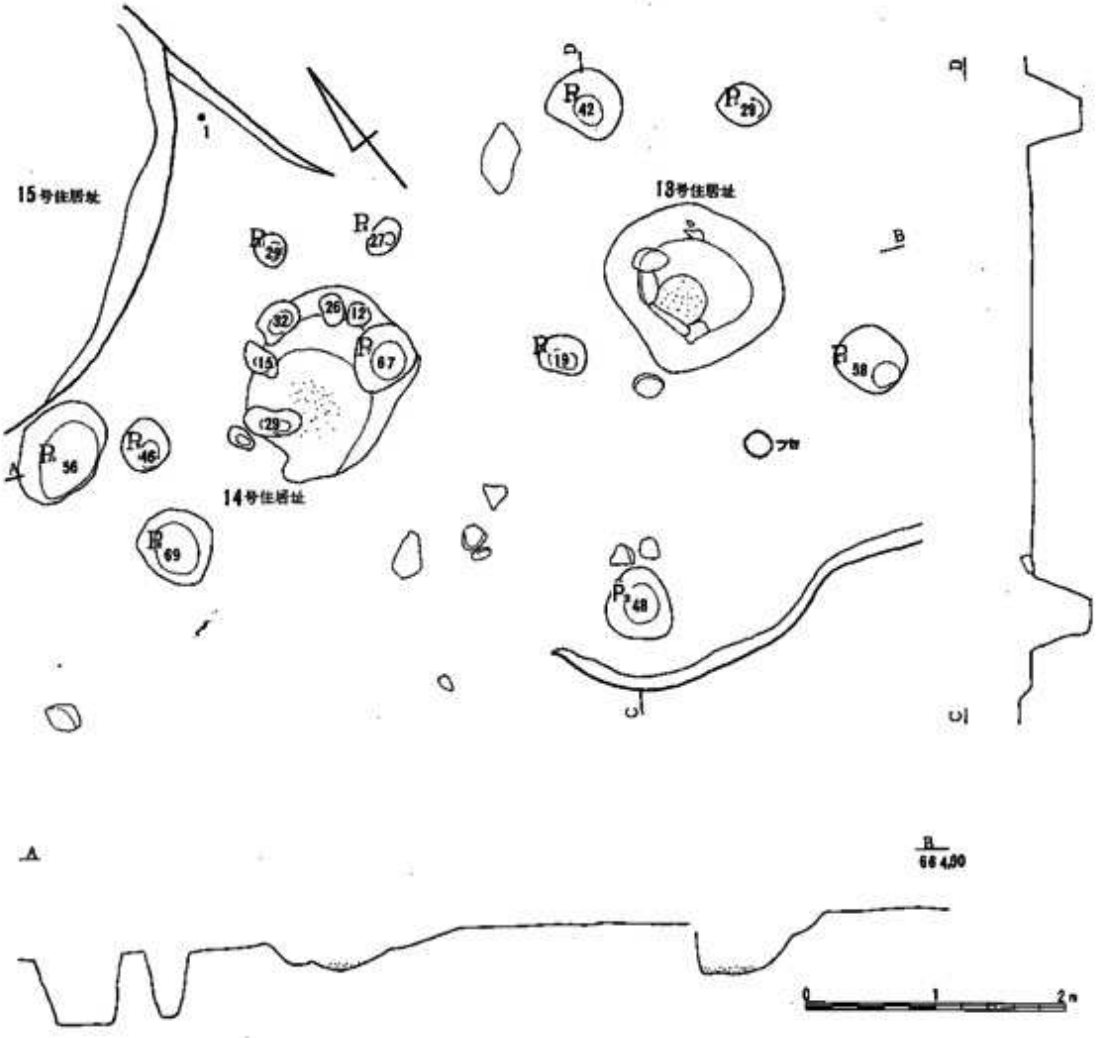
１は伏甕で、胴部から底部を欠いている。器形はゆるやかに内湾している。口唇部に隆帯を１条横走させ、その下部には２条の連続刺突文によるワラビ手文が施される。沈線による渦巻文を配したブリッチ状把手が１個つけられる。頸部下は２条による粘土紐の渦巻文・ワラビ手文によって区画され、内部は沈線のワラビ手や縦走する沈線で充填される。胎土には砂粒を多く含み、灰褐色に焼かれている。焼成は不良で表面はすれて文様が判然としない。

2～4は深鉢形土器の口縁部である。２は隆帯で渦巻文を施している。４は隆帯で器面を分画し、さらに刻み目を入れている。

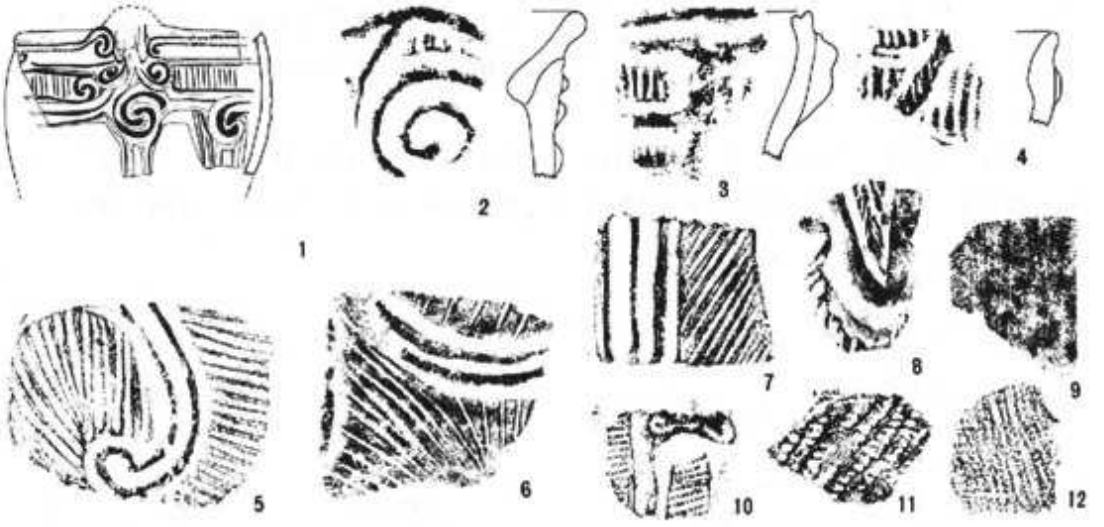
5～12はいずれも胴部である。5は2本1組の隆帯をワラビ手状に施文し、沈線を方射状に、あるいは平行に施文している。6・7も2本あるいは3本1組の隆帯文を施し沈線が施文されている。9は2本1組の細沈線を懸垂させている。12は地文に縄文を施し沈線を懸垂させている。

総じて曽利Ⅲ式に比例される。

石器は5点出土している。すべて床面出土で、打製石斧・敲打器・特殊磨石・抉入掻器・不定形石器各1点である。他に剝片1片と硬砂石岩の原石1点が出土している。（酒井　健次）



第56図　第Ⅶ地点第13号・14号住居址実測図（S＝1/60）



第57図　第Ⅶ地点第13号住居址床面出土土器（1は1/6他は1/3、1は伏甕）

13）　第14号住居址（第56・58・59図　図版18・40）

遺構（第56図　図版18）

本住居址は東側で第13号住居址と重複し、北側は第15号住居址によって切られている。さらに西側・南側の限界は全く確認できなかった。従ってプランは不明である。床面は固くたたきしめており、炉に向かってゆるやかに傾斜している。

柱穴はP_6・P_7・P_8・P_9・P_{10}・P_{11}の6本が検出された。P_7・P_8・P_{10}はその深さから主柱穴、P_6・P_9・P_{11}は支柱穴と考えられる。

炉址には石組炉が使用されていたと思われるが、すべて石は抜き取られている。

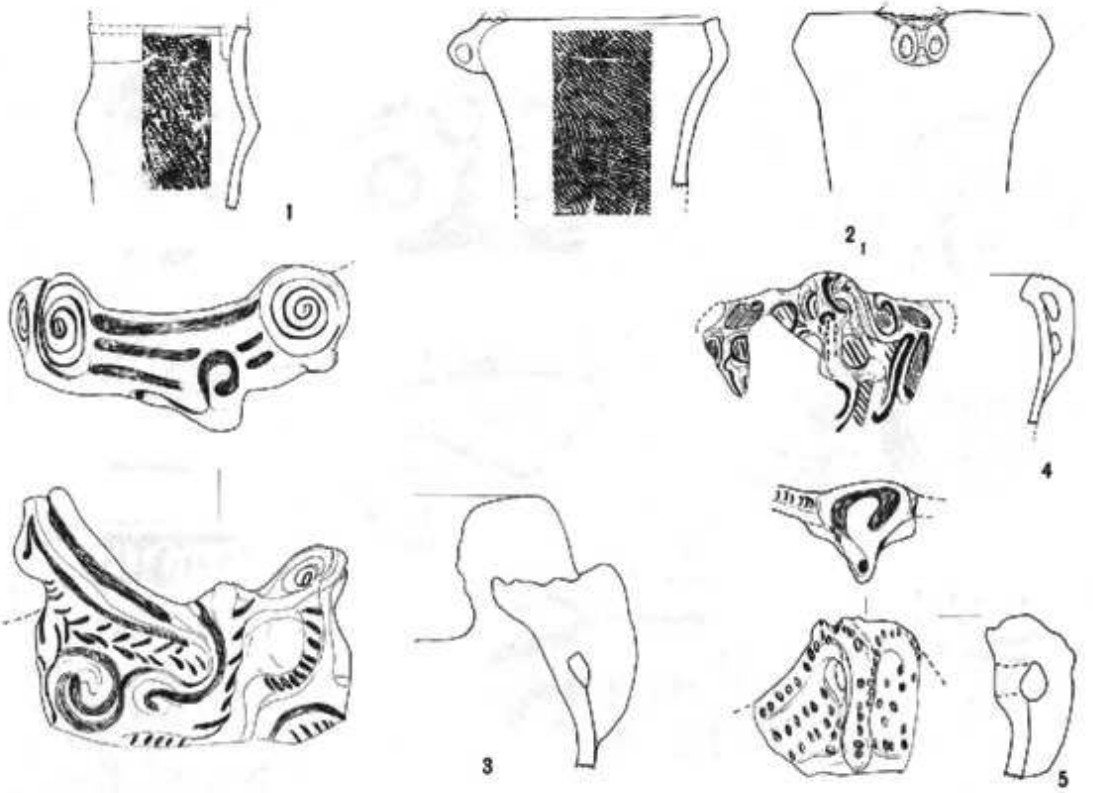
北西部第15号住居址に近い所から床面からわずかに浮いて深鉢形土器（第58図―2）が単独出土している。

遺物（第58・59図　図版40）

1は小形の壺で、口縁部・底部を欠いている。全体に荒目の縄文を施している。色調は暗褐色を呈している。胎土は長石の細粒を含み、焼成は固く良好である。

2は深鉢形の土器で胴下半部を欠く。口縁部はくの字に外反し、みみづく状把手が1個装飾され、上部は欠けている、器面全体に荒目の縄文が不規則に施されている。雲母・細かい砂粒を含み黄褐色に固く焼かれている。口縁部外面にはすすの付着がみられる。

3～5は装飾された口縁部破片である。3は沈線による渦巻文、4は方形ないし楕円文を付している。5は先端の鋭った工具の刺突文である。



第58図　第Ⅶ地点第14号住居址出土土器

（1・2は1/6、他は1/3、1は覆土他は床面出土、小数字は出土位置）

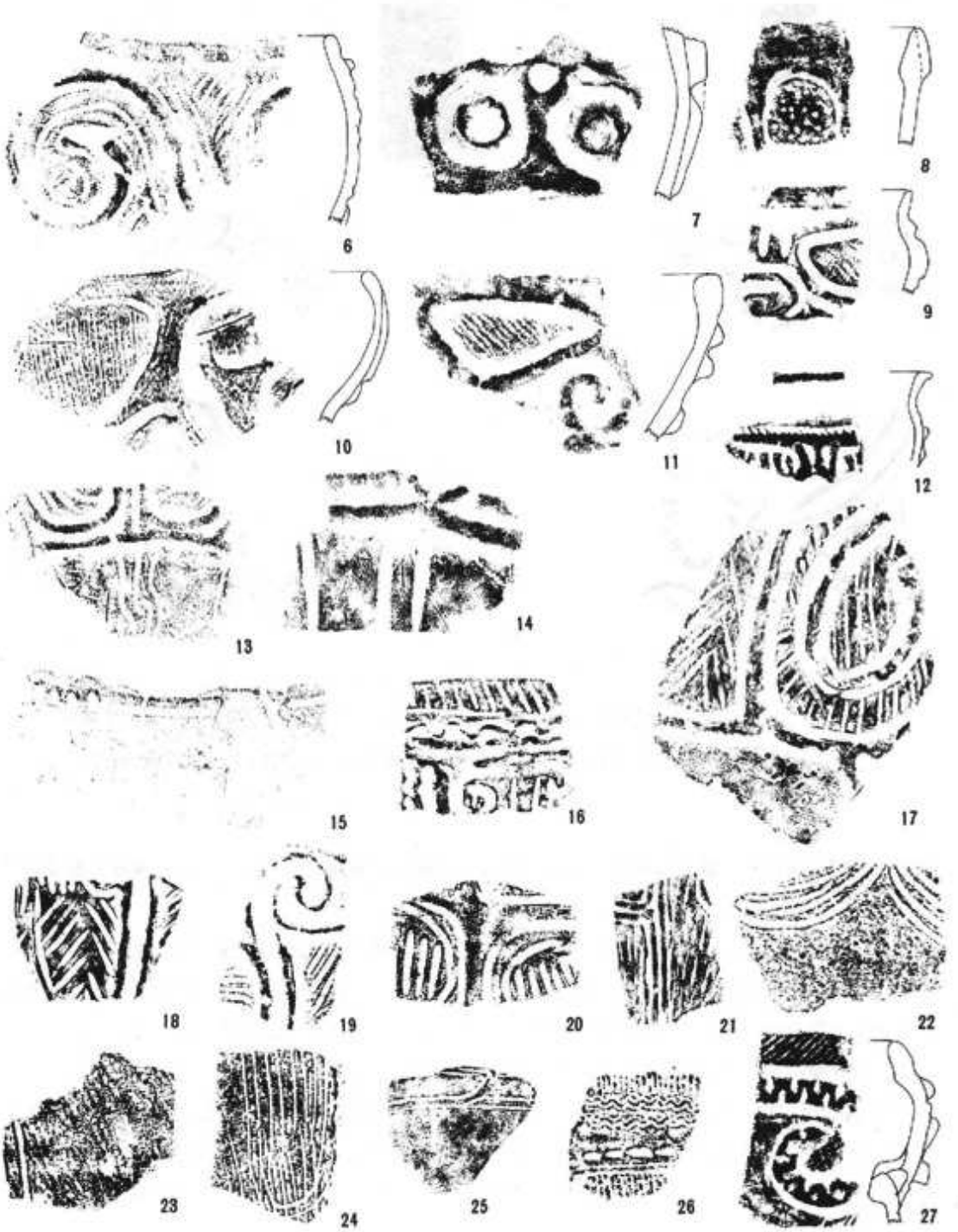
6～12･27は深鉢形土器の口縁部である。6は太い隆帯で渦巻をつくり、沈線を斜状に施文している。7は隆帯による円を施している。

13～26は頸部あるいは胴部である。17・18は隆帯を懸垂させ綾杉文を施している。

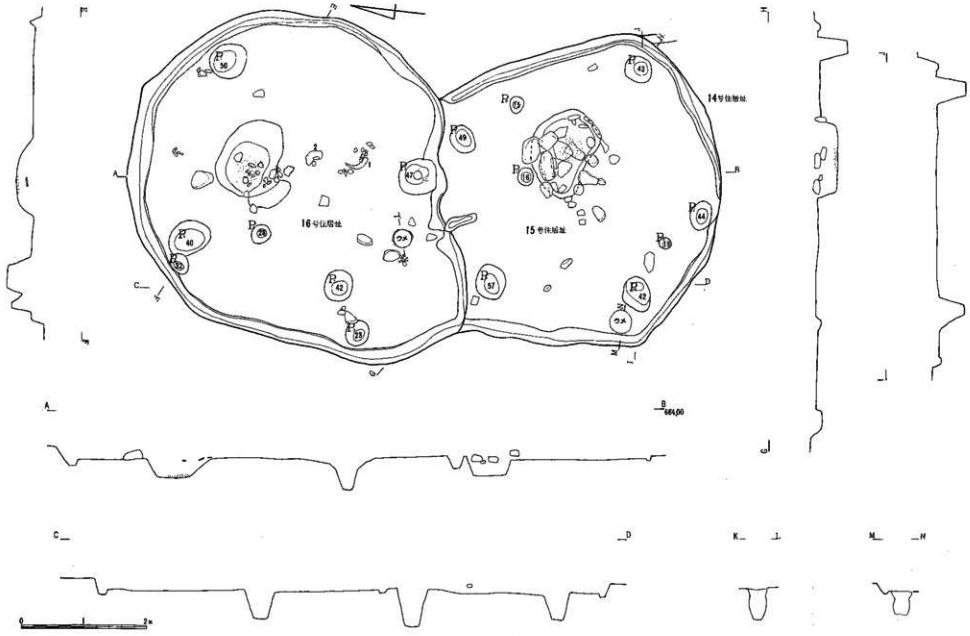
1・2・26・27を除けば、曽利Ⅱ式からⅢ式期に比定されるものである。第13号住居址との先後関係は土器でみる限り、本住居址の方が古いものがみられ先行すると考えられる。

1・2は藤内期のものであり、明らかに住居址と時期を異にしている。

石器はすべて床面出土で25点出土している。内訳は、打製石斧9点、磨製の定角石斧と蛤刃石斧各1点、敲打器2点、凹石4点、石皿1点、石棒破片1点、掻器1点、不定形石器5点である。他に剥片34片と黒曜石の石核3点が出土している。　（酒井　健次）



第59図　第Ⅶ地点第14号住居址床面出土土器（1/3）



第60図　第VII地点第15号・16号住居址実測図（S＝1/60）

14） **第15号住居址**（第60・61・62・63図　図版19・41）

遺構（第60図　図版19）

本住居址は隣接する第16号住居址とともに、集落の北側を構成している。南東部にある第14号住址・南側にある第17号住居址を切っている。北の第16号住居址によって切られ、その床面差は7cmほどである、第14号住居址との床面差は5cm、第17号住居址との差は10cmでる。

北側がさだかでないため、はっきりしないが、プランは５角形ないし６角形が考えられる。柱穴の在り方からすると南側に張り出た５角形の可能性が強い。辺の長さは南側の２辺は2.7m、他は3.1mほどである。

炉および埋甕の位置から推測するに入口は南西と考えられ、これに基づく主軸方向は、N－32°－Eである。

壁はゆるやかで、東側にて壁高30cmを測る。　ロームをタタキしめた床面は、固く堅致でかなりの凹凸がみられる、深さ5cmほどの浅い周溝がほぼ一周する。

柱穴はP_1・P_2・P_4・P_5・P_7の５本と考えられそれぞれ各頂点に位置している。

P_4の西側壁ぎわに底部を欠いた正位の埋甕（第62図-14）が確認された。P_4をはさんで床面上に平盤石皿がすえられていた。

炉は中央やや東寄りに位置し、長方形の石組炉であったと思われるが、炉石はすべて抜きとられている。内部には明らかに炉石と思われる割石４個と人頭大ぐらいの自然石がなだれ込んだような状態で発見されている。炉石の転用のため必要なもののみ持ち去ったと考えられる。掘り形は、外形1.3×1.0m、内形1.1×0.7m、深さは30cmで底はほぼ平らで、焼土が5cmほど堆積している。

炉の南側に床面より浮いて自然石がバラバラな状態で発見されている。

遺物（第61・62・63図　図版41）

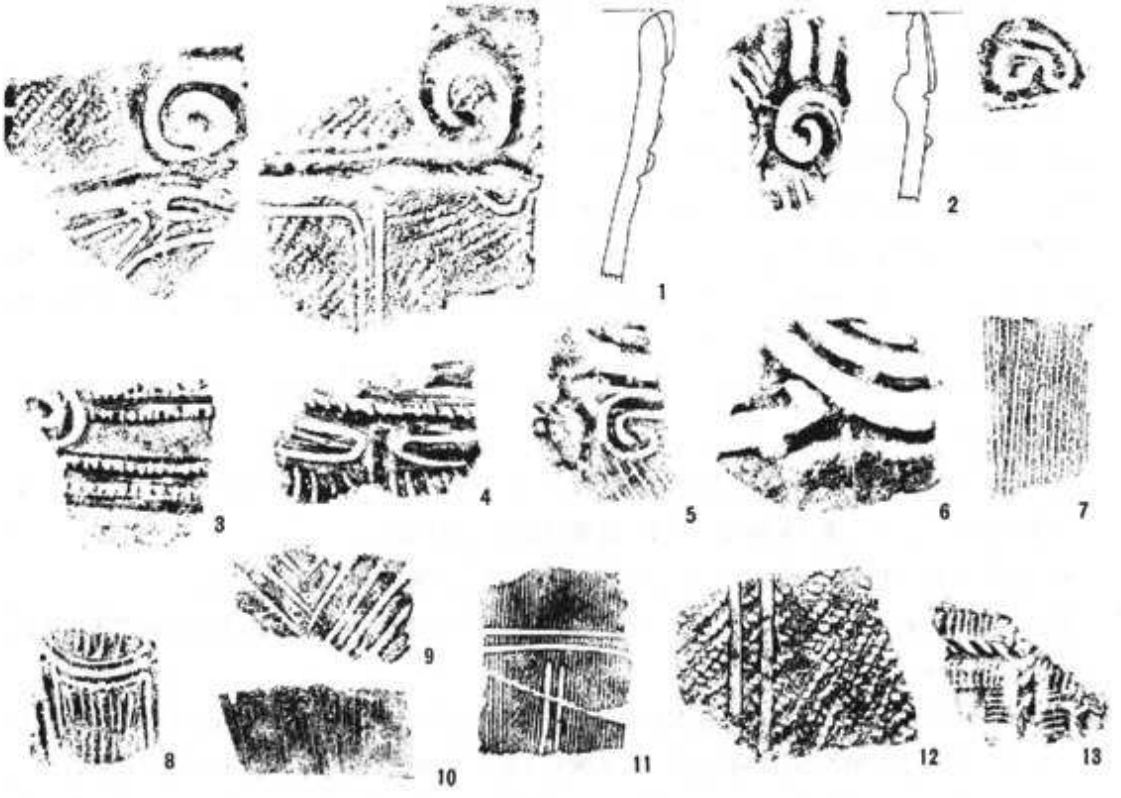
土器は炉内及び周辺からかなりの量出土しているが、埋甕を除けば復原できるものはない。

第61図は覆土出土のものである。１は大形の口縁部破片で全面に縄文を施し、口唇部を肥厚させ、頸部から伸びた粘土紐がワラビ手状文を表出する。胴部は沈線の懸垂文やワラビ手文が施される。

第62・63図は床面出土のものである。14は底部を欠く正位の埋甕で、キャリパー形の深鉢形土器である。口唇内外を肥厚させ、口縁部には隆帯と沈線によって11個の楕円文を配し、内部は太い沈線が施される。楕円文の間には逆S字文が施されている。頸部以下は全面縄文が施される。砂粒をやや含み下部は明褐色、口縁に近くなるほど暗褐色に焼かれている。内面には横みがき調整がみられ、口縁部にはすすが付着している。

15は深鉢形土器の胴下半部で２条１組の隆帯懸垂文が８対施され、内部は浅い沈線が斜走する。砂粒多く含み、黄褐色を呈している。外面はザラザらしている。

16は土偶の腰部である。臀部が誇張され強く張り出し沈線によって、ハート面が表出されている。側面には、やはり沈線によってハート文に似せている。後面は脚部にかけ綾杉文が施される。



第61図　第Ⅷ地点第15号住居址覆土出土土器（1/3）

砂粒・雲母を多目に含んで赤褐色に焼かれている。当期に特徴的な土偶である。

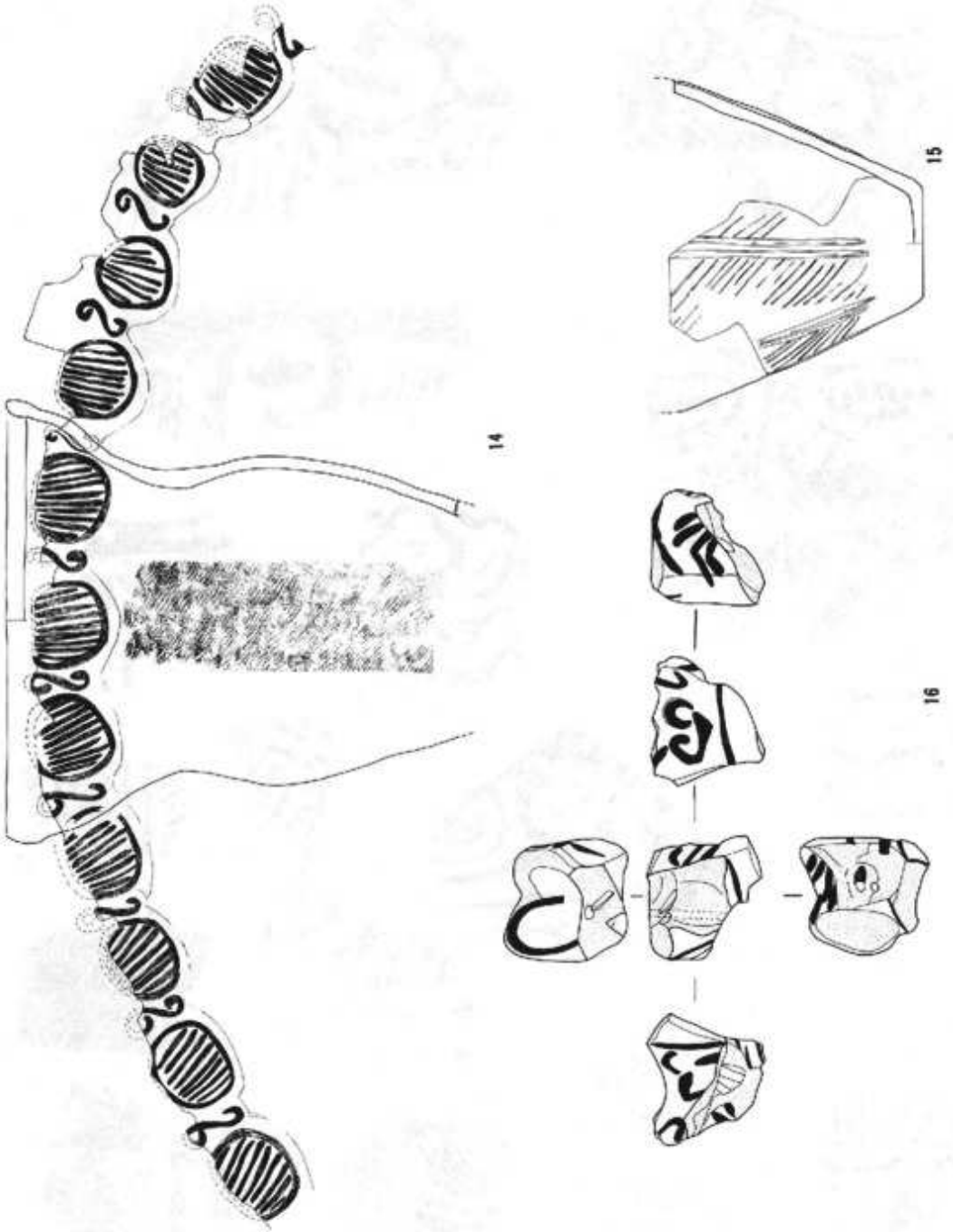
17～24は深鉢形土器の口縁部である。17は波状口縁で頂点に円形の孔をうがち、口唇下に沈線のワラビ手文をめぐらし、隆帯と沈線による楕円文を配し全面に縄文を付けている。胴部は縄文地に沈線の組合せである。1･25と同系列のものである。18はブリッチ状の把手を持つものである。19は、内屈する口縁に楕円文を配し、胴部は沈線による懸垂文や綾杉文が施される。

1・30・34といったやや先行するものもみられるが、総じて曽利Ⅱ式期に比定される。

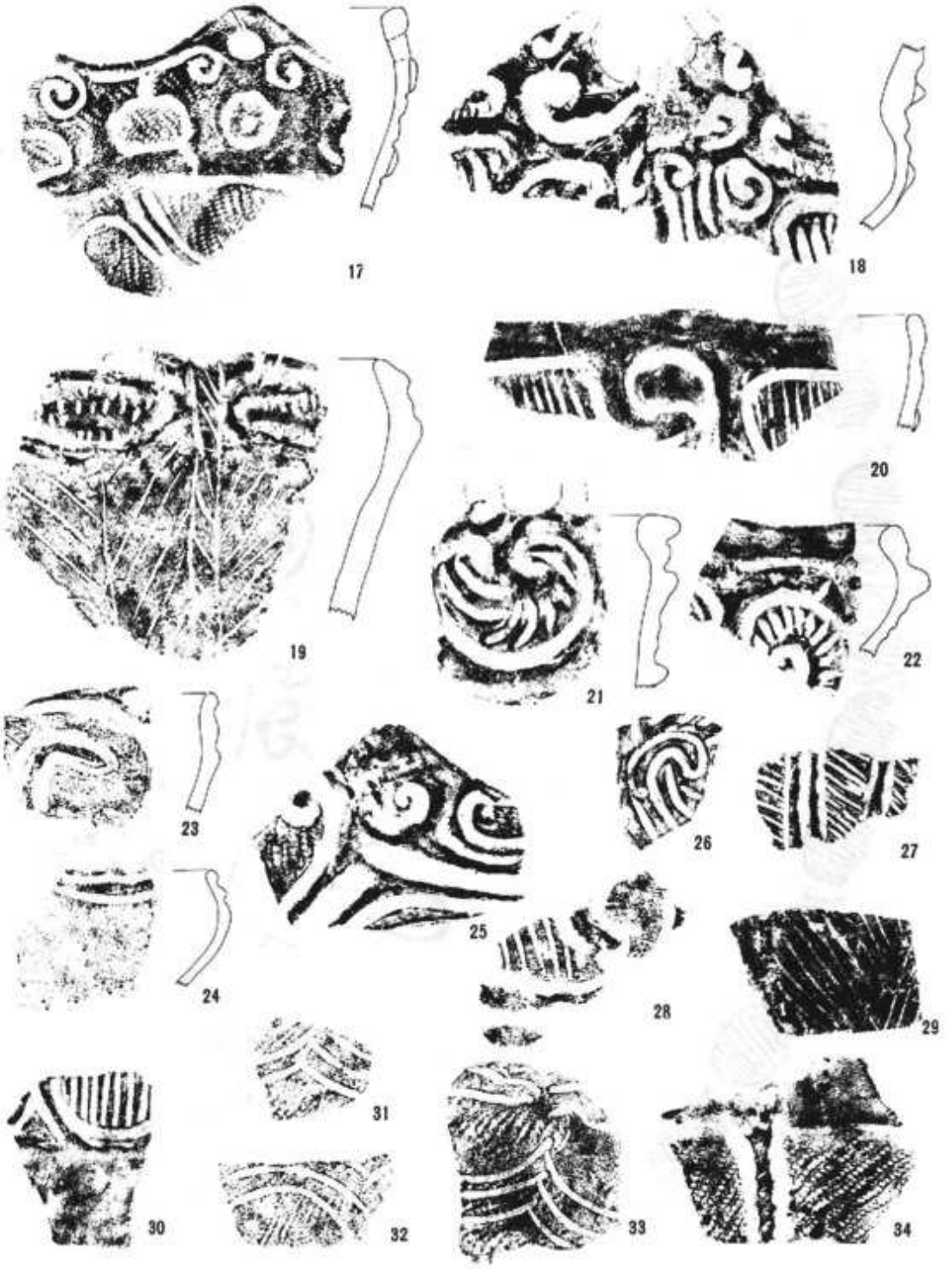
1・12・14・17・25は加曽利E式の影響を受けたものである。

石器は土器に比べて少なく、覆土中より12点、床面より19点の計31点が出土している。他に剥片が覆土より12片・床面より30点出土している。

覆土より出土した石器の内訳は、打製石斧6点、磨製の定角石斧と蛤刃石斧が各1点、大形石匙1点、石錘1点、敲打器2点で、床面出土の内訳は打製石斧4点、磨製の定角石斧・乳棒状石斧各1点、大形石匙1点、敲打器4点、石皿1点、不定形石器7点である　　（気賀沢　進）



第62図　第Ⅶ地点第15号住居址床面出土土器及び土製品（14・15は1/3、14は埋甕）



第63図　第Ⅶ地点第15号住居址床面出土土器（1/3）

15） 第16号住居址（第60・64・65図　図版20・41）

遺構（第60図　図版20）

本住居址は第15号住居址の北側を切ってつくられている。第１号住居址とともに一番北側にあり集落の北限である。

プランは北西部が張り出した不整円形で、径は5.2mを測る、入口は南西部で主軸方向N－30°－Eである。この部分が張り出しているのは、入口の何らかの施設があったとも考えられる。

壁は全体にゆるやかで北側と西側では15cmほど東側はやや低くなり10cm前後である。

ロームをタタキしめた床は固く炉に向かってわずかに低くなっている。深さ10cm前後のやや広い周溝が一周する。

炉は中央北東寄りにあり、炉石はすべて抜きとられているが、長方形の石組炉であったと思われる。掘形は外形1.3×0.9m、内形0.7×0.6mで内側は方形に近くなっている。深さ30cmで底はほぼ平らで焼土が薄くみられた。炉内より南側からなだれ込むような状態で土器が出土している。

主柱穴は、P_1・P_2・P_5・P_7の４本と考えられる。西壁ぎわに柱穴に呼応してP_3・P_6があり、支柱穴であろうか。

P_1とP_2の中間やや壁よりに正位の埋甕（第65図-20）がある。やや床面より浮いているが、周囲に自然石が埋甕を囲んで出土している。

土器は炉内と炉の南側に集中して出土している。

遺物（第64・65図　図版41）

第64図は覆土、第65図は床面出土のものである。１は小形深鉢形土器で、強く内屈する口縁に渦巻文を配した環状の把手をつけその間には２条の連続刺突文をめぐらし、その下部には縄文が縦走する。

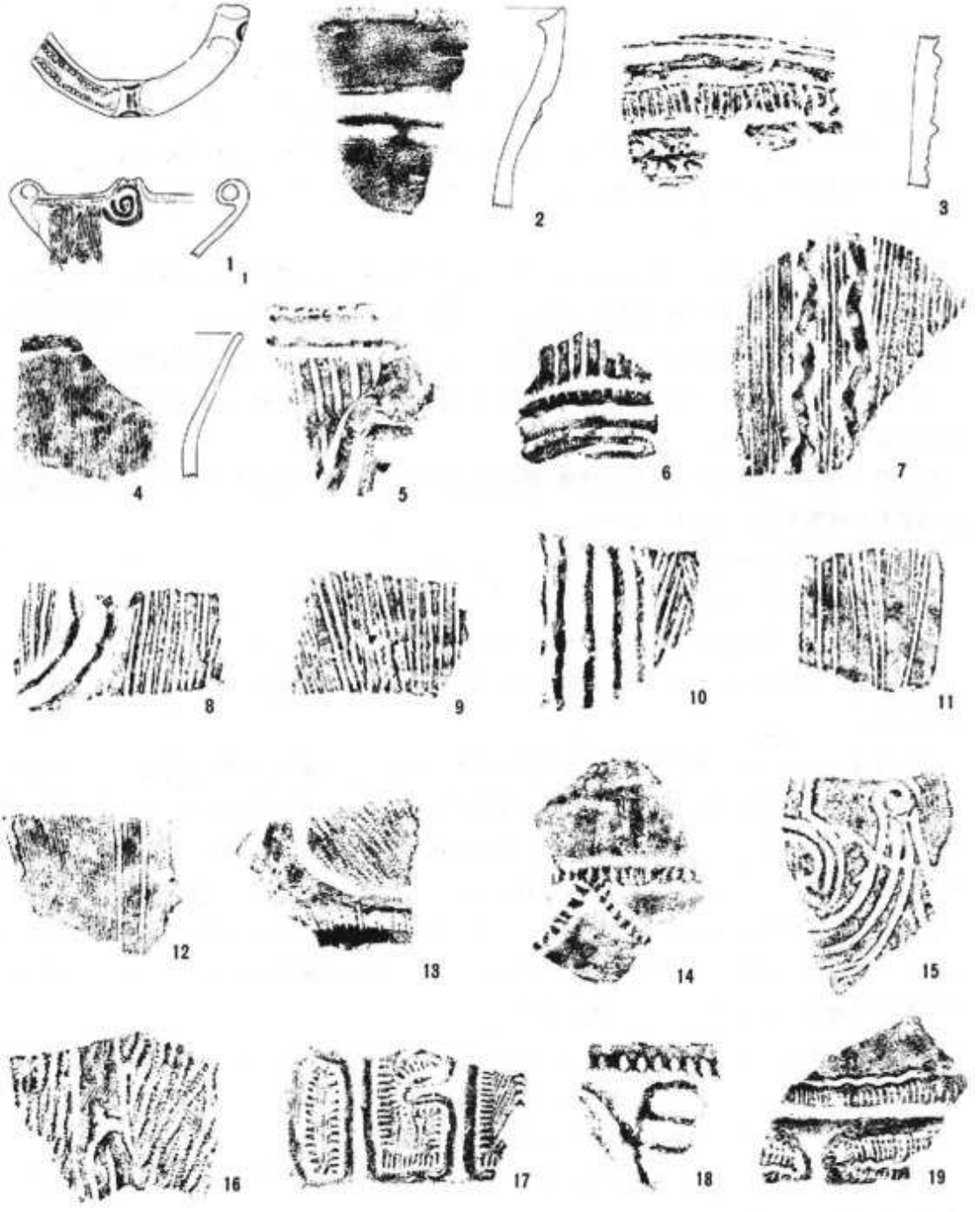
20は埋甕で、口唇部はやや外反するが大部分を欠いている。頸部上に幅広な隆帯によってせり上がり状の突起を６個配している。胴部は櫛歯状工具による細沈線を全面に施し、３条１組のワラビ手沈線文を連結させて３分画しその間には蛇行沈線文が垂下する。砂粒を多めに含んで白黄褐色に焼かれている。内面には炭化物の付着がみられる。

21は小形深鉢形土器で２条の隆帯が垂下し、間は太い沈線が縦走する。22は深鉢形土器の胴上部で強く内屈する口縁には４個の突起がつけられ、その間には沈線や刺突文がみられる、口縁部は突起に付随する隆帯によって８分画されている。

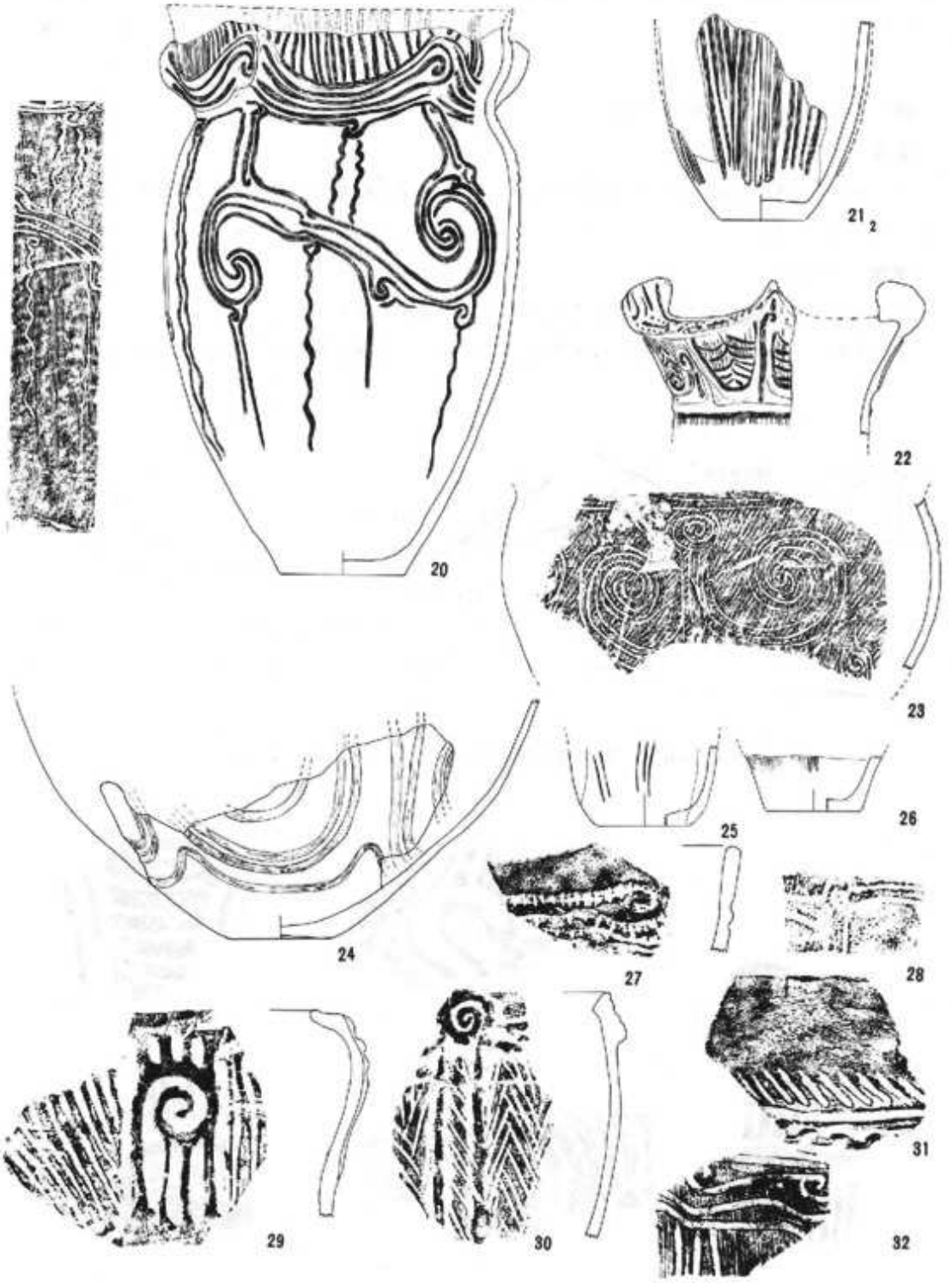
23は深鉢形土器の胴下半部で、黒褐色にみがかれた器面に浅い幅広な沈線によってU字文等を表出している。22～24は炉内より出土したものである。

床面出土の土器は総じて曽利Ⅱ式期に比定される。

石器は床面より70点、覆土より４点出土している。覆土４点の内訳は石礫・石錐・彫器・円形掻器各１点ずつである。



第64図　第Ⅶ地点第16号住居址覆土出土土器（1は1/6、他は1/3）



第65図　第VII地点第16号住居址床面出土土器（20～26は1/6、他は1/3、20は埋甕）

床面出土の内訳は、打製石斧27点、磨製乳棒状石斧５点、石錘３点、敲打器10点、特殊敲打器６点、凹石３点、石鏃・削器各１点、円形掻器２点、不定形石器12点である。外に剥片が91片出土している。

（気賀沢　進）

16）　第17号住居址（第66・67図）

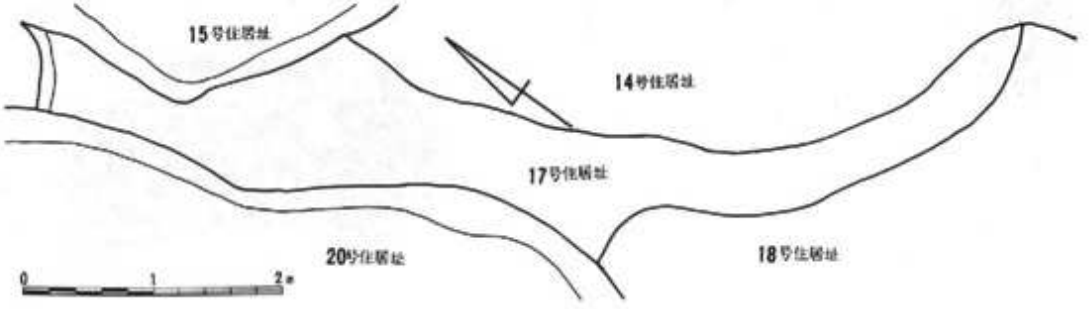
遺構（第66図）

本住居址は第14・15・18・20号住居址によって、完全に破壊されており、床面の一部が検出されただけであった。

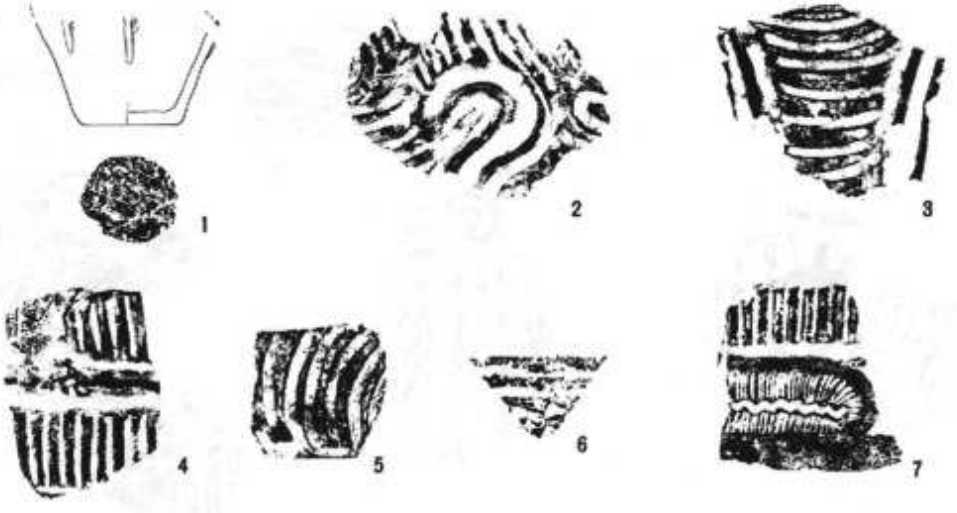
遺物（第67図）

前述のとおり床面がわずかに検出されたのみで、遺物も極めて少ない。

１は深形型土器の底部で、底には木葉痕がみられる。隆帯を懸垂させていたことがわずかに確



第66図　第Ⅶ地点第17号住居址実測図（S＝1/60）



第67図　第Ⅶ地点第17号住居址床面出土土器（1は1/6他は1/3）

認される。色調は黄褐色を呈し、内側には炭側物が付着している。焼成は良好である。

2～7は深鉢形上器の胴部である。

3･5は沈線によりウロコ状に施文されている。7は隆帯文で区画された中を沈線で横に蛇行させている。さらにその周囲に沈線をタテに施している。

総じて曽利II式に比例される。

石器は石錘と大形石匙が1点ずつ床面より出土しただけである。　　（酒井　健次）

17）第18号住居址（第68・69図　図版21）

遺構（第68図　図版21）

本住居址は第14号住居址の南にあり住居址群の中央に位置している。西側は第19号住居址・第22号住居址と重複関係にある。第19号住の床面がやや低くまた周溝の状態からすると第19号住居址によって切られていると考えられる。第22号住居址とは北東部にて同一レベルでつながっており、切り合い関係ははっきりしない同一住居址の可能性もあるが、プランから一応第22号住居址を別の住居址としたものである。

一部しか残存していないためプラン・規模などはまったく不明である。

本住居址に伴う柱穴はP_4のみである。南側に上部に石のある土壙34が確認されている。

東側での壁高は50cmほどで深く掘り込んでいる。ロームの床面は非常に固くタタキしめられている。

深さ5cmほどの周溝がみられ、北東部は第22号住居址へとつながっている。南東部で第19号住居址の周溝が切った格好となっている。

本住居址の炉と考えられる痕跡は確認されていない

遺物（第69図）

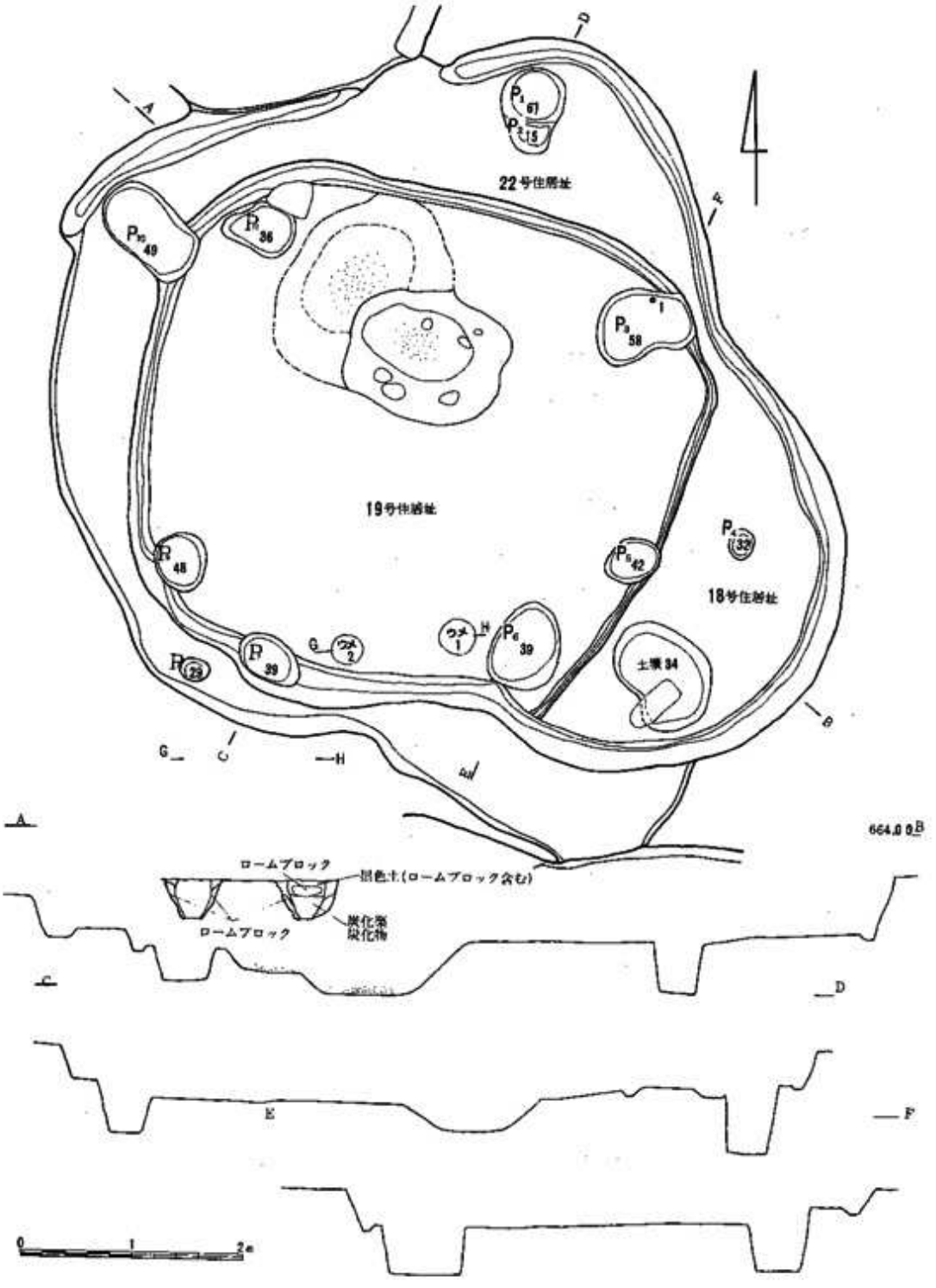
出土土器は非常に少ない。すべて深鉢形土器の小破片で、復原できるものはない。

隆帯による渦巻文・ワラビ手文と綾杉文等によって構成される一群と縄文を地文とする一群とに大別できる。

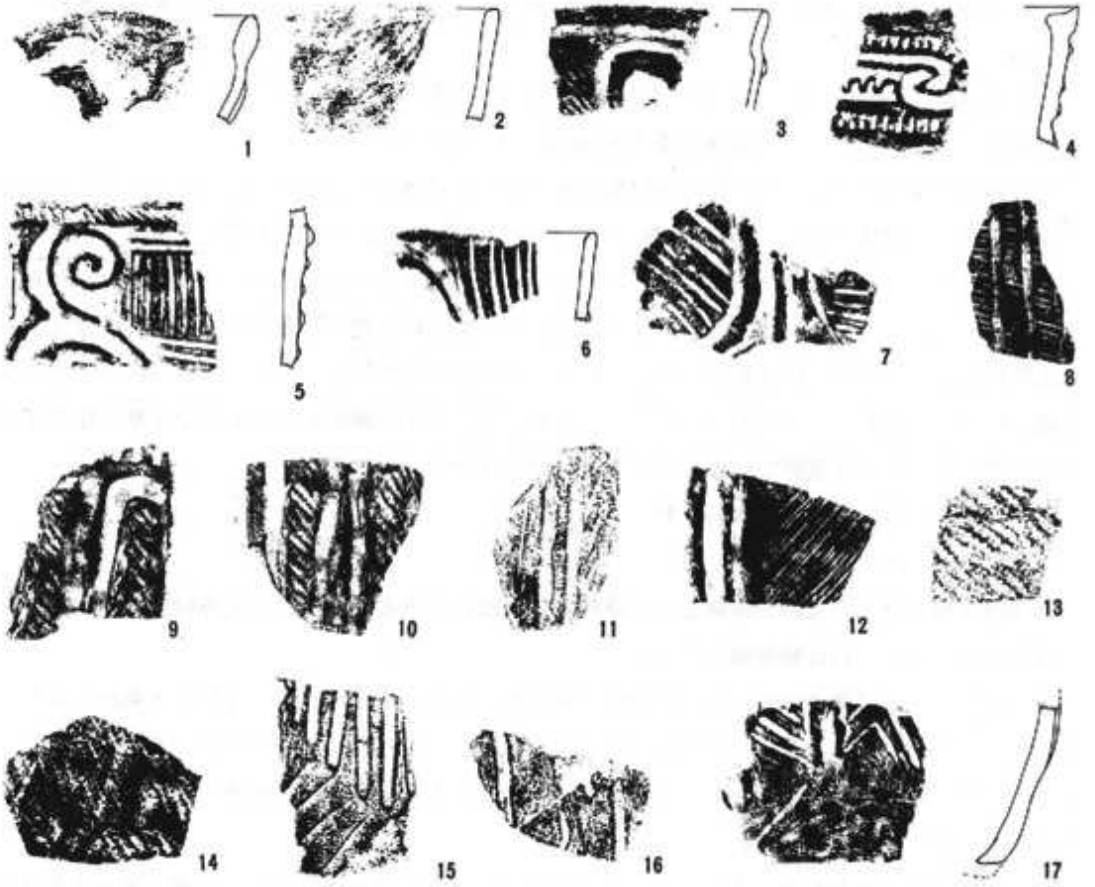
総じて曽利II～III式期に比定される。

石器は遺構の残存状態のわりには多く出土している。覆土より10点、床面より21点出土している。外に覆土より剝片が10片、床面より剝片32片、硬砂岩の原石1点、黒耀石の石核2点が検出されている。

覆土より出土した10点の内訳は、打製石斧6点、大形石匙1点、敲打器2点、特殊敲打器1点で、床面出土の内訳は打製石斧11点、石錘1点、敲打器3点、特殊敲打器2点、凹石1点、不定形石器3点である。　　（気賀沢　進）



第68図　第18号・19号・22号住居址実測図（S=1/60）



第69図　第Ⅶ地点第18号住居址床面出土土器（1/3）

18）　第19号住居址（第68・70・71・72図　図版21・41・42）

遺構（第68図　図版21）

当住居址は第18号住居址と第22号住居址とを切ってつくっている。先に述べたように第18号住居址とははっきりとした床面差はみられない。南側にて第18号住居址の周溝を切って本住居址の周溝がめぐっている。

プランは南側がややせばまるが隅丸方形で大きさ4.9×4.8mである。主軸方向はN－16°－Eである。

第22号住居址との床面差は一部はっきりしない所もあるが全体に15cmほどである。

ロームを固くタタキしめた床は炉に向かって傾斜している。

炉は中央北壁寄りにある。西側にはロームブロックを含んでタタキしめた第22号住居址の炉がありそれをきっている。炉石は抜きとられているが方形石組炉である。掘形は外形1.4×1.2m、内形1.0×0.6mである。底は平らで第22号住居址との比高は20cmである。底に薄く焼土の堆積がみられる。

主柱穴はP_3、P_6、P_9、P_{11}の4本と考えられ、P_5、P_7は第22号住居址のものであろう。両ピットには貼床はみられなかった。周溝は深さ8cmほどで一周している。

P_6の西側（第71図-15）とP_6・P_9の中間壁ぎわ（16）に埋甕が2個発見されている。ともに正位の埋甕である。埋甕2（16）は入口の真上に当たる、埋甕1（15）は胴下半部を底部を上にしてはりつけ、その上に胴上半部を正位に埋め込んでいる。口縁部より5cm位下がった所に厚さ10cmほどのロームブロックがふた状になり、その下部に炭化栗と炭化物が貯蔵されていた。栗は完全に炭化されており、完形の粒は数粒しかみられなかった。炭化現象がどういう状態で起きたかは別問題として、貯蔵例の一つの例として考えられる。炭化栗の貯蔵出土例は市内では原垣外遺跡が知られている。原垣外遺跡では屋外のピットの中から出土している。

遺物（第70・71・72図　図版41・42）

遺物は多量に出土している。

第70図は覆土出土のもので深鉢ないし甕形土器の破片である。沈線による綾杉文を持つものが主体を占めている。14は結節縄文である。

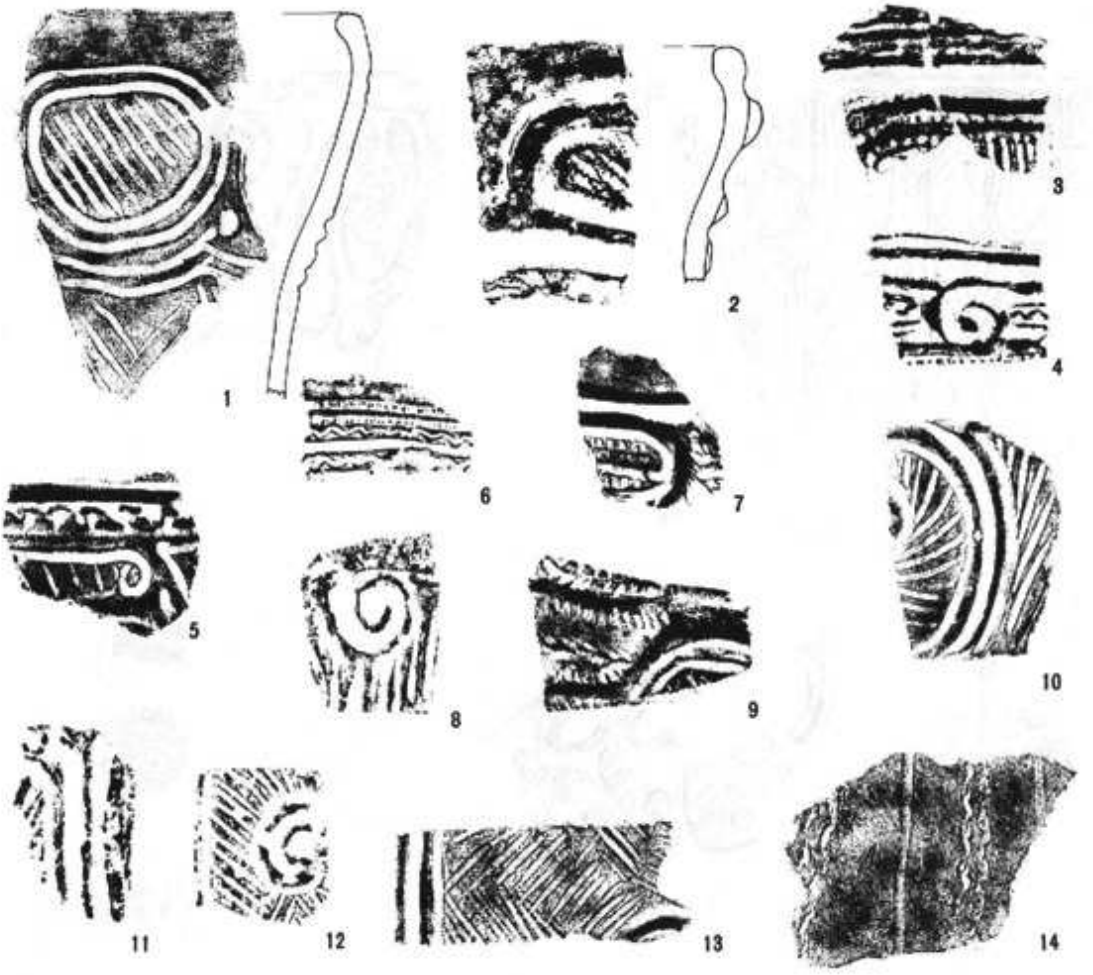
15、16はともに埋甕である。15は埋甕1で口唇部を大部分欠いている。隆帯を2条めぐらし、隆帯をせり上がらせて5個の突起を持つものと思われる。胴部は、隆帯による、人形文やワラビ手文を5個ずつ配して内部を綾杉文が埋めている。砂粒を多量に含んで黄褐色に焼かれている。外面にも炭化の付着が認められる。

16は埋甕2で口唇部が強く内屈しワラビ手文を持つ4個の突起がみられ、内部に波状文を持つ方形文が隆帯によって表出され、胴部はやはり隆帯による懸垂文、ワラビ手文が配され、細沈線が斜走、横走して充填する。砂粒をやや含み茶褐色に焼かれている。内面は丹念なナデ調整がみられる。

17は台付の杯形土器で強く内屈する口縁には、環状の把手が1個つけられ、後3箇所には、馬鈴形状の突起がつけられる。胴部文様は16と同じである。台部の一部がみられるが形は不明である。雲母・砂粒を含み黄褐色に焼かれている。

18は筒形土器で網代底である。櫛歯状工具による沈線が器面を埋めている。19は深鉢形土器の胴部で縄文地に懸垂文と蛇行文が交互に配される。

27はP_3の上部からたおれ込む状態で出土した吊手土器である。一部ブリッチを欠いているためはっきりしないが結合しないものと思われる。連続刺突文によって器面全体が飾られている。ぶ厚くどっしりとした土器である。ブリッチの結合しないものは、この時期には往々にしてみられ、高森町増子新切遺跡D37号住居址、駒ケ根市飯坂遺跡出土（未発表資料）例がある。ともに本例同様刺突文によって施文されている。

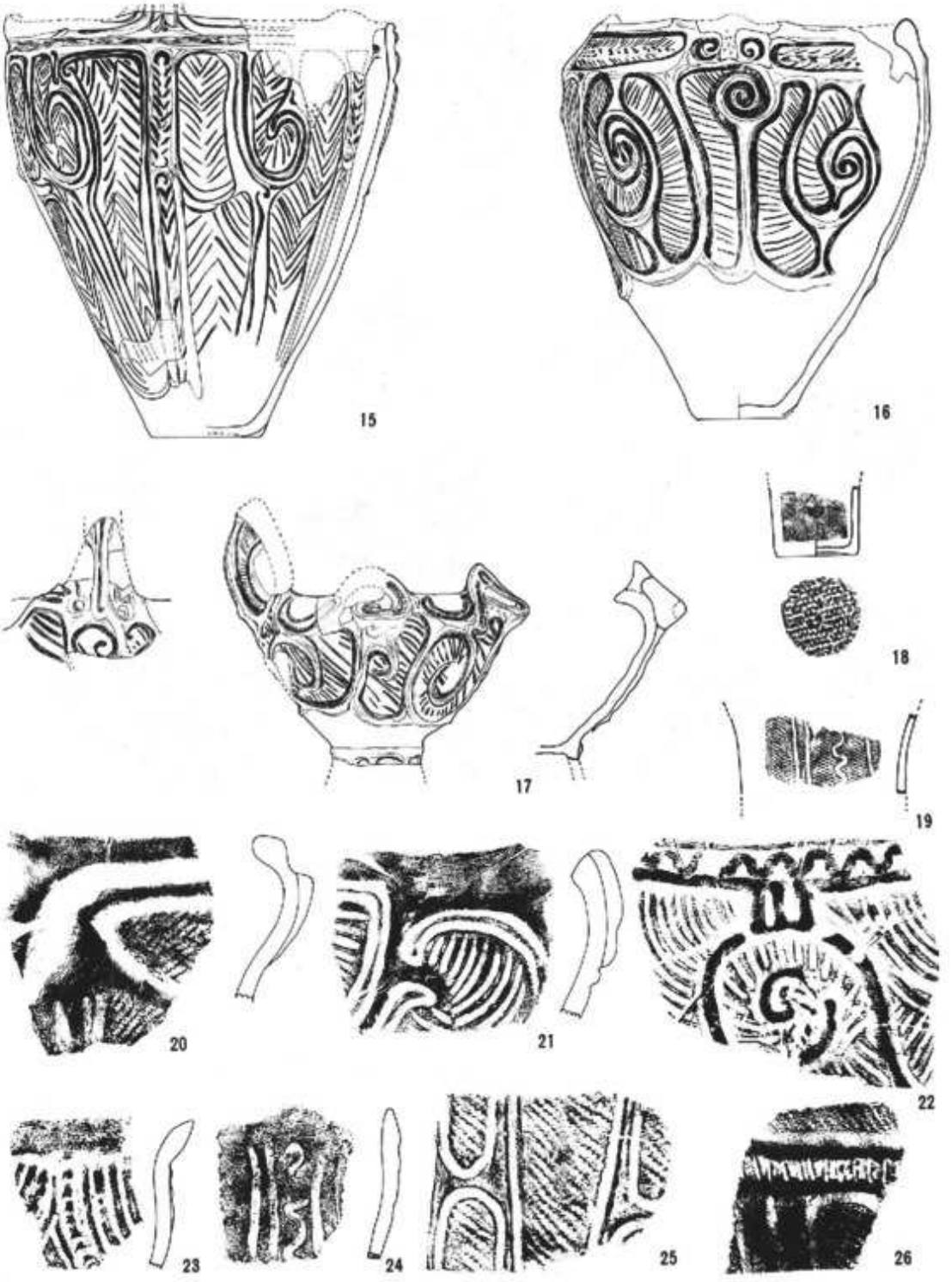


第70図　第Ⅶ地点第19住号址覆土出土土器（1/3）

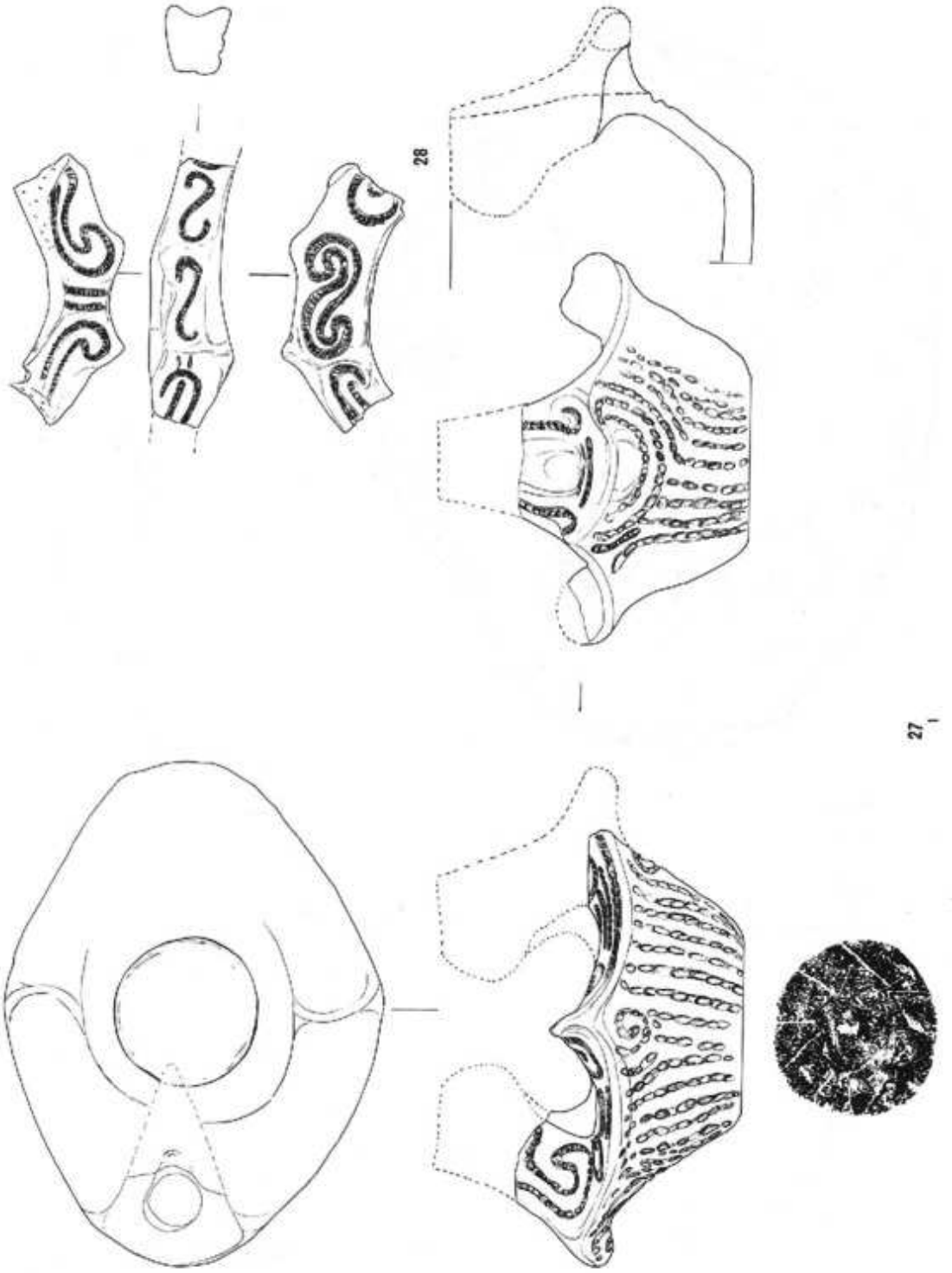
28は吊手土器のブリッチ部である。

20～26は深鉢形土器ないし甕形土器の破片で、20、25、26は加曽利E式要素を持つものである。若干曽利Ⅲ式期に比定されるものがみられるが総じて曽利Ⅱ式期に属すると思われる。18は時期を決めがたいが先行するものである。

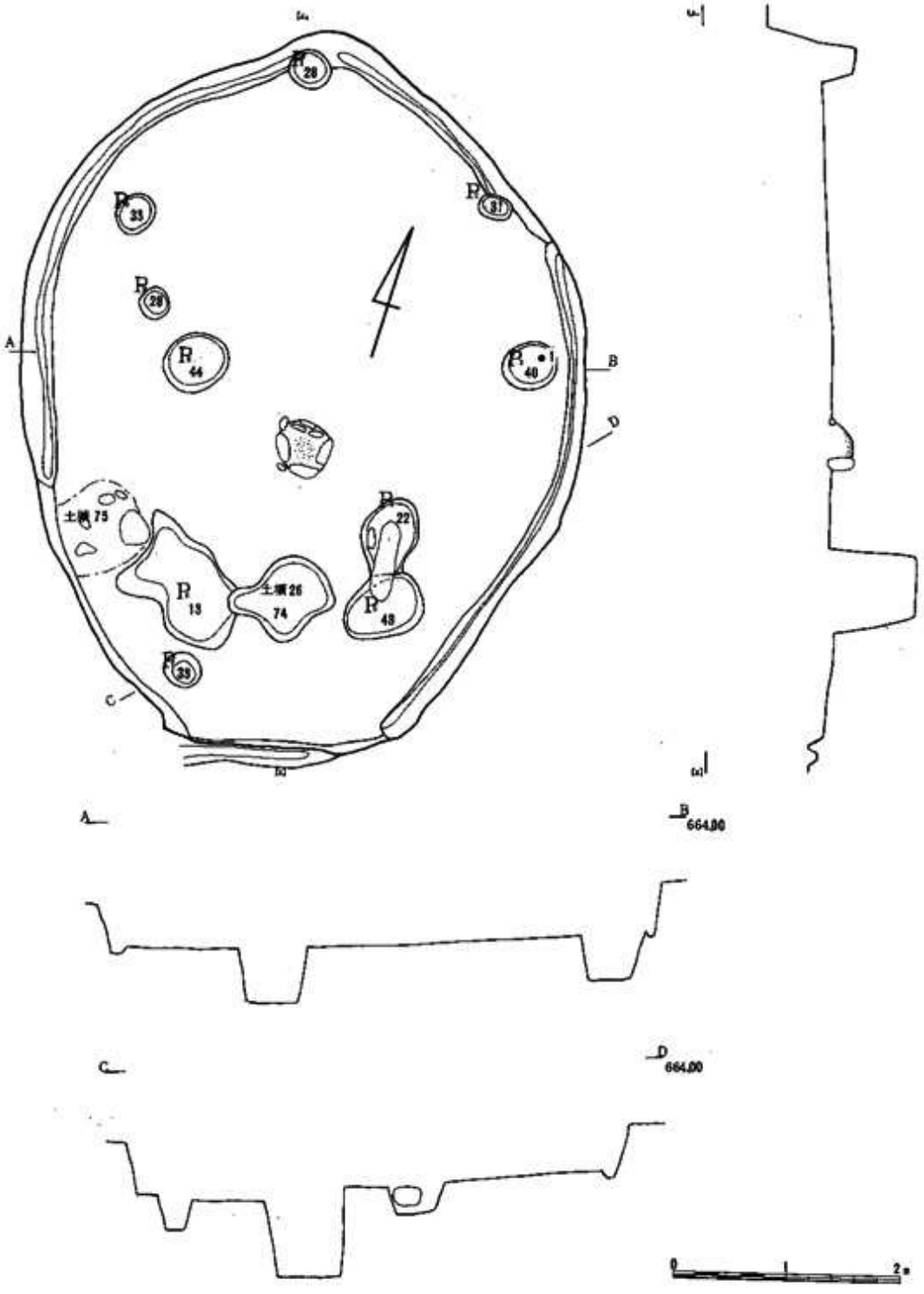
石器は66点出土しており、削器１点が覆土より出土しているほかはすべて床面出土である、床面出土65点の内訳は打製石斧22点、磨製の定角石斧・乳棒状石斧各１点、石錘２点、敲打器12点、特殊敲打器２点、磨石１点、特殊磨石３点、石皿１点、石棒１点、横刃形石器２点、石礫4点、円形掻器２点、削器１点、不定形石器10点である。他に覆土より剥片が５片、床面より68片と黒曜石製の石核１点が出土している。　（気賀沢　進）



第71図　第Ⅶ地点第19号住居址床面出土土器（15～19は1/6他は1/3、15は埋甕1、16は埋甕2）



第72図　第Ⅶ地点第19号住居址床面出土土器（1/3）



第73図　第Ⅶ地点第20号住居址実測図（S＝1/60）

19） 第20号住居址（第73・74・75図　図版22・42）

遺構（第73図　図版22）

当住居址は第19号・22号住居址の西にあり南には第21号住居址がある。南側は第22号住居址と接しており、壁は検出できなかった。

プランは長楕円形で大きさは6.3×5.0mを測る。炉の位置・形態からすると入口部は北西部と考えられ、主軸方向はS－15°－Eである。

壁は直に近く壁高は40cm前後である。第22号住居址との床面差は15cmである。床面は炉に向かってわずかに傾斜しており、固く良好である。

炉は中央南寄り位置し、小形の石組炉である。外形は50×50cmでほぼ円形、内形は25×25～30cmで、南側がやや開いた台形状をなしている。西側は小さな石を3個横長にすえ他より若干低くなっている。他の3方は平盤な自然石を縦長に用いている。掘り込みは深く23cmほどである。

柱穴はP_1・P_3・P_5・P_7・P_8・P_{10}の6本と考えられる。P_4とP_5の上部に細長い硬砂岩が倒れ込で出土している。石柱として立っていた可能性もある。

南西部を除いて周溝がめぐっている。P_3の内部より深鉢形土器（第74図-1）が出土している。

遺物（第74・75図　図版42）

土器は多く出土している。土器の外に土偶の頭部が3点出土している。

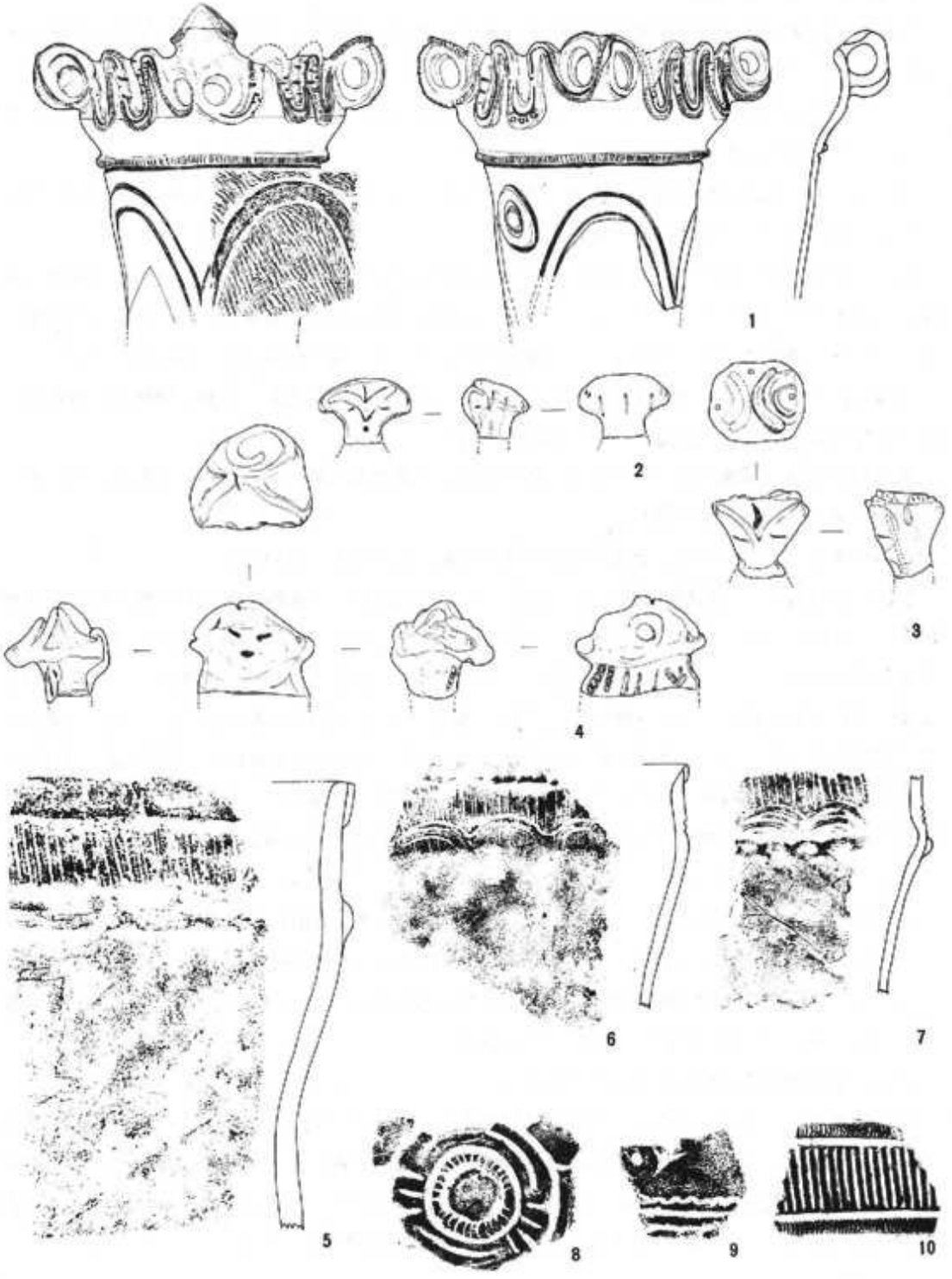
1はP_9より出土した深鉢形土器で胴下半部を欠く。内屈する口縁部にみみずく状の把手を4個配す。その内1つは上部に中空の突起を加飾させている。把手の間は隆帯を2回と3回とにくねらせ抽象文を表出している。頸部に隆帯を1条めぐらし、胴部には偏平な隆帯によって、円形文1個と逆U字文を配して粗目の縄文で充填する。整形は丹念に行われ固く焼かれ、一見して他の土器と相違をみせている。同様な土器が当遺跡においてみられる。諏訪地方からの移入品であろう。

出土量のわりには復原できるものは少なかった。5～7は、頸部がくの字に内屈する深鉢形土器で復合口縁である。竹管具による口縁部文様と隆帯の指頭等による連鎖又はこの時期特有のものである。半肉彫りやキャタピラ文を持つものが主体をなしている。

2～4は土偶の頭部である。2、3は粘土紐によって顔面文様を表出し目は切れ長である。3は髪を分けているのか粘土紐によるX字文がみられる。頭部にみられる小孔は髪飾りを表現しているのであろうか。4は2，3とやや趣を異にしている。幅広な顔面にはえくぼ状に凹みをつけている。髪はたばねて巻いている。3点とも雲母を含んでいる。

出土土器は藤内Ⅰ式期比定されるであろう。

石器は覆土より10点、床面より30点の計40点出土している。他に剥片が覆土より14片、床面より65片出土している。覆土10点の内訳は打製石斧4点、敲打器5点、特殊磨石1点である。床面30点の内訳は打製石斧12点、磨製の定角石斧・蛤刃石斧各1点、大形石匙1点、石錘1点、敲打器4点、凹石1点、横刃形石器2点、削器1点、不定形石器6点である。　（気賀沢　進）



第74図　第Ⅶ地点第20号住居址床面出土土器及び土製品（1は1/6他は1/3）